

平成 27 年度～令和元年度  
文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

---

「バレエ情報センター機能の構築」

# 報告書

学校法人 東成学園  
昭和音楽大学 バレエ研究所



平成 27 年度～令和元年度  
文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

---

「バレエ情報センター機能の構築」

# 報告書

学校法人 東成学園  
昭和音楽大学 バレエ研究所





## はじめに

日本に初めてバレエが紹介されて以来 100 年余りの時が流れ、現在ではバレエは日本の文化の一部として定着していると言えるでしょう。バレエ教育の面では、バレエを学習する人々が年齢を問わず日本全国に拡がると同時に、世界的に活躍するトップダンサーたちが多数輩出しております。公演活動からみても、戦後を中心に数々の日本初演作品の上演を積み重ね、日本のバレエ団公演から世界有数のバレエ団による来日公演まで、国内で様々な質の高い公演活動が活発に行われるまでに成長を遂げました。

しかしその一方で、日本のバレエ研究においては、「資料拠点の不在」と「基礎データの不足」という 2 点が問題として指摘されてまいりました。一つ目は、こうした我が国のバレエ発展の大部分を民間が担ってきたことにより、集約的にバレエ関連の情報やプログラム等の資料を管理する組織が存在しなかったために、小規模に分散されて関連団体に保管されているか、または未整理のまま個人宅に保存されている、という現状です。二つ目は、「全国バレエ学習者総数」等といった、バレエに対象を絞った客観的な根拠となる基礎データが不在で、研究を進める際の障害となる、という点だと言えます。

昭和音楽大学バレエ研究所では、上記の問題解決に向けて 2015 年度より 5 か年にわたり、文部科学省による「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」補助を受け、「バレエ情報センター機能の構築」を目指すプロジェクトを実施いたしました。これは、バレエに関する資料や基礎データ等を一元的に収集・公開するバレエ情報センターを設立し、日本におけるバレエ研究の拠点形成を目指すものです。さらに、バレエ研究のみならず、バレエ公演等の現場にも有用となるアーカイブを構築し、日本バレエ界の一層の発展に資することを目的といたしました。

本プロジェクトは次の 3 つのグループに分かれ、バレエ資料やバレエに関するデータについて、実用面にも留意しながら多角的な調査・分析を行いました。

### 1. バレエ情報・資料整理グループ

バレエに関する書籍、公演プログラム、雑誌、視聴覚資料、その他資料を、専門知識を踏まえて一元的に収集・整理する。

### 2. デジタルアーカイブグループ

バレエデジタルアーカイブの構築を行う。

### 3. バレエ環境調査グループ

全国のバレエ教室数、バレエ学習者数等、バレエに関する全国的な全数調査などを実施し、研究の基礎データを提供する。

## はじめに

本プロジェクトを遂行するなかであらためて感じたことは、様々な研究分野でも言われているように、資料や基礎データの収集並びに管理は、地道な活動の継続が不可欠であるという点です。このたびの5か年は重要な期間として位置づけられたとはいえ、それだけで完結するものではなく今後の継続も見越していくことが求められるでしょう。もうひとつは、このプロジェクトの成果が今後のバレエ研究に役立てられることを願うのはもちろんですが、さらに教育や公演活動の実践的な現場にも生かされてほしい、ひいては一般の方々にむけても興味深いものとなり、バレエの魅力を新しい形でより多くの皆様に届けられるものでありたい、と強く思うようになったことです。その意味でも、今回のプロジェクトにおけるデジタルアーカイブの重要性は特に大きく、研究が進行するにつれて様々な可能性と将来性を秘めたものとしてその意義を一層実感しております。

こうしてご報告の準備を進めているなか、折しも社会は新型コロナウイルス感染拡大を受け不安と混乱に陥っております。多数のバレエ教育機関が臨時閉鎖を余儀なくされ、また、政府による「イベント等の開催についての要請」が出されたこともあり、バレエ公演の多くもその他の劇場演目と同様にキャンセルされる事態となっております。個人的な意見となってしまうことをお許しいただくなら、日頃より芸術団体にとっては、一度のイベント（公演）開催より団体の存続が何より重要であり数倍困難を伴うことであると考えております。今回苦渋の決断を迫られたバレエ関係者にとっても、一時的な閉鎖や中止よりもその後の存続のほうが気がかりであり苦しめられることになるのではないかと懸念しております。継続することが持つ大きな価値とその難しさを感じるのは、私どもの活動においても同様であり、だからこそ一層このたびご報告申し上げるバレエ情報センターの機能が、日本のバレエ界全体に向けて少しでもお役に立ち、将来への歩みにご一緒に沿えるものでありたいと願っております。

最後になりましたが、本プロジェクトに温かいご理解とご協力を賜りました関係各位に心より御礼を申し上げます。

2020年3月

昭和音楽大学バレエ研究所所長

小山 久美

# 目 次

---

はじめに	1
第1章 研究の概要	7
第2章 調査・研究の記録	
〈バレエ情報・資料整理グループ〉	25
1. 概要	25
2. 国内外のダンス資料を扱うアーカイブに関する調査	26
3. 資料収集	29
4. 所蔵資料の管理	31
5. 保存環境の整備	36
6. 資料分類	38
7. オーラルヒストリー	39
資料A. バレエ情報・資料整理グループの作業記録	40
〈デジタルアーカイブグループ〉	41
1. 概要	41
2. データ入力	42
3. 所蔵資料のデジタル化	44
(参考) バレエアーカイブシステムの構築にあたって	47
1. はじめに	47
2. 目的	47
3. 課題調査	48
4. システムの構築とデータ整備	50
5. 公演記録の活用に向けた取り組み	57
6. おわりに	61
7. 参考資料	62
資料A. デジタルアーカイブグループの作業記録	67
〈バレエ環境調査グループ〉	69
1. 概要	69
2. 「バレエ教育に関する全国調査」の計画と実施	70
3. 「バレエ教育に関する全国調査」の集計と分析	73
4. 「全国バレエコンクール調査」の概要	92
5. 「海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査」の概要	97
資料A. バレエ環境調査グループの作業記録	99
資料B. 「バレエ教育に関する全国調査」本調査票	100
巻末資料	107
外部評価委員による評価	107



# 第1章 研究の概要

---



## 第1章 研究の概要

### (1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

#### 研究の背景

バレエ学習者約35万人を擁し、国際的に活躍するダンサーを数多く輩出する日本は、世界でも指折りのバレエ大国と言われる。しかし同時に日本におけるバレエ研究は問題を抱えている。そのひとつは中心的アーカイブの不在とアーカイブ整備の遅れである。アーカイブは芸術発展、研究振興に不可欠であるが、専門知識を持った職員の不在、採算性等の理由で運営が難しく、現在、日本において中心的なバレエアーカイブは存在しない。加えて日本においてはバレエの発展を長らく民間が担ってきたため、バレエ団の多くは組織として規模が小さく、人員の不足などからアーカイブまで手が回らないことがほとんどである。バレエに関する資料のほとんどは未整理の状態でご各バレエ団内に蓄積されており、そうした資料は保存・管理等の面でも、問題を抱えている。

昭和音楽大学バレエ研究所（以下バレエ研究所とする）は日本で唯一の大学附属バレエ研究機関である。数多くのバレエ資料を保存しており、また設立から今日まで培ったネットワークを活用し、国内外のバレエに関わる資料や情報を収集することが可能である。加えてすでにバレエに関する調査・研究を数多く行った実績もある。また専門的アーカイブを構築するために必要な、専門知識を持った職員が勤務している。

#### 計画の目的

以上の背景をふまえて本研究の目的は、バレエ関連資料やバレエに関する情報をバレエ研究所で一元的に集積・整理した上で公開し、国内でも有数のバレエ情報センターを構築し、バレエ研究の拠点形成する点にある。具体的にはバレエに関する情報や資料等をバレエ研究所に集積し、公開する。またバレエに関わる環境調査等を行い、それらの調査結果を公開する事業である。

バレエに関わる資料拠点や実証的なデータの欠如は、日本のバレエ研究において大きな障害となっていた。バレエ研究所は「バレエ情報センター機能の構築」事業を通じて、日本におけるバレエ研究とバレエ芸術の振興を図り、またひいては日本における舞台芸術振興に寄与することを目指した。

#### 計画の概要

本研究の目的は、バレエにおける資料や情報をバレエ研究所に集積し、専門知識を有する研究員や所員が整理したうえで、広く公開することで、日本におけるバレエ研究、またバレエ発展の一助とすることである。

図1のとおり収集する情報や資料は大別して、以下の4種類に分かれる。(1) バレエ公演

## 第1章 研究の概要

プログラム、(2) バレエ関連の専門書・雑誌・楽譜など、(3) バレエに関する環境調査結果、(4) その他バレエ関連の資料（ブロマイドなど）である。(1) の公演プログラムに関しては、バレエ研究所が事業前から所蔵している山野博大氏寄贈公演プログラムコレクション約1万点等を基礎としながら、収集の足りない年代やバレエ団、重要公演のプログラムを割り出し、コレクションを拡充した。(2) のバレエ関連専門書に関しては、バレエ研究所には事業前からバレエに関する和書、洋書があった。しかし必要と思われながらも所蔵されていない書籍も多数存在した。言い換えれば網羅性という点で問題があった。よって収集が必要と思われる書籍や資料を購入し、また関係者から寄贈を受け入れるなどの活動を行った。(3) の環境調査に関しては、バレエ学習者数などの全数調査を行った。(4) のその他バレエ関連資料に関しては、ブロマイド等を、主に関係者からの寄贈によって収集した。

また本研究ではアーカイブ対象をバレエに関する情報、紙資料、視聴覚資料とし、博物館的資料（衣装、舞台装置等）は収集対象から除外した。

上記4種類の資料や情報に関して、①昭和音楽大学バレエアーカイブと、②昭和音楽大学デジタルバレエアーカイブ及びバレエ研究所ウェブサイトという2種類の方法で公開することとした。①は、利用者が実際にバレエ研究所を訪れて資料を閲覧する方法であり、②は、オンライン上で、利用者がいつでもどこからでも、バレエ情報にアクセスできる方法である。



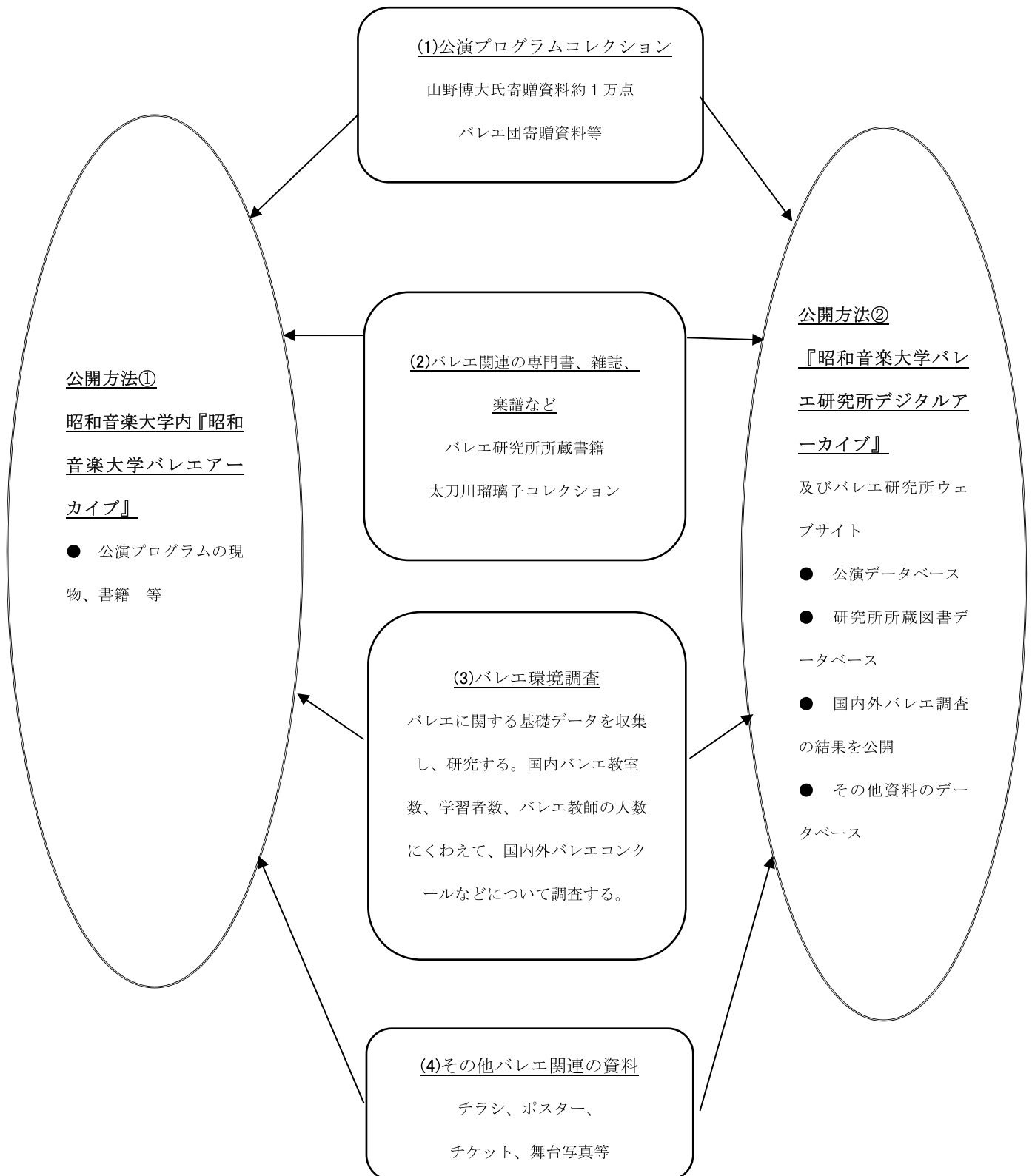


図1 計画の概要

## 第1章 研究の概要

また上記の計画を実行するため、バレエ、舞台芸術、芸術運営、情報学の専門家で構成される組織を作った（詳細は表1を参照）。以下のとおり3つのグループを設け、それぞれのグループに研究員を配置し、研究を行った。

**バレエ情報・資料整理グループ**：バレエに関する資料を収集するグループである。具体的にはバレエに関する書籍、公演プログラム、視聴覚資料等を、バレエ研究所内に計画的かつ効率よく収集することを目的としている。バレエ研究所は本事業以前からバレエ公演プログラム約1万点を所蔵していた。また貴重書も含めた、バレエに関する書籍や視聴覚資料も多数所蔵していた。しかしながらコレクションとして鑑みた場合、網羅性の点で、拡充が必要な年代や地域、分野など多くあった。研究所がすでに所蔵していたコレクションを元としながら、バレエ資料の一大拠点構築のために、網羅的に資料の拡充を行った。また資料の保存や管理の見直し、また資料の分類なども行った。

**デジタルアーカイブグループ**：本グループはバレエ情報に関するデジタルアーカイブ構築が目的である。バレエ研究所は本事業以前から「バレエ情報総合データベース」を公開していたが、検索が機能していない、検索に時間がかかりすぎるなど、実用面で深刻な欠陥があった。よって本研究をもってデータベースのデータモデルから見直し、新たにアーカイブ設計を行い、世界でも有数のバレエ公演デジタルアーカイブを構築した。またバレエ研究所が所蔵する書籍や視聴覚資料等に関しても、オンラインで蔵書検索ができる、検索システムを構築した。

**バレエ環境調査グループ**：バレエ環境に関して調査・研究を行い、結果を公開することが目的のグループである。日本におけるバレエ教育に関する全国調査、全国バレエコンクール調査、海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査等が含まれている。

### 年次計画

以下のとおり年次計画を立て、5ヵ年ではぼ計画どおりに事業を進めた。

**平成27年度**：研究組織の確立、バレエ研究所所蔵資料の確認と整理、国内外のバレエ情報に関わるアーカイブに関する調査、デジタルアーカイブのデータ基盤構築（1年目）、国内外バレエ環境に関する調査（1年目）

**平成28年度**：デジタルアーカイブのデータ基盤構築（2年目）、国内外バレエ環境に関する調査（2年目）、所蔵資料の拡充（1年目）、所蔵資料のデータ入力・デジタル化（1年目）

平成29年度：国内外バレエ環境に関する調査（3年目）、所蔵資料の拡充（2年目）、所蔵資料のデータ入力、デジタル化（2年目）、バレエ情報を元とした企画展の開催（1度目）、研究成果の中間報告

平成30年度：国内外バレエ環境に関する調査（4年目）、所蔵資料の拡充（3年目）、アーカイブ公開方法の検討、所蔵資料のデータ入力、デジタル化（3年目）

令和元年度：国内外バレエ環境に関する調査（5年目）、所蔵資料のデータ入力、デジタル化（4年目）、バレエ情報を元とした企画展の開催（2度目）、アーカイブの完成・公開、研究成果の最終報告

## （2）研究組織

### 研究員

本プロジェクトの組織は表1のとおり11名の研究員で構成されている。昭和音楽大学教員5名、および学外研究者6名である。プロジェクト統括者はバレエ研究所 小山久美所長である。

平成27年の研究開始時点から、研究員の死去等に伴い、研究員の変更があった。昭和音楽大学 根木昭教授、また公益社団法人日本バレエ協会 薄井憲二会長は研究員であったが、それぞれ平成28年、平成29年にご逝去された。結果、以下の研究員一覧にはお名前が記載されていない。また国立情報学研究所 高野明彦教授に、情報学の第一人者として研究に加わって頂いた。

研究員はバレエや芸術運営の専門家だけでなく、デジタルアーカイブ構築の専門家、またバレエ団運営に携わる実務家等で構成されている。よって多角的で学際的な研究を行うことが可能となった。

本研究では、研究者だけでなくバレエダンサーやバレエ公演制作者、またバレエ評論家など、バレエに関わる多方面の関係者にとっても「使える」バレエ情報拠点構築を目指しており、本研究の組織体制もその目的を鑑みた結果である。

表1 プロジェクト研究員

小山 久美	昭和音楽大学バレエ研究所・所長
石田 麻子	昭和音楽大学オペラ研究所・所長
岩部 純子	昭和音楽大学音楽学部・専任講師
尾崎 瑠衣	昭和音楽大学バレエ研究所・研究員
小尻 健太	昭和音楽大学バレエ研究所・研究員
海野 敏	東洋大学社会学部・教授
大原 永子	新国立劇場・舞踊芸術監督
高野 明彦	国立情報学研究所・教授
高橋 典夫	一般社団法人日本バレエ団連盟・理事長
松澤 慶信	日本女子体育大学運動科学科・教授
溝上智恵子	筑波大学大学院図書館情報メディア研究科・教授

研究者は以下のとおり3つあるグループ（バレエ情報・資料整理グループ、デジタルアーカイブグループ、バレエ環境調査グループ）のいずれかに属し、運営を行った。グループごとに研究を進めると同時に、研究内容が有機的に結びつくよう、コミュニケーションを図った。

また研究全体を対象とする研究員会議を開催し、研究員同士での情報共有を図り、全体の意思決定を行った。バレエ研究所は調査研究を行うほか、各グループの報告を受けて、全体のとりまとめを行った。またバレエ研究所では事業運営に関わる事務、経理等も行った。

1. バレエ情報・資料整理グループ（尾崎、石田、溝上、大原、高橋、松澤）
2. デジタルアーカイブグループ（高野、小山、尾崎）
3. バレエ環境調査グループ（小山、海野、岩部、小尻、松澤）

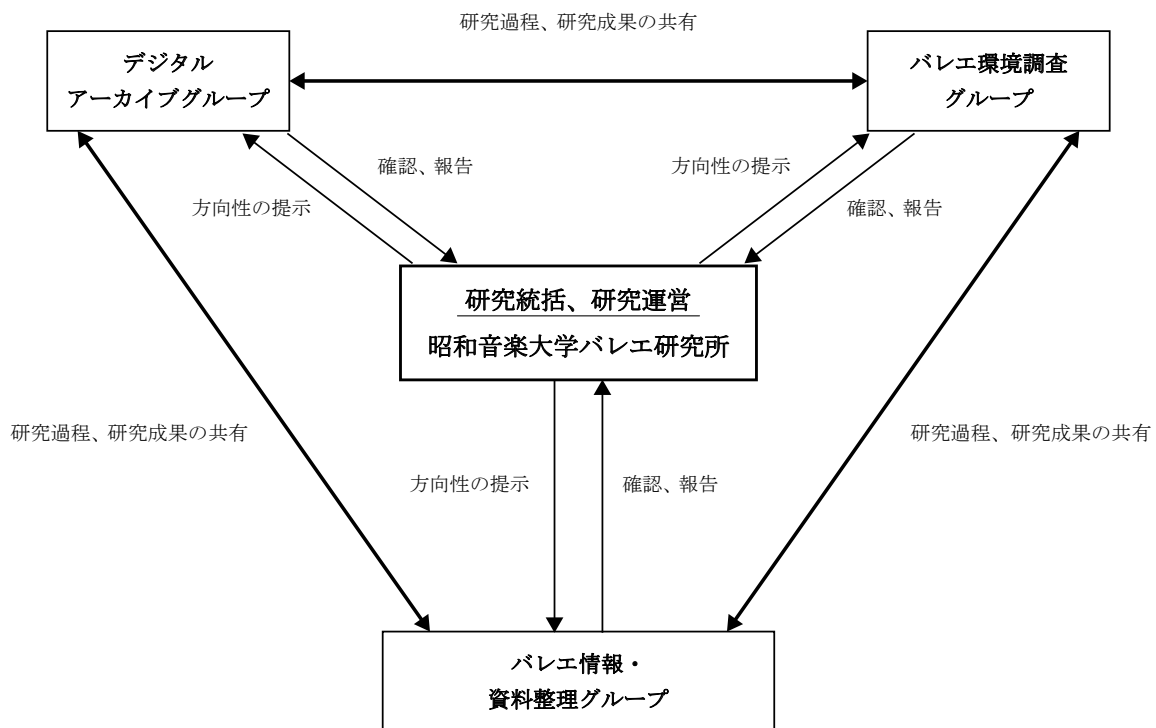


図2 研究組織の概要

### 協力団体

また以下2団体にも国内バレエ環境に関する調査において、本研究に協力いただいた。調査対象を日本全国とするため、全国に拠点を持つ業界団体の協力が不可欠であった。

公益社団法人 日本バレエ協会  
チャコット株式会社

### その他

本研究には20歳代前半から中盤のバレエに関する専門知識を持った学生等が携わった。バレエのアーカイブ化作業の現場に、20歳代前半の人材が携わることで、若手の育成につながった。

### (3) 研究施設・設備等

昭和音楽大学北校舎2階 昭和音楽大学バレエ研究所（神奈川県川崎市麻生区万福寺1丁目16-6）を拠点とする。面積は49㎡である。現在は所長1名、研究員1名、職員1名が在籍している。また学外研究員も必要に応じて本研究所を利用し、研究を行っている。

バレエ研究所内には資料保存のため専用資料保管庫、資料保存のためのアーカイバル容器、アーカイバルバインダー、アーカイバルホルダー、ドキュメントボックスを備えている。

またバレエ資料デジタル化のためのフラットベッドスキャナー1台とブックスキャナー1

## 第1章 研究の概要

台、カラー複合機1台、デスクトップPC、ラップトップPC、研究に必要なソフトウェア、資料公開のためのiPadが設置され、また使用されている。

### (4) 研究成果の概要

研究はほぼ当初の計画どおりに進み、各グループがそれぞれに成果を上げた。また各グループは緊密に連携を取り、その成果は昭和音楽大学バレエアーカイブ、昭和音楽大学デジタルバレエアーカイブ、バレエ教育に関する全国調査といったかたちで結実した。

#### グループごとの研究成果

##### 1. バレエ情報・資料整理グループ

本グループはアーカイブの基礎となるバレエ公演プログラム、バレエ関連書籍、視聴覚資料、またその他関連資料の収集を目的としたグループである。

###### 1.1 昭和音楽大学バレエアーカイブの構築・完成

バレエ研究所は国内唯一の大学付属バレエ研究機関であり、またバレエ関連資料を多数所蔵し、バレエに関する研究の実績もあった。しかしながら同時に、本事業以前はアーカイブとして鑑みた場合、所蔵資料に抜けが多く、また保存や管理も適切になされていなかった。本事業を通じて網羅的にバレエ資料の収集を行い、保存・管理を適切にすることで、バレエアーカイブを構築した。

###### 1.2 バレエ公演プログラム冊子の収集・整理

バレエ研究所は本事業以前から舞踊評論家山野博大氏から寄贈されたバレエ公演プログラム1万点をはじめとする、バレエ公演プログラムコレクションを所蔵していた。本コレクションは1940年代から現代に至るまでの貴重なバレエ公演に関する記録ではあるが、個人によるコレクションが元であるため、収集が不十分な年代や地域もあった。本事業ではコレクションを精査した上で、購入が可能なプログラムに関しては購入し、またバレエ関係者や愛好家に寄贈を呼び掛け、拡充を図った。またプログラムに付随するチケットやチラシ、配役表なども、公演に関する貴重な情報源として、収集・管理した。公演プログラムは年代別に保存ボックスで管理した。

###### 1.3 バレエ関連書籍・視聴覚資料等の収集

バレエ研究所は本事業以前から多くのバレエ関連書籍や視聴覚資料を所蔵していたが、同時に不足している分野や資料も多かった。所蔵資料を整理したのちに、新たに収集が必要な資料を精査する作業を行った。バレエに関する書籍の一覧を新たに作成した上で、バレエ研究所所蔵資料との照合を行った。本事業でコレクション拡充を行った結果、国内で

も有数の所蔵となった。またオーラルヒストリーの収集も行った。

#### 1.4 貴重コレクションの受け入れ

事業中に広く関係者に寄贈を呼び掛けた結果、日本バレエ史に名前を残すアーティストや関係者から、貴重なコレクションの寄贈があった。平成29年にはスターダンサーズ・バレエ団創設者太刀川瑠璃子氏が収集した新聞スクラップ、ブロマイドを受け入れた。

#### 1.5 保存環境の整備、劣化資料の修復

貴重資料保存のため、専用棚を購入し、研究所内に設置した。また効率的に保存できるように研究所全体のレイアウトを見直し、全体の配置を大幅に入れ替えた。管理番号を配し、管理を徹底した。また専用のアーカイバル容器を購入し、貴重資料を適切な容器で管理した。またブロマイド等はアーカイバルバインダーに収納し、汚染ガス吸着シートを資料の間に挟み込む作業を行った。また規格外サイズの貴重資料に関しては専用のスリムボックスで管理することとした。劣化の進んだ貴重書に関しては平成30年に専門業者に依頼し、保存修復手当を行った。

#### 1.6 資料分類の構築

バレエ関連資料は高度に専門的であるため、一般の図書館分類のみでは不十分である。音楽図書館や資料室の分類を参考としながら、所蔵資料を鑑みた上で、バレエ研究所独自のバレエ資料分類を構築した。分類を決定したのち、研究所の資料すべてを分類どおりに並べ替える作業を行った。

#### 1.7 昭和音楽大学バレエ研究所所蔵資料システムの構築・完成

バレエ研究所内に所蔵している資料データの管理システムを構築した。所蔵資料を整理したのち、管理番号を割り振った。Excelで資料のデータを入力し、その後、構築したシステムにデータを移行した。本システムの完成により、バレエ研究所所蔵資料をいつでもどこからでも検索することが可能になった。

#### 1.8 関係機関との提携強化

資料の収集を強化するために、国内バレエ団や海外バレエ団招へい元との提携関係強化を行い、バレエ公演プログラムの寄贈を受けた。また国内の音楽資料室等からも、重複した資料の譲渡などにおいて関係を強化した。

#### 1.9 国内外ダンスアーカイブに関する調査・研究

国内外のダンスアーカイブに関して調査・研究を行い、事業の方向性に反映させた。薄井憲二バレエコレクション特別展（横浜そごう美術館、平成30年12月）や薄井憲二バレ

## 第1章 研究の概要

エコレクション常設展（兵庫県立芸術文化センター、令和元年12月）の視察を行うほか、平成28年には世界で最も規模の大きいダンスアーカイブと言われるニューヨーク公共図書館ジェローム・ロビンズ・ダンス・アーカイブのダンスキュレーターと、ダンスアーカイブをめぐる可能性や問題点について意見交換を行った。

### 2. デジタルアーカイブグループ

本グループは日本のバレエ公演に関するデジタルアーカイブ構築を目的としたグループである。国立情報学研究所高野明彦研究室の技術支援を受けて研究を行った。

#### 2.1 昭和音楽大学デジタルバレエアーカイブの設計・完成

バレエ情報・資料整理グループで収集・整理したバレエ公演プログラムや付随資料を元に、1940年代から現代にいたるまでのバレエ公演情報をデータ化し、アーカイブ化した。結果、公演データが一カ所に集積され、検索できるようになり、利用者は日本におけるバレエ公演データにいつでも、どこからでもアクセスできるようになった。また本デジタルアーカイブでは作品の上演回数推移グラフを表示することなどが可能となった。またそれが社会で起きた出来事、バレエ界で起きた出来事と共に表示されるなど、デジタルアーカイブならではのデータの見せ方の工夫を多く行った。加えて人物や作品のマスターデータには、関連する書籍へのリンクをつけるなど、単なる公演データベースではなく、データを見せる工夫、つなげる工夫を随所に行った。

#### 2.2 企画展「日本におけるバランシン」の開催

（日時：平成29年8月5日・6日、場所：新国立劇場オペラパレスホワイエ）

平成29年8月、東京・初台の新国立劇場オペラパレスホワイエにて、20世紀を代表する振付家であるジョージ・バランシン（以下バランシンとする）に焦点を当てた企画展を開催した。本事業で収集したバレエ資料、また本事業で構築したデジタルアーカイブを活用して、日本におけるバランシン作品受容史に関する展示を行った。1940年代から現代に至るまでのバランシン作品上演件数の推移、バランシン作品演目別上演件数一覧、上演史年表パネル、バランシン作品の歴代上演会場マップ、ダンサーがバランシンについて語るオーラルヒストリー展示、ニューヨーク・シティ・バレエ団来日時の公演プログラム展示などの内容である。来場者は研究者や愛好家などが中心で、来場数は約1千人であった。会期中や会期後には、SNSを通じて、「面白い内容だった」、「同様の展示をまた開催して欲しい」等、数多くの好意的なコメントが寄せられた。



### 2.3 企画展「日本における『白鳥の湖』」の開催

(日時:平成31年4月27日・28日・29日、場所:東京文化会館大ホールホワイエ)

平成31年4月、東京・上野の東京文化会館の「上野の森バレエホリデイ」会場内にて、日本における『白鳥の湖』上演史に焦点を当てた企画展を開催した。内容は1940年代から現代にいたるまでの、日本における『白鳥の湖』上演件数推移グラフ、日本で初めて『白鳥の湖』全幕公演が行われた際の公演プログラムデジタル展示、1940年代から現代にいたるまでの『白鳥の湖』公演プログラム表紙一覧、全幕作品上演回数における『白鳥の湖』の割合に関するパネル展示などである。本展示では愛好家や研究者だけでなく、親子連れや若年層の来場も数多くあった。「上野の森バレエホリデイ」来場者は3日間で約8万1千人である。

### 2.4 データの入力作業（メタデータの拡充）

データベースの充実を図るために、本事業を通じて公演情報（イベント名、ダンサー名、主催者名、作品情報、関係者名、その他）入力を行った。メタデータの質を確保するために、データ入力はすべてバレエ研究所内で行った。所内スタッフが手作業で行ったため、本事業を通じて公演データ入力のノウハウが所内に蓄積された。

### 2.5 データの統合作業（マスターデータの作成）

バレエは外来語が多く、人名や作品名に表記ゆれが多く発生する。例えば振付家バランシンにはバランシン、バランシーン、バランシ、バランチンなど様々な表記があり、検索の際の障害となっていた。よって人名、作品名、バレエ団名、公演会場名等の固有名詞にはマスターデータを作成し、網羅的に検索することを可能とした。

### 2.6 バレエ資料のデジタル化

希少性の高いバレエ公演プログラムを選別し、撮影やスキャンなどでデジタル化を行った。特に1940年代、1950年代の公演プログラムに関しては希少性が高く、また資料が劣化していることから、デジタル化の必要があった。また公演プログラムに付随する配役表やチケットも、スキャナー等でデジタル化を行った。所内にフラットベッドスキャナー、ブックスキャナーを設置し、所内でもバレエ資料のデジタル化を行うことで、研究所内にデジタル化のノウハウを蓄積した。

### 2.7 パフォーミングアーツに関わるデジタルアーカイブやデータベースに関する調査

国内外におけるデジタルアーカイブの動向を把握し、本デジタルアーカイブの指針の参考とするため、パフォーミングアーツに関わるデジタルアーカイブのデータベースに関して調査を行った。また Japanese Association for Digital Humanities への出席（平成30年9月）、舞踊公演アーカイブに関する座談会（平成29年12月）、デジタル情報記録

## 第1章 研究の概要

管理協会公開講座への参加（平成29年5月）、デジタルアーカイブ学会への参加（平成29年7月、平成30年3月）等を通じて、デジタルアーカイブ構築やデータベースに関する最新の動向の把握に努めた。本調査の一部は2.8における学会発表に反映されている。

### 2.8 学会発表『日本のバレエ公演をデジタルアーカイブ化する』

本グループの研究成果に関して、令和元年12月14日、「人文科学とコンピューターシンポジウム（じんもんこん）」（場所:立命館大学大阪いばらきキャンパス）において、『日本のバレエ公演をデジタルアーカイブ化する』と題した学会発表を行った。

## 3. バレエ環境調査グループ

### 3.1 バレエ教育に関する全国調査2016（全数調査）

日本におけるバレエ学習者数、バレエ教室数、バレエ教師数、学習者男女比、レッスン内容等に関する全数調査を2016年に実施した。まず全国のバレエ教室を都道府県別に網羅的に調査し、ExcelとAccessでバレエ教室データベースを構築した。既存のバレエ教室情報に関しては確認と更新を行った。データベース上にある4,793件のバレエ教室すべてに調査票を送付した。回収率は32.5%だった。回収した調査票を精査・分析したのちに、統計的処理を行い、全国のバレエ学習者数、バレエ教師数、男子・女子別のバレエ学習数等を集計した。また本研究所は同様の調査を2011年9月に行っているため、本調査を行うことで、2011年の調査と比較して、日本におけるバレエ教育数の推移等を分析することが可能となった。

### 3.2 全国バレエコンクール調査2016（全数調査）

日本で初めて、全国のバレエコンクールを対象とした全数調査を実施した。日本で実施されているバレエコンクールについて網羅的に情報を収集し、データベースを作成した。そのデータベースを元に2015年に予備調査を行い、その結果を元として、2016年に本調査を行った。各バレエコンクール事務局に質問票を送付し、回答率は42%だった。本研究を通じて、日本におけるバレエコンクールの総数、バレエコンクール応募者総数、バレエコンクールの開催地分布、各バレエコンクールの創立年、審査内容や受賞者への褒賞等が、初めて明らかとなった。

### 3.3 海外バレエコンクールに関する調査

平成29年から平成30年にかけて、海外有名バレエ団に所属するダンサーに占める、海外の著名バレエコンクール受賞者の割合を調査した。

### 3.4 調査結果の公開（インターネット、パンフレット、学術論文）

本調査結果に関してはバレエ研究所ウェブサイト、パンフレットでその結果を公開し、

研究所 Twitter アカウントを通じて研究の一部を公開した。また 3. 1、3. 2 の研究に関しては、『音楽芸術マネジメント』Vol. 9 (2017 年 12 月)、『舞踊學』vol. 40 (2018 年 3 月) で学術論文として成果を発表した。

### 〈優れた成果が上がった点〉

#### 昭和音楽大学バレエ研究所デジタルアーカイブの構築

本事業を通じて構築された昭和音楽大学バレエ研究所デジタルアーカイブは、バレエや芸術の専門家だけでなく情報学の専門家や実務家が加わり、学際的な取り組みの元に構築された、世界的に見ても数少ないバレエ公演記録に関するデジタルアーカイブである。パフォーマンスはアーカイブ化、またデジタルアーカイブ化においては遅れた分野と言われていた。また公演データの扱いに関しても、記録を残す以上の取り組みをしているアーカイブは見受けられない。その現状において、昭和音楽大学バレエ研究所デジタルアーカイブは、1940 年代から現在までのバレエ公演データを扱うデータの継続性、関係者や群舞にいたるまで詳細な人名等の情報が含まれているというデータの大きさ等が特徴の、数少ないバレエ公演情報デジタルアーカイブのひとつである。また作品の上演件数の推移を 1940 年代から現代までグラフで見ることができ、またそれが年表と共に表示されるなど、「データの見せ方」にも様々な工夫をこらしたデジタルアーカイブでもある。本デジタルアーカイブは今後、国内・国外において、公演データを元にデジタルアーカイブを構築する際のモデルケースとなることが期待される。また今後、本事業で構築されたデジタルアーカイブを使って、例えば日本経済の動向とバレエ公演の動向の関係を研究するなど、学術的にも新たな取り組みを行うことが可能となるであろう。

#### 昭和音楽大学バレエアーカイブの構築

日本でバレエ研究を行う際、問題となることのひとつは資料拠点・情報拠点の不足であった。バレエに関する資料や情報は圧倒的に不足しており、研究者だけでなく関係者も、研究を進める上で困難が伴っていた。バレエ研究所は本事業を通じてバレエ関連の資料や情報を収集し、バレエ研究所内に、国内でも有数のバレエ資料の拠点を構築した。バレエ研究所におけるバレエ関連書籍や公演プログラム、視聴覚資料の所蔵点数は、本事業を通じて、日本でも随一となった。本アーカイブが関係者や研究者に活用されることで、日本におけるバレエ研究がさらに大きく発展することが期待される。

#### バレエ教育に関する全国調査

日本におけるバレエ学習者数、またバレエ教室数、男女比、年齢分布などは、本研究所の調査がほぼ唯一であり、同種の調査は存在しない。本調査の結果は学術論文だけでなく、広くメディア等にも使用され、日本におけるバレエ学習者規模等を知る際に必須のデータと考えられている。また本調査は 2 回目であり、1 回目から比較して学習者数の増減を測ること

## 第1章 研究の概要

が可能となった。

### バレエコンクールに関する全国調査

「日本のバレエ教育においてバレエコンクールの重要性が増している」というのはバレエ教育の現場で言われて来たことであるが、そのバレエコンクールの全体像である総数等は今まで把握されていなかった。本調査においては、その総数や創立年の分布など、今まで明らかとされなかったバレエコンクールの実態が明らかとなった。本調査の結果は学术论文のみでなく、メディア等でも利用されている。

### 〈課題となった点〉

昭和音楽大学バレエ研究所は一部のバレエ研究者やバレエ関係者に知られてはいるが、しかし広く親しまれているとは言い難い。本事業中においても資料の寄贈を募る際に、研究所の認知度の低さが課題となった。この問題に対処するため、バレエ研究所は平成29年と平成31年に企画展を開催するなどして認知度の向上に努めた。企画展は多くの来場者を得ることができ、また来場者によってSNS上でも企画展の様子が報告されるなど、一定の成果を収めることができた。事業終了後もSNSで発信を行うなどして引き続き研究所の認知度の向上に努める。

### 〈自己評価の実施結果と対応状況〉

昭和音楽大学が設置する点検評価委員会による自己点検・自己評価を毎年行った。以下のURLから自己点検、自己評価を見ることができる。

<https://www.tosei-showa-music.ac.jp/guide/information/check.html>

### 〈外部（第三者）評価の実施結果と対応状況〉

平成30年10月、12月に外部評価を行った。外部評価委員は長野由紀氏（舞踊評論家）、芳賀直子氏（舞踊史研究家）の2名である。外部評価委員による評価の詳細は本報告書巻末資料に記載されている。

外部評価委員による評価はおおむね非常に高かった。特に「バレエ資料・情報が不足している日本において、バレエ資料やバレエ情報の拠点を形成する」という事業の趣旨が理解され、高く評価された。

また対応状況に関しては、研究所の存在アピールをSNS等で行った。事業後も引き続きSNSを活用するなどして研究所の活動の周知に努める予定である。また他組織との協力体制構築に関しては、企画展開催の際などに協力体制を取るなど、さまざまな取り組みを行った。事業後は事業中に行った取り組みを元に、さらなる発展的な協力体制の構築を行う予定である。

**〈研究期間終了後の展望〉**

本事業を通じて構築した昭和音楽大学バレエ研究所デジタルアーカイブを、バレエ研究所事業として引き続き維持・発展させていくことを計画している。令和2年度は、公開されたデジタルアーカイブの修正、バレエ資料のさらなる収集、メタデータのさらなる入力と拡充、マスターデータの拡充を予定している。

**〈研究成果の副次的効果〉**

本研究の成果は学術論文だけでなく、広くテレビや新聞等のメディアでも利用された。また本研究を通じて、パフォーミングアーツを扱う資料室やバレエ関連団体等とも新たな関係を築くことができた。



## 第2章 調査・研究の記録

---





# バレエ情報・資料整理グループ

尾崎 瑠衣

(昭和音楽大学バレエ研究所研究員)

## 1. 概要

### 1.1 グループ活動概要

昭和音楽大学バレエ研究所は国内で唯一の大学付属バレエ研究所であり、またバレエに関する資料を所蔵している。バレエ研究所は本事業が開始する以前から多くのバレエ公演プログラム、バレエ関連書籍、視聴覚資料を所蔵していた。特にバレエ公演プログラムに関しては山野博大氏寄贈コレクション約 10,000 点、斉藤富夫氏寄贈コレクション約 700 点を所蔵しており、これは日本でも有数のバレエ公演プログラムコレクションだった。しかしながら研究所が所蔵する資料の大部分は個人による寄贈が中心であり、バレエアーカイブとして鑑みた場合、収集の足りない分野や年代等も多くあった。また劣化している資料も多く、資料保存の面で向上の必要があった。加えてコレクション公開という観点から考えた際に、資料分類の面で課題があった。本グループではそうした本研究所がアーカイブとして抱える問題を資料収集の面から解決し、研究所内に日本でも有数のバレエ資料コレクションを構築することを目的とした。バレエに関する資料は博物館的資料、すなわち衣装や美術等と、紙の図書館的資料、すなわち書籍や公演プログラム等の 2 つに大別ができるが、検討の結果、本事業では紙の資料の収集・保存・管理を対象とすることとした。

また本グループの活動はデジタルアーカイブグループの活動と特に緊密に連動している。デジタルアーカイブグループが扱うデータの典拠情報は、本グループで収集した紙のバレエ資料である。

本グループではまず国内外のダンスアーカイブやバレエ関連資料を多く収蔵する資料室等の調査を行い、本研究の指針を決定する際の参考とした。バレエ研究所所蔵資料の確認を行い、資料情報をデータ化した。またデジタルアーカイブグループと協力して資料管理データベースを構築した。同時に収集の必要のある資料を割り出し、収集を行った。寄贈の呼びかけを広く行い、寄贈を受け入れた。保存環境を整え、修復が必要な資料には修復を行った。またオーラルヒストリーの収集を行った。

## 2. 国内外のダンス資料を扱うアーカイブに関する調査

### 2.1 国内・国外のダンス資料を扱うアーカイブ

プロジェクト初年度と次年度にあたる平成27年度、平成28年度には、国内外のバレエ資料を扱うアーカイブの動向に関する調査を行った。舞踊のなかでも特にバレエやコンテンポラリーダンス等に関して所蔵資料が多いアーカイブに着目した。各アーカイブのバレエやコンテンポラリーダンス等に関する具体的な所蔵内容を調査し、昭和音楽大学バレエ研究所バレエアーカイブの指針を決定する際に参考とした。結果、国内・国外のダンスアーカイブ全体から鑑みたバレエ研究所コレクションの立ち位置を図ることができ、戦略的なコレクション拡充につなげることができた。

表1 国内外におけるバレエやコンテンポラリーダンスに関する所蔵の多いアーカイブ  
国内

名称	設立年	場所	コレクションの内容や特徴
慶應義塾大学土方巽アーカイブ	1998年	東京都港区三田	日本のパフォーマー、振付家である土方巽に関するアーカイブである。特に舞踏についてのアーカイブとしては世界的に有名である。
国立国会図書館東京本館人文総合情報室 蘆原英了コレクション		東京都千代田区永田町	舞踊評論家蘆原英了の個人コレクションであり、国会図書館内で管理されている。洋書、楽譜、レコードなどがコレクションの中心である。
彩の国さいたま芸術劇場舞台芸術資料室		埼玉県さいたま市中央区	舞台芸術に関する書籍等が多数所蔵されている。
新国立劇場情報センター		東京都渋谷区本町	オペラ・バレエ・ダンス・演劇等に関して、書籍や映像を公開している。バレエでは新国立劇場バレエ団に関する資料が中心で、閲覧室では新国立劇場バレエ団公演の映像を見ることができる。

NPO 法人ダンス・ アーカイブ構想 大野一雄・慶人 アーカイヴ	2016年 (1989年より 大野一雄舞 踏研究所アー カイブ部門 として活動)	東京都品川区東 品川	日本のダンサー・振付家である大野一雄、 大野慶人に関するアーカイブである。関 連資料を所蔵するとともに、作品の上演 も行う。
東京文化会館音楽 資料室	1961年	東京都台東区上 野公園	クラシック音楽、オペラ、バレエに関す る音源資料、楽譜、映像資料、書籍を数 多く所蔵している。また1961年の東京 文化会館以来、文化会館で上演された公 演のプログラムも所蔵されている。
日本女子体育大学 附属図書館 舞踊 ライブラリー		東京都世田谷区 北烏山	舞踊全般に関する数多くの和書、洋書を 所蔵している。
兵庫県立芸術文化 センター 薄井憲 二バレエ・コレク ション		兵庫県西宮市高 松町	バレエ評論家・薄井憲二が収集したバレ エに関するコレクションである。ダン サー自筆の手紙やリトグラフなど、バレ エの博物館的資料においては、日本随一 の所蔵を誇る。また個人の収集したバレ エ・コレクションとしては世界でも有数 の規模である。兵庫県立情報センター内 では年間を通して常設展、企画展を開催 している。
早稲田大学坪内博 士記念演劇博物館	1928年	東京都新宿区 西早稲田	演劇博物館コレクションの一部として舞 踊があり、バレエに関する資料も含まれ ている。

国外

名称	設立年	場所	コレクションの内容や特徴
ニューヨーク公共図書館ジェローム・ロビンズ・ダンス部門	1944年	米国・ニューヨーク	ダンスに関するアーカイブでは世界一の規模を誇り、バレエに関しても、貴重資料を含むコレクションを収蔵している。デジタルアーカイブにおいても、オーラルヒストリーを中心に、様々な情報を公開している。
ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館劇場コレクション	1920年代に個人の寄贈により設立	英国・ロンドン	演劇、人形劇、ダンス、オペラ等、パフォーミングアーツに関して幅広く収蔵するコレクションである。コレクションのなかにバレエに関する資料も含まれている。

国外のダンス資料を扱うアーカイブに関しては、上記以外にも様々な機関がある。大規模なバレエ団のほとんどはバレエ団内にアーカイブ部門を備えており、バレエ団の歴史的資料を保管・公開している。英国ロイヤル・バレエ団に関してはロイヤル・オペラ・ハウスアーカイブ部門等、バレエ団やその劇場で上演された公演に関して、公演記録等々の保存を行っている。

## 2.2 昭和音楽大学バレエ研究所所蔵コレクションの特徴

以上の調査の結果より、昭和音楽大学バレエ研究所所蔵コレクションの特徴は以下4点であることが分かった。

第1に収集対象をダンスでなくバレエというダンスの1ジャンルに限定している点である。本研究所は舞踊ではなくバレエの研究所であり、ゆえに収集対象もバレエに関する資料が中心である。よって分野が限定されてはいるが、だからこそ専門性の高いコレクションを構築することが可能である。第2に収集対象の広さである。バレエという限定的なジャンルではあるが、収集対象は特定のバレエ団や劇場ではなく、日本全国におけるバレエ公演を対象としている。第3に本研究所の所蔵するバレエ公演プログラムコレクションは希少であり、日本におけるバレエ公演プログラムを当研究所ほどの規模で所蔵しているアーカイブは他にあまりない点である。第4にバレエに関する書籍や視聴覚資料に関しては、バレエ研究所の所蔵は、日本でも有数の所蔵数であることも確認した。

よって以上を鑑みた上で、資料収集にあたっては、本研究所が持っている強みを活かし、すでに収集が進んでいるバレエ公演プログラム、バレエ関連書籍や視聴覚資料等の資料のさ

らなる拡充に努めることとした。

同時に衣装、舞台美術等の博物館的資料に関しては事業以前からバレエ研究所に所蔵がなく、また収蔵スペースもないことから、収集対象から外すこととした。

## 3. 資料収集

### 3.1 資料の拡充

資料収集にあたっては新規購入、古書店からの購入、個人や団体からの寄贈により、コレクションの拡充を図った。

新規購入にあたっては優先順位を設けた。研究所であるため学術的な資料を優先し、児童書などは優先順位を下げた。また寄贈を積極的に募り、資料購入にかかる費用を下げる努力を行った。また古書の購入も行った。同時に全体予算を圧迫するような価格の高い貴重書は購入を見送った。

寄贈に関してはバレエ研究所が開催した企画展「日本におけるバランシン」（2017年8月5日、6日、新国立劇場オペラパレスホワイエ）、企画展「日本における『白鳥の湖』」（2019年4月27日、28日、29日、東京文化会館大ホールホワイエ）等においてチラシを配布し、広く寄贈を呼びかけた。また昭和音楽大学バレエ研究所 Twitter アカウント (@ ShowaBRC) でも寄贈を呼びかけた。その結果、バレエ関係者や愛好家、また資料室や企業から寄贈を受けることができた。

本事業を通じて、バレエ研究所は和書 696 冊、洋書 363 冊、DVD / ブルーレイ / CD 等 138 点を新たに獲得し、コレクションを大きく拡充することができた。本事業でコレクションに不足していた資料を獲得したことで、網羅的なコレクションを構築することができた。

### 3.2 資料別の収集状況

#### 書籍（和書）

バレエ研究所は本事業の前からバレエに関する和書、雑誌を 919 冊所蔵していたが、しかし網羅性の点で問題があった。本研究所に不足している資料を、図書館や様々なアーカイブ、またウェブサイト等から洗い出し、購入リストを作成した上で優先順位をつけ、網羅的に収集を行った。また関係者や愛好家からの寄贈も多く受け入れ、さらなる拡充を図った。結果、本事業を通じて、令和元年度には和書や和雑誌のコレクションは寄贈による重複等を含めて 1615 冊となり、日本でも有数のバレエに関する書籍コレクションを構築することができた。

#### 書籍（洋書）

バレエ研究所にはすでに洋書の蔵書があったが、しかし網羅的とは言い難いコレクション

## 第2章 調査・研究の記録

であった。バレエに関連する洋書に関して、さまざまなアーカイブを元に購入希望リストを作成し、優先順位をつけたのち、購入を行った。加えて英国のダンス関連書籍を出版する出版社ダンスブックスから一括してバレエに関する書籍の購入を行った。また関係者や愛好家にも広く寄贈を募った。結果、平成29年の太刀川瑠璃子コレクション受け入れにつながった。故・太刀川瑠璃子氏はバレエ団創設者であり、日本バレエ史に名前を残す人物である。太刀川氏が収集した数多くのバレエに関わる洋書の寄贈を受け入れることで、洋書コレクションのさらなる拡充を図ることができた。

本事業の結果、洋書は寄贈による重複等を含めて559冊となった。

### バレエに関するDVD、ブルーレイ、CD等

本事業が始まる以前から本研究所は363点のバレエ関連DVDやVHSを所蔵していた。しかし近年発売されたDVD等に関しては収蔵が少なかった。日本で販売されているバレエDVD、ブルーレイに関して情報を収集し、購入希望のDVDをリスト化し、優先順位をつけた上で購入を行った。またバレエレッスンで使用するレッスンピアノのCDに関して、新たに購入を行った。

結果、バレエ研究所のコレクションはDVD、ブルーレイ、CD等あわせて501点となった。

### バレエ公演プログラム

バレエ研究所では事業以前から非常に充実したバレエ公演プログラムコレクションを所蔵していたが、個人のコレクションであるため、収集が不足している地域や年代があった。公演プログラムは原則的に公演会場でしか購入できないため、過去の公演に関しては新規購入が難しい。よってバレエ団やバレエ団招へい元に寄贈を依頼すると同時に、愛好家や関係者からも広く寄贈を募ることとした。日本バレエ団連盟理事会でも公演プログラムの寄贈を呼びかけるなど、様々な活動を行った。結果、コレクションを大きく拡充することができた。

### その他

バレエ関係資料の寄贈を呼び掛けた結果、バレエ関係者や愛好家より、新聞の切り抜き、ブロマイド、バレエ公演写真等の寄贈を新たに受け入れた。

## 4. 所蔵資料の管理

### 4.1 資料種別

平成 27 年度よりバレエ研究所がすでに所蔵している未整理の資料の確認と整理を行った。資料は以下のとおり資料種別に分け、管理を行うこととした。

- ・書籍（和書） ※ 辞書等を含む
- ・書籍（洋書） ※ 英語、フランス語、ロシア語書籍を含む
- ・映像／音源（DVD、ブルーレイ、CD、VHS）
- ・楽譜
- ・バレエ公演プログラム
- ・その他公演プログラム

### 4.2 資料管理システム

以上の資料に関して、以下表 2 のとおりの管理方法で管理した。書籍（和書）、書籍（洋書）、映像・音源、楽譜、その他資料はマイクロソフト Excel 上で資料情報の入力を行った。また公演プログラム管理は Excel ではなく、デジタルアーカイブ内に管理機能を設けることとした。データの入力はすべて手作業で行った。

表 2 資料種別と資料データ管理方法

資料種別	資料データ管理方法
書籍（和書）	バレエ研究所所蔵資料 Excel
書籍（洋書）	バレエ研究所所蔵資料 Excel
映像／音源	バレエ研究所所蔵資料 Excel
楽譜	バレエ研究所所蔵資料 Excel
バレエ公演プログラム	デジタルアーカイブ内資料管理システム
その他公演プログラム	デジタルアーカイブ内資料管理システム

### 4.3 入力項目

データ入力あたって、入力項目は以下とした。

#### 和書

- ・書名（タイトル）
- ・著者名
- ・出版社所在地
- ・出版社
- ・出版年
- ・ISBN
- ・ASIN
- ・注記
- ・購入区分

#### 洋書

- ・書名（タイトル）
- ・著者名
- ・出版社所在地
- ・出版社
- ・出版年
- ・ISBN
- ・ASIN
- ・注記
- ・購入区分

#### 映像・音源

- ・資料形態
- ・タイトル
- ・発行元
- ・収録情報
- ・製品番号（JANコード）
- ・購入区分

#### 楽譜

- ・タイトル



- ・ 作者者
- ・ 版／エディション
- ・ 形態
- ・ 出版社所在地
- ・ 出版社
- ・ 出版年
- ・ 注記
- ・ 購入区分

プログラム冊子

- ・ 冊子名
- ・ 出版社
- ・ 発行年月日
- ・ 冊子形態
- ・ ページ数
- ・ 表紙カラー
- ・ 本体カラー
- ・ 備考

入力画面は以下図 1、2、3、4 のとおりである。また公演プログラム冊子管理に関してはデジタルアーカイブ上の公演データと連動している。よって図 5 はデジタルアーカイブ管理画面の一部である。

バレエ研究所 所蔵資料リスト(和書)						
※	タイトル	著者1	出版年月	ISBN	(ASIN)	注記(取替の場合は厚紙等)
726	演劇入門ブック ビジュアルで見える演技法	ジョン・ペリー 著	2014.5	978-4472404726	—	
727	足手組編習している人 集まれ! オペラ&バレエ・プロデューサーの魂のつぶ	依々木忠次 著	2009.2	978-4438231177	—	
728	クラシックバレエ 基礎技法と用語	リンカーン・カースタイン	1975.3	—	B000JA6C8A	
729	ステップ・バリエーション・バレエ・クラス	ロイ・セル・アカデミー・ダンシング	1997.4	978-4579206646	—	
730	バレエ教則本	ワグネル 著	1951.9	—	B000EEV7S	
731	バレエ創作ハンドブック-名作に見る振付と表現の技法-	ジョン・ロビンソン 著	1955.5	978-4466263081	—	
732	バレエ入門	横山はるひ 著	1951.7	—	B000BE5VG	
733	バレエ入門	三浦賢士	2000.11	978-4438230620	—	
734	バレエ表現のテクニク	ジョン・マッコネル 著	1998.2	978-4578551511	—	
735	バレエを楽しくするために-私のバレエ入門-	中川健之助	1992.6	978-4874631072	—	
736	ボリノイ・バレエの技法-ドセルール教則本による基礎と展開-	ムイセルール 著	1976.12	—	B0008VFEDY	
737	ワグネルのバレエ・レッスン	アクリドナ・ワグネル	2003.7	978-4438310072	—	
738	MAHAM GRAPHICS プリマ・ピエール-高下洋子	清水正夫	1984.1	978-4000084024	—	
739	音楽の友 別冊 バレエの本	高柳守雄	1984.11	—	—	02130-11
740	ショパールの舞 続バレエなるほどおもしろ読本	小倉重夫	1986.6	—	—	04590-5
741	ショパールの舞 バレエなるほど面白読本	小倉重夫	1985.6	—	—	04590-6
742	バレエの世界 舞を創る・観る	清水哲太郎	1983.2	978-4062006227	—	
743	バレエの音楽	高下洋子	1984.5	978-4284730638	—	
744	バレエの音楽 続	高下洋子	1983.3	—	—	
745	ペーパームーン ニジンスキー 舞への飛翔	白石征	1981.5	978-4438600142	—	B0008VPE8
746	ペーパームーン ペーパームーン&ジョルジュ・ダン 舞のボレロ	白石征	1983.3	978-4438600173	—	
747	ペーパームーン&ジョルジュ・ダン 舞のボレロ	高柳守雄	1985.1	—	—	02130-10
748	わがバレエダンサー ダンスが大好き!	バリー・ゴットバチョフ	2015.5	978-4806214008	—	
749	舞踊年鑑2014	日本バレエ協会	2015.3	—	—	
750	311情報学 メディアは何をどう捉えたか	高野明彦	2012.8	978-4000395285	—	
751	劇場通り	タマラ・カルワーツィナ	1993.2	978-4438230257	—	
752	舞臺の新地平	高野明彦	2015.4	978-4048339888	—	
753	舞臺のスポーティライフ-20013	福川スボーツ財団	2013.12	978-4815944543	—	
754	ワグネルの音楽のバレエ	クリス・ワグネル・ボームント	1992.12	978-4438230240	—	
755	新編舞踊経緯書 第七版	山田幸雄	—	978-4395131078	—	
756	スポーツライフ-20014	福川スボーツ財団	2014.12	978-4815944574	—	
757	舞臺のスポーティライフ-20015	福川スボーツ財団	2015.12	978-4815944590	—	
758	バレエの音楽 vol.01	文庫社編	2015.4	978-4893562773	—	
759	バレエの音楽 vol.02	文庫社編	2015.7	978-4893562801	—	
760	バレエの音楽 vol.03	文庫社編	2015.12	978-4893562827	—	
761	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 91 VOL.5-5	テス・カルチャーセンター	1981	—	—	雑誌ISSN0007-6966
762	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 91 VOL.5-6	テス・カルチャーセンター	1981	—	—	雑誌ISSN0007-6966
763	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 92 VOL.6-1	テス・カルチャーセンター	1982	—	—	雑誌ISSN0007-6966
764	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 92 VOL.6-2	テス・カルチャーセンター	1982	—	—	雑誌ISSN0007-6966
765	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 92 VOL.6-4	テス・カルチャーセンター	1982	—	—	雑誌ISSN0007-6966
766	ballet & dance The TES Graphic 隔月刊 92 VOL.6-5	テス・カルチャーセンター	1982	—	—	雑誌ISSN0007-6966

図 1 和書データ入力画面



書誌情報		所蔵情報 (1)	
<b>公開情報</b> <span style="float: right;">公開 - 校了 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">☰</span></span>			
ID	Br: 6876		
プログラム冊子名	Daiwa House PRESENTS Coppéria TetsuyaKumakawa K-BALLET COMPANY Spring2018		
プログラム冊子名 (原語)	-		
出版者	株式会社TBSテレビ		
発行年月日	(未記載)		
冊子形態	パンフレット		
ページ数	[2000050] ノンブルなし25枚 ※巻末に11ページ広告掲載あり		
表紙カラー	フルカラー		
本体カラー	フルカラー		
サイズ	-		
備考	※昭和音楽大学バレエ研究所所蔵資料		
<b>管理情報</b> <span style="float: right;">[詳細]</span>			

図5 公演プログラム冊子データ管理画面

## 4.4 OPAC の作成

バレエ研究所の所蔵する書籍等の資料を管理するため、令和元年に専用の OPAC をデジタルアーカイブグループと共同で作成した。Excel 上で作成した書籍（和書）、書籍（洋書）、映像・音源資料、楽譜に関する管理データを OPAC に移行し、図 6、図 7 のとおり OPAC でデータを管理・公開することとした。



SPINOLOGO  
昭和音楽大学バレエ研究所

---

### バレエ関連文献蔵書データベース

**蔵書検索**

キーワード

書名

著者名

出版者等

ISBN

メディア種別  指定なし  図書  雑誌  映像  音源  楽譜

**カテゴリー**

バレエの歴史 (2456)

**タグ**

▶ 戦国 (1) ▶ アイス (1) ▶ 舞臺 (1) ▶ 団子 (1) ▶ 参考文献 (1)

図6 OPAC 公開画面



図7 OPAC 管理画面

## 5. 保存環境の整備

平成28年度より資料の保存環境整備を行った。まずバレエ研究所の所蔵スペースを確保し、効率良く資料を所蔵することができるよう、様々な取り組みを行った。また受け入れの時点で劣化が進んだ所蔵資料も多かったため、資料保存機器の整備や資料の保存修復を行った。

### 5.1 研究所内の環境整備

アーカイブにおいて所蔵スペースの確保は非常に重要である。平成27年、28年には、コレクションの拡大と収蔵の効率化に向けて、バレエ研究所内を整理し、動線を考えた上で、バレエ研究所内の環境整備を行った。効率的に資料を収蔵するため、専用の資料収納棚を使い、資料を収納した。また資料整理ボックスを使用し、資料管理を効率的に行えるよう取り組みを行った。公演プログラムは収納棚に入れて年代別に並べなおし、整理する作業を行った。

### 5.2 資料保存機器の整備

資料劣化を防ぐため、様々な取り組みを行った。

まず40年代、50年代の貴重プログラムはアーカイバルバインダーを20冊購入し、図8のとおりリフィルに入れて、収納棚にて管理した。特殊サイズの公演プログラムに関しては、劣化からプログラムを守るため、専用のオーダーメイド保存箱を購入して保存管理することとした。

またバレエ研究所は466枚のプロマイド（キャビネサイズ346枚、A4サイズ64枚、A4コピーサイズ56枚）を収蔵しており、6冊のアーカイバル専用バインダーを購入して収納した。また新聞記事の切り抜きは238枚あり、これらは6冊のアーカイバルバインダーに収納した。資料劣化を促進する有害ガスから資料を守るため、汚染ガス吸着シートを購入し、貴重な公演プログラムやプロマイド等すべてにシートを挟み込む作業を行った。



図8 アーカイバル専用バインダー

### 5.3 劣化資料の保存修復手当て

資料を調査した結果、表3の資料に関しては受け入れた時点で劣化が進んでいたため、修理が必要と判断した。専門業者に修復を依頼し、以下の書籍の保存修復手当てを行った。その上で、研究所では専用のケースを用意し、ケースにて管理した。

表3 修復手当てを行った資料一覧

タイトル	著者	出版年	出版社
バレエ：バレエを愛する人のために／アルスグラフ 第1集	蘆原英了編集	昭和26年	アルス
バレエ 名作の鑑賞	バレエ写真研究会	昭和28年	雄鶏社
家庭よみうり 1952年11月1日号		昭和27年	読売新聞社出版社
舞踏美論	蘆原英了訳編	昭和17年	小山書店
舞踏の美学的研究	小寺融吉	昭和23年	河内書店
Мастера балета	Ю. Слонимский	昭和12年	Искусство

### 修復例（蘆原英了編集『バレエ：バレエを愛する人のために』）

#### 修復前

以下図9のとおり背表紙がはがれ、また冊子を止める金具が腐食している。表紙から数ページは綴じから外れている。



図9 修復前の状態

#### 修復後

腐食した金具を除去したのち本体の綴じ直しを行った。結果、以下の図10のとおり、再び資料として利用することが可能となった。また新たに資料保存のケースを作成し、ケースに入れて管理することとした。



図10 修復後の状態

## 6. 資料分類

### 6.1 書籍の資料分類の決定

資料の性格が高度に専門的であるため、既存の図書館分類では対応しきれず、新たに資料の分類を作成する必要があった。他のアーカイブや図書館の分類を参考としながら、資料の分類方法について、平成27年度よりバレエ研究所所内で議論を行った。結果、収集した書

籍は2種類に分けることとした。第1に人文、すなわちバレエ史、ダンサーや振付家等の人物に関する伝記、バレエ作品論であり、第2に科学・実用、すなわちバレエメソッドや解剖学、またバレエ用語等に関するものである。所蔵するすべての資料を網羅するよう、以下の分類を構築した。

- 1：和書：人文（バレエ）
- 2：和書：科学・実用（バレエ）
- 3：和書：雑誌
- 4：和書：その他
- 5：洋書：人文（バレエ）
- 6：洋書：科学・実用（バレエ）
- 7：洋書：雑誌
- 8：洋書：その他

※「人文」：文学、歴史、伝記、作品論など

※「科学・実用」：バレエ用語、バレエメソッド、教育、科学、理学、医学、解剖学など

以上の分類に従って所内の資料を分け、また和書は著者名による五十音順、洋書は著者名によるアルファベット順に並べ替える作業を行った。

## 7. オーラルヒストリー

### 7.1 オーラルヒストリーの収集

バレエの歴史について、関係者にインタビューをしてオーラルヒストリーを収集した。バレエ研究所では平成20年度より、バレエ関係者に日本バレエ史についてインタビューを行い、オーラルヒストリーとして保存する活動を行っている。本事業ではそれを継続し、関係者への聞き取りを引き続き行った。前事業では文字で研究成果を残したが、本事業では将来デジタルアーカイブで動画を公開することを見据え、動画を中心に記録保存を行った。今後も収集を進め、デジタルアーカイブのコンテンツの一部とする予定である。

### 7.2 関係者へのインタビュー

平成29年に元ニューヨーク・シティ・バレエ団プリンシパルのベン・ヒューズ氏にインタビューを行い、昭和63年に行われたニューヨーク・シティ・バレエ団来日公演、また日本のバレエ団でバランシン作品に客演した経験等を伺った。動画でインタビューを記録保存し、日本語字幕をつけた。平成29年8月に開催した企画展「日本におけるバランシン」では、その動画を来場者へ公開した。

## 資料A. バレエ情報・資料整理グループの作業記録

### ・2015年

- 9月 バレエ研究所内レイアウトの見直し
- 10月 バレエ研究所所蔵資料の確認と整理を開始  
バレエやコンテンポラリーダンス資料を扱うアーカイブに関する調査開始

### ・2016年

- 4月 資料の保存・整理方法の検討開始
- 9月 バレエ研究所内の資料保存環境の見直し

### ・2017年

- 1月 書籍等の寄贈、受け入れ作業開始
- 2月 個人より51冊のバレエ雑誌・書籍の寄贈、受け入れ作業
- 5月 バレエ団より360冊の公演プログラムの寄贈、受け入れ作業
- 7月 オーラルヒスリー収集
- 8月 企画展「日本におけるバランシン」を開催。展示内においてチラシ「寄贈のお願い」を配布。またSNSでも寄贈の呼びかけ
- 9月 東京文化会館音楽資料室より15冊の公演プログラム等を寄贈、受け入れ作業
- 11月 個人より10冊のバレエ雑誌を寄贈、個人より77冊のバレエ雑誌・書籍の寄贈、受け入れ作業

### ・2018年

- 2月 個人よりバレエ書籍1冊を寄贈、受け入れ作業  
(同じ寄贈者より以降令和元年9月まで計46冊の貴重書を寄贈)、  
古書新書含む和書48冊購入、バレエ視聴覚資料56点購入
- 3月 古書新書含む和書18冊購入  
次年度資料拡充に向けて、追加収集資料の確認
- 8月 古書新書含む和書141冊購入
- 10月 英国・ダンスブックスより洋書98冊購入
- 11月 古書新書含む洋書84冊購入、保存器材の購入、古書の修復

### ・2019年

- 2月 貴重書の保存・修復
- 3月 バレエ視聴覚資料15点購入、バレエ研究所内の視聴覚資料整理
- 4月 企画展「日本における『白鳥の湖』」を開催。展示内においてチラシ「寄贈のお願い」を配布
- 5月 個人より書籍56点、公演プログラム360点の寄贈、受け入れ作業
- 6月 昭和音楽大学図書館より60点のバレエ雑誌の寄贈、受け入れ作業
- 8月 個人より貴重書籍・公演プログラム等11点の寄贈、受け入れ作業



# デジタルアーカイブグループ

尾崎 瑠衣

(昭和音楽大学バレエ研究所研究員)

## 1. 概要

### 1.1 研究概要

デジタルアーカイブグループは昭和音楽大学バレエ研究所が所蔵するバレエ資料を元に、バレエ情報のデジタルアーカイブ構築を行うことが目的である。

バレエにおいてデジタルアーカイブの整備は遅れている。理由は第1に舞台芸術は「その時」、「その場」で終わる一回性を重要視しており、保存を目的とするアーカイブとは馴染まない要素があること、第2に文字を元として構築されることがほとんどのアーカイブにおいて、踊りは言葉でないため、アーカイブ化をするのが難しい点であること、第3にアーカイブ構築は採算性の面で非常に難しく、またその上、資料のデジタル化などの過程でさらに資金が必要となるためであろう。

しかしながら同時にバレエにおいて継承や歴史は重要な要素であり、アーカイブ化を行う利点は大きい。またデジタルアーカイブを構築することで、いつでも、だれでも記録にアクセスできるというメリットもある。

以上のことから、昭和音楽大学バレエ研究所では公演記録のデジタルアーカイブの構築を行った。本研究所はすでに「バレエ情報総合データベース」を運営している。本サイトは公開当時、日本におけるバレエ公演記録を見ることのできる画期的なサイトであり、利用者も多かった。しかし同時に検索に時間がかかりすぎるなど、実用面においてさまざまな問題もあった。

本バレエアーカイブの構築においては、そうした実用面での問題を解決した上で、データの活用を試み、奥行きのあるデジタルアーカイブを新たに設計することを目指した。

### 1.2 デジタルアーカイブ概要

本グループによって構築されたデジタルアーカイブの概要は以下のとおりである。

デジタルアーカイブ名称：昭和音楽大学バレエ研究所『バレエアーカイブ』

URL：<https://ballet-archive.tosei-showa-music.ac.jp>

開設時期：2020年3月

収録公演データ数：11572公演（1946年より2019年まで） ※ 2020年3月現在

またバレエ研究所で所蔵しているバレエ関連文献等を管理する OPAC システムを構築した。その概要は以下のとおりである。

OPAC 名称：昭和音楽大学バレエ研究所『バレエライブラリー』

URL：https://ballet-library.tosei-showa-music.ac.jp

開設時期：2020年3月

収録資料数：和書 1501 冊、洋書 511 冊、視聴覚資料 499 点 ※ 2020年3月現在

## 2. データ入力

デジタルアーカイブ構築においては質の確保されたメタデータが必要である。バレエ情報・資料整理グループが収集した公演プログラムや配役表等を元としてデータ入力を行った。データ入力はバレエ研究所内で、所員が手作業で行った。外部に委託を行うには情報が専門的すぎ、また例外的事例があまりにも多かったためである。

### 2.1 データ項目

以下のデータ項目を入力した。

#### データ項目詳細

##### (1) プログラム冊子情報の入力 ※ 公開

ID

プログラム冊子名

プログラム冊子名（原語）

出版者

発行年月日

冊子形態

ページ数

表紙カラー

本体カラー

サイズ

備考

##### (2) 所蔵資料情報の入力 ※ 非公開、所内管理のための情報

ID

冊子コード

状態

保管場所  
チラシあり  
その他あり  
デジタルスキャン状況  
備考  
画像の追加

(3) 公演情報の入力 ※ 公開

公演日時  
公演名  
公演名（原語）  
ツアータイトル  
ツアータイトル（原語）  
公演会場  
上演団体  
全幕／ガラ公演  
主催等  
助成その他クレジット  
備考  
タグ  
関連リンク

(4) 演目情報の入力 ※ 公開

関係者情報  
配役情報

### 3. 所蔵資料のデジタル化

デジタルアーカイブグループでは資料保存と利活用のため、資料のデジタル化を行った。

#### 3.1 設備の構築、ノウハウの蓄積

研究所内に資料のデジタル化を行う機材が不足していたため、平成28年に以下図11、図12のとおりボックスキャナーとフラットベッドスキャナーを購入した。また平成29年5月にはバレエ研究所所員がデジタル情報記録管理協会の開催する資格講座「デジタル情報記録技術者」に参加するなどして、研究所内に資料デジタル化のノウハウを蓄積した。



図1 ボックスキャナー



図2 フラットベッドスキャナー

#### 3.2 資料のデジタル化

バレエ研究所が所蔵する資料の中から、公演プログラムコレクションのデジタル化を優先して行うこととした。公演プログラム冊子は貴重であるだけでなく、年代が古いプログラムの中には劣化の進んだ資料も多いためである。

プログラムの中でも、年代の古いものを優先してデジタル化作業を行うことを決めた。バレエ公演プログラム冊子は変型判が非常に多く、所内の機材やノウハウだけではデジタル化できない資料も多くあった。よって公演プログラム冊子をすべて確認し、所内でデジタル化の難しい貴重プログラム、変形判プログラム等を抜き出す作業を行ったのち、業者に依頼した。研究所内でデジタル化のできる資料に関しては、研究所内で行った。

またプログラムの表紙に関しては、平成31年に、バレエ研究所内ですべてのプログラム冊子表紙のデジタル化作業を行った。

参考

## バレエアーカイブシステムの構築にあたって

---

デジタルアーカイブシステムの設計と実装にあたった特定非営利活動法人連想出版（理事長 高野明彦）を代表して、林奏美氏にデジタルアーカイブシステムの構築について詳細な報告を執筆いただいた。



## 1. はじめに

『バレエ情報総合データベース』は、昭和音楽大学バレエ研究所が上演団体や会場を問わず収集したバレエ公演のプログラム冊子をもとに、日本におけるこれまでのバレエ公演の実績を記録したデータベースである。戦後間もない頃に上演された公演から最近の公演まで、実に1万件を超える公演記録が収録されている。

公開後多くの利用者に活用されてきたが、公開から年月を経て、公演記録の集積庫であった本サイトを元に、日本におけるバレエ情報発信拠点となる『バレエアーカイブ』を新たに構築した。

本プロジェクトでは、既存の『バレエ情報総合データベース』<sup>1</sup>を元とした新システムとして、国立情報学研究所高野明彦研究室による技術支援のもと、デジタルアーカイブの機能を拡充した『バレエアーカイブ』を開発した。

## 2. 目的

『バレエ情報総合データベース』は、日本における過去のバレエ公演の実績を詳細に記録し、それらを検索することを主眼にしたデータベースであり、アーカイブという観点からみると、“資料”のアーカイブから一步踏み込んだ、“記録”のアーカイブといえる。

『バレエ情報総合データベース』の主要構造は図1の通り。

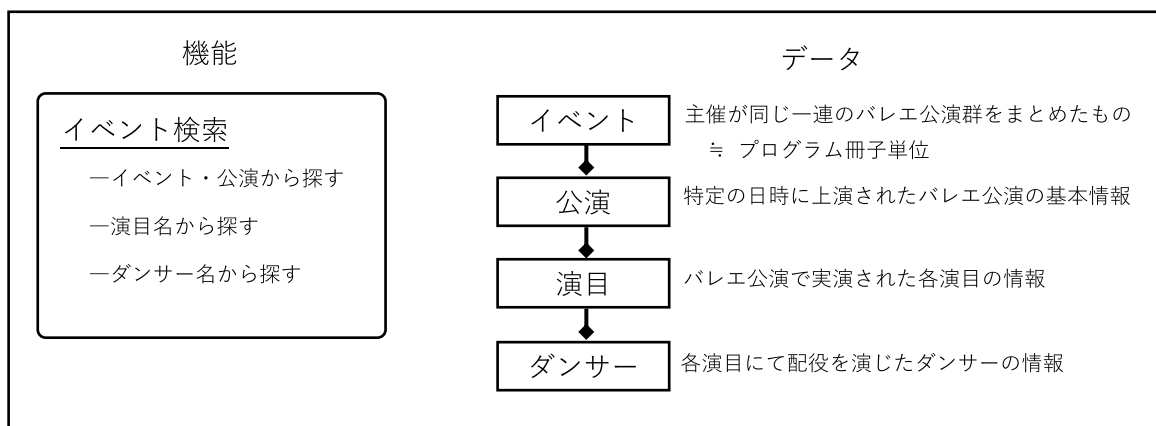


図1 『バレエ情報総合データベース』の主要構造

それらの記録は、プログラム冊子やチラシ等の昭和音楽大学バレエ研究所所蔵の実資料を基に手作業で入力をされているが、継続的に情報を追加、更新していくに当たって、公演記録入力における負荷軽減や、所蔵資料に関する情報の整備の必要性などが求められていた。

<sup>1</sup> <http://ballet.tosei-showa-music.ac.jp/>

また、これまで既に1万件を超える公演記録が蓄積され、収録範囲の年代も広がっていることから、これまでの『バレエ情報総合データベース』による個々の公演記録の参照という活用方法に加えて、公演記録の集合体としての統計的な活用の可能性もみえてきた。

そこで本プロジェクトでは、“記録”のアーカイブを維持するために必要な現行作業の負荷を軽減する施策の検討を足がかりに、これら蓄積されたバレエ公演の記録をこれまで以上に活用するためには何が必要かを検討した。

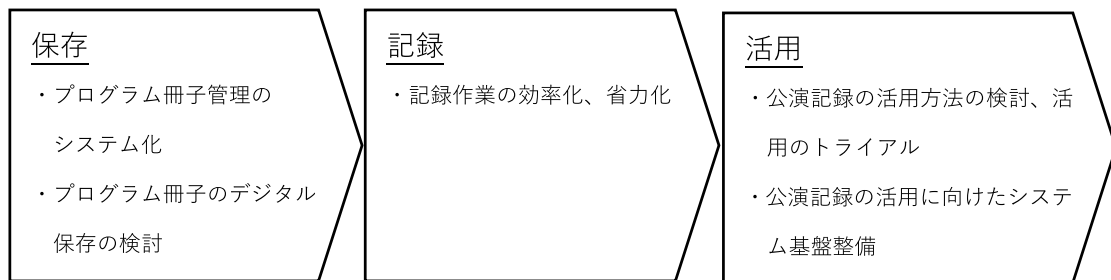


図2 本プロジェクトの活動テーマ

### 3. 課題調査

まず、現状の把握をするため、『バレエ情報総合データベース』の運營業務における課題を整理した。

『バレエ情報総合データベース』システムの管理者および利用者の観点から収集した課題点をもとに、システムの動作やデータベース構造およびシステム内部構造を調査分析のうえ、各課題点への対処方針を検討した。

その結果、本プロジェクトにおけるシステム構築にあたり主要な要件として以下の3点があげられた。

#### (ア) 所蔵資料管理機能の強化

『バレエ情報総合データベース』における公演記録は、現物のプログラム冊子をエビデンスとした記録であり、データ化されたテキストも原則的にはプログラム冊子の記載に沿ったものとなっている。

これまでアーカイブとして保存対象の資料であるプログラム冊子を管理する機能は、『バレエ情報総合データベース』の稼働当初から、関連する公演記録に紐付けて管理する機能が備わっていたが、プログラム冊子の情報はあくまで公演記録の補足情報としての役割にとどまり、『バレエ情報総合データベース』での公開もされていなかった。

しかし、現在ではプログラム冊子の収蔵数も増え、所蔵資料のデジタル化を積極的に開始したことから、重複在庫やデジタル化の状況など、プログラム冊子の所蔵に関する管理が必



要となっており、これらの機能を強化することでプログラム冊子の保存業務もシステム化していくことが求められていた。

## (イ) データ検索の利便性向上

『バレエ情報総合データベース』の公演記録が、現物のプログラム冊子の記載に沿ったものとなっていることから、特定の作品名や人物名で検索した際に、それが公演記録の記載と一致していなければ、検索結果に表示されないという課題があった。

公演記録のアーカイブとしては、原資料に沿った記録がなされていることは重要であるが、データ量が多くなるにつれ、例えばプログラム冊子間で異なる記載がされている同一人物（「バランシン」と「バランシーン」など）を一意に指定して検索できるように、データベースサービスとしての利便性の向上が求められていた。

また、Googleなどの検索サービスから公演記録を閲覧する利用者のほとんどが、他のページを閲覧せずにサイトから離脱してしまうという課題もあった。例えば、バレエ公演においては、「世界バレエフェスティバル」など、数年に一度行われる公演があるが、そういった公演間のつながりを特定のテーマや切り口によって眺められるようにすることで、利用者がより多くのコンテンツに触れる機会を提供することが必要と考えられた。

## (ウ) データ登録の利便性向上

バレエの公演記録は、基本的には表1にあるとおり構造化されており、このように構造化することで、さまざまな活用が可能となる。反面、多様なプログラム冊子からこれらの構造を読み取り、採録ルールに則ってデータベースシステムに登録していく作業は、作業者にかなりの負荷とノウハウを要求することとなる。

そのため、データ入力における利便性の向上は最優先の課題といえる。

表1 公演記録の基本構造

概念構造	主な内容
公演情報	公演日時、公演名、公演会場、上演団体、主催等クレジット ※ 同一興行の公演をまとめた上位概念もある（イベント・ツアー等）
演目情報	演目名、関係者情報（振付、衣裳等） ※ ひとつの公演にひとつもしくは複数の演目が存在する
配役情報	配役名、出演者 ※ ひとつの演目にひとつもしくは複数の配役が存在する

## 4. システムの構築とデータ整備

前項の課題調査および要件整理の結果をもとに、新システムの設計、開発をおこなった。主なシステム設計上の考慮点は以下のとおり。

### (ア) 所蔵資料管理機能

昭和音楽大学バレエ研究所では、一次史料となるプログラム冊子及びチラシやチケット等の史料の他に、二次史料である書籍や雑誌、視聴覚資料等を収蔵している。

本プロジェクトでは、『バレエアーカイブ』におけるプログラム冊子機能を拡充するとともに、二次史料の収蔵情報をまとめた『バレエ関連文献蔵書データベース』を開設し、相互を関連付けた。

#### I. プログラム冊子管理機能の強化への対応

##### ① データ構造の見直し

これまでの『バレエ情報総合データベース』におけるプログラム冊子の管理は、あくまで公演記録の補足情報としてプログラム冊子の管理情報を関連付ける程度にとどまっていたこともあり、公演記録（イベント情報）が主でプログラム冊子が従という構造になっていたが、アーカイブの観点から主従を逆転し、プログラム冊子に複数の公演記録が紐づくというデータ構造に設計を変更した。

また、同じプログラム冊子が複数所蔵されることもあることから、所蔵に関する情報をそれぞれの管理可能とする為、プログラム冊子のデータ構造を書誌と所蔵に分けるデータ構造とした。

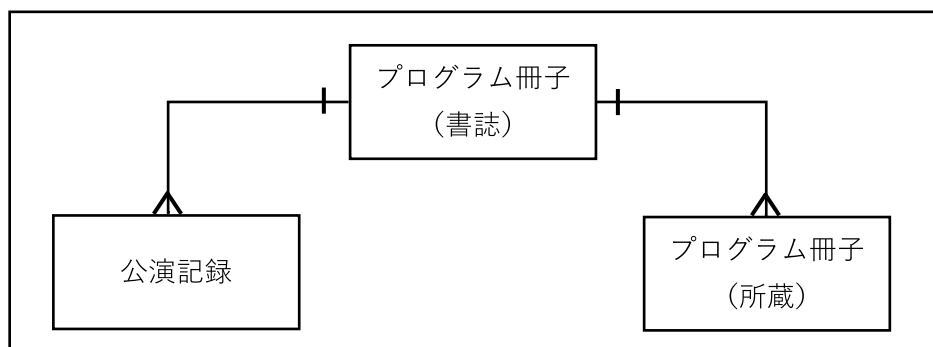


図3 プログラム冊子と公演記録の関係


##### ② プログラム冊子情報の公開

登録されたプログラム冊子の書誌情報を、公演記録の出典元として公開する仕組みを用意した。

プログラム冊子は、これまで『バレエ情報総合データベース』では公開対象となっていなかったが、公演記録が現物のプログラム冊子をもとにしていることから、プログラム冊子の情報を公開することがアーカイブの観点からも重要と考え、一般向けのサイト上で、公演記録の出典元としての公開に踏み切った。

プログラム冊子は昭和音楽大学バレエ研究所の所蔵資料でもあることから、これらの資料が研究者に活用されること、また、本アーカイブが、多くの方々からの資料寄贈によって成り立っており、今後の協力を仰ぐことにもつながることを期待している。

'98スターダンサーズ・バレエ団夏休み公演 ピーター・ライト版  
[くるみ割り人形]全2幕



書誌情報	
プログラム冊子名(原題)	-
発行者	財団法人スターダンサーズ・バレエ団
発行年月日	(未記載)
冊子形態	パンフレット
ページ数	44ページ(ノンブルあり) ※裏表紙の裏に広告掲載あり
表紙カラー	多色
本体カラー	多色
サイズ	-
備考	-

掲載されている公演情報

公演1 '98スターダンサーズ・バレエ団夏休み公演 ピーター・ライト版[くるみ割り人形]全2幕  
日時：1998年08月15日18時00分 会場：こどもの城 青山劇場

---

公演2 '98スターダンサーズ・バレエ団夏休み公演 ピーター・ライト版[くるみ割り人形]全2幕  
日時：1998年08月16日14時00分 会場：こどもの城 青山劇場

---

公演3 '98スターダンサーズ・バレエ団夏休み公演 ピーター・ライト版[くるみ割り人形]全2幕  
日時：1998年08月17日19時00分 会場：こどもの城 青山劇場

図4 『バレエアーカイブ』におけるプログラム冊子紹介例

また、ビジュアルの情報は、史料として重要な情報でもあることから、プログラム冊子の表紙画像も一部を公開することとした。加えて、プログラム冊子表紙は、それ自体がバレエ分野におけるグラフィックデザインの歴史となりうることから、年代やバレエ団別にプログラム冊子の表紙画像を一覧できるギャラリー機能を設けた。

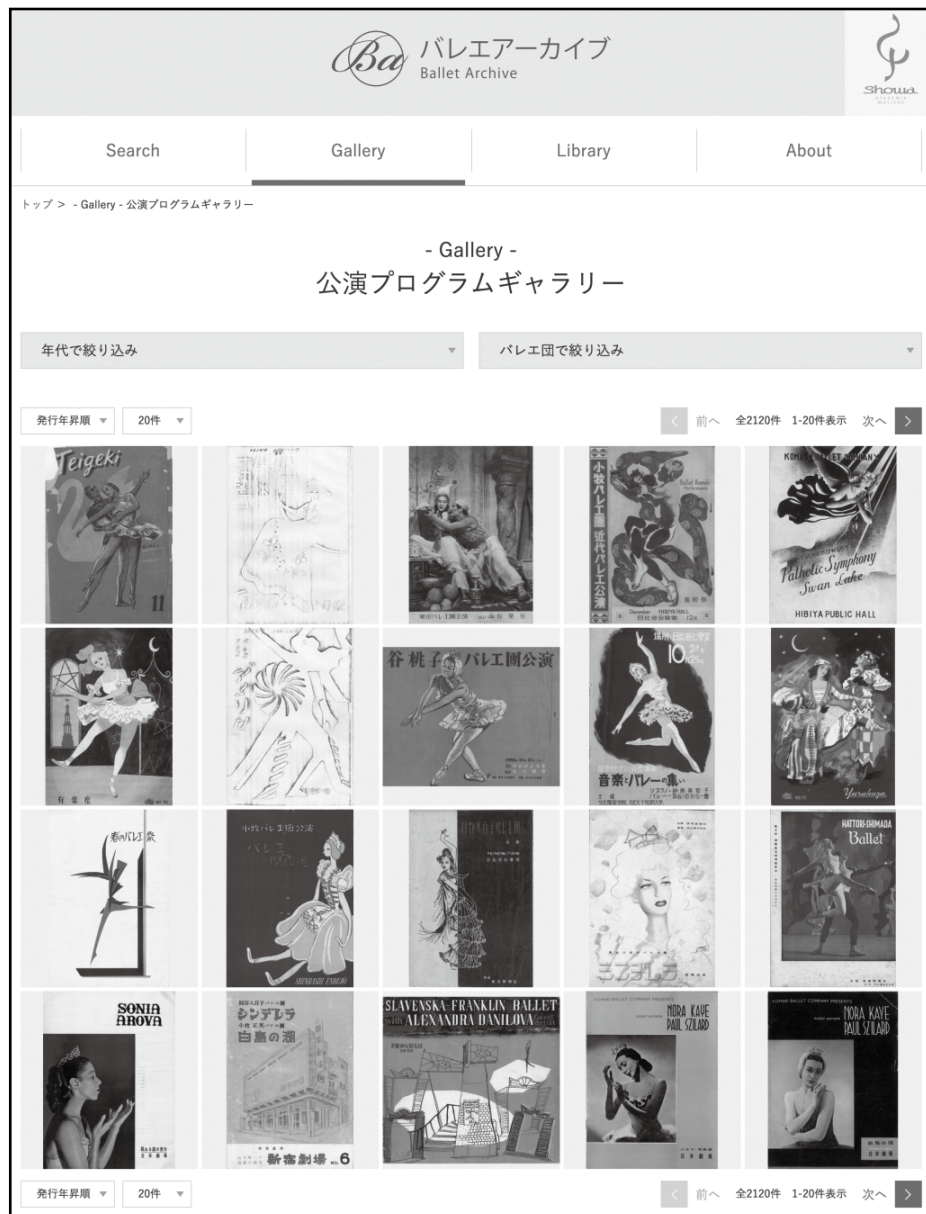


図5 『バレエアーカイブ』におけるプログラム冊子ギャラリー表示例

## II. バレエ関連文献蔵書データベースの併設

昭和音楽大学バレエ研究所では、バレエ公演のプログラム冊子の他に、バレエに関する図書や雑誌、映像資料、音声資料を所蔵しており、関連する公演記録とあわせて参照することでより対象への理解が深まることから、これらの文献資料を紹介するデータベースサイト(OPACシステム)である『バレエ関連文献蔵書データベース』を併せて構築した。

『バレエアーカイブ』の公演記録、各マスターデータに対して『バレエ関連文献蔵書データベース』へのリンクを付ける機能を用意することで、バレエアーカイブの情報を眺める利用者が、関連する文献の情報へアクセスし、文献への認知が広がるとともに、実際の資料を活用してくれることを期待する。



図 6 バレエ関連文献蔵書データベース

## (イ) データ検索の利便性向上への対応

### ① 各種マスターデータ管理機能の新設

公演記録の記載とは別に、人物、作品、バレエ団、公演会場を一意の情報として管理する機能を設けた。

公演記録はプログラム冊子に記載されている内容をもとにデータベースに登録されるため、原則としてプログラム冊子に記載されているとおりの表記で入力するポリシーとなっている。そのため、同一人物であっても表記が違うことは少なくなく、例えば振付家のジョージ・バランシンは、ざっと確認した限りでも下記のようなバリエーションがみられる。

表 2 振付家ジョージ・バランシンの表記揺れ

ジョルジュ・バランシーン
ジョルジュ・バランシン
ジョージ・バランシン
ジョージ・バランチン
バランチン
ジョージ・バランシーン
G. ジョージ・バランシン
G. バランシン
バランシン
G. バランシ

バレエの作品名やダンサー、スタッフ名は、元の名称が日本語ではないことも多く、時代や発行者により名称に揺らぎが多く見受けられた。プログラム冊子に記載されている内容を記録する側面からみる限りでは、公演記録によりこのようなバリエーションがあるのかわかることは意義深い反面、同一人物の公演記録をくまなく得るために上記のような表記の揺れを全て踏まえたうえで検索するのは非常に困難であると言わざるを得ない。

そこで、図書館の蔵書管理等でみられる典拠管理を参考に、新システムに表3に示すマスターデータを設けることとした。

表3 新設したマスターデータ一覧

マスターデータ	主な項目（非公開の項目も含む）
人物マスター	人物名、人物名（別名）、専門等、生年月日、没年月日、解説、関連リンク、管理用備考
作品マスター	作品名、作品名（原語）、初演、振付家、作曲家、解説、概要、関連リンク、管理用備考
バレエ団マスター	バレエ団名、バレエ団名（別名）、拠点、創立年、解散年、解説、関連リンク、管理用備考
公演会場マスター	会場名、会場名（別名）、都道府県、所在地、緯度、経度、解説、関連リンク、管理用備考

これにより、特定の人物や作品を検索条件とした公演記録の抽出が容易になるほか、SEO（検索エンジン最適化）の観点からみても、Google等で人物名や作品名、公演会場名による検索の一覧から本サイトを訪れる閲覧者が増えることが期待できる。

## ② 公演記録のグルーピング機能新設

公演記録に対して、柔軟な意味づけを可能にするために、グルーピング機能を新たに用意した。

公演の基本情報とは全く別に、公演記録に対して複数のタグを付けられるようにすることで、公演記録を多様なコンテキストでまとめること（グルーピング）が可能となり、公演に関する理解を深める手がかりになると考えられる。

『バレエアーカイブ』では、公演詳細画面で予め付与されたタグを表示し、このタグをクリックすることで、それを含む公演一覧を表示できる。膨大な公演記録の中を、意味づけされたグルーピングを参考に渡り歩くことが可能となり、これまで特定の公演記録を閲

覧した後に離脱していた利用者に、ワンクリックでより多くのコンテンツを閲覧してもらう機会になりうると考えている。

## (ウ) データ登録の利便性の向上への対応

### ① データ構造の見直し

『バレエ情報総合データベース』の公演記録の基本的な構造は活かしつつ、データの正規化のレベルを意図的に落とすことで、表記方法や並び順に柔軟性を持たせるようにした。

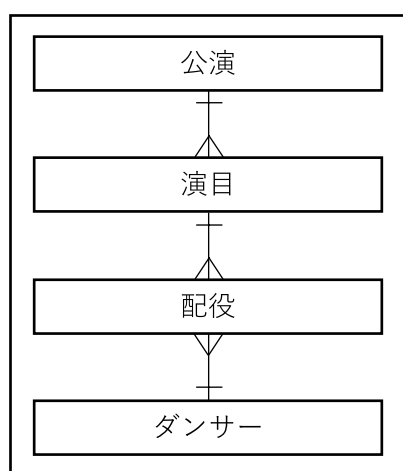


図 7

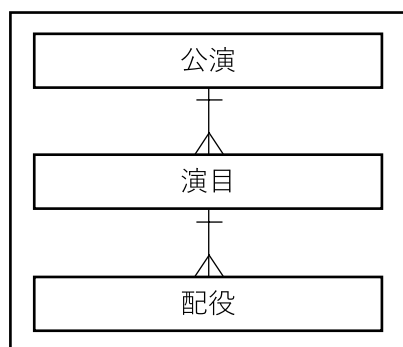


図 8

『バレエ情報総合データベース』における公演記録の構造は図7のとおり。

ひとつの公演あたり、ひとつから複数の演目が存在し、それぞれの演目には配役があり、その配役には出演者であるダンサーが紐づく。

このように、演目に関わるダンサーひとりひとりが個別のデータとして管理することで、将来的なデータの利用途が広がる反面、毎公演に対して新しいダンサー情報が登録され、ダンサーに関するデータ量が膨大になること、また、入力・編集が複雑となり、例えば配役の交代出演の表現等で表記上の制限や作業の複雑さがみられる面があった。

そこで、新システムではデータの正規化のレベルを落とし、配役レベルまでの階層にとどめ、その配役で出演するダンサーの表記については、個々にレコードを作成せずフリーフォーマットで登録できるようにデータ構造を見直すこととした。(図8)

こうすることで、配役の交代出演等による複雑な表記も可能となるとともに、システムの内部構造も簡潔になり検索等の処理速度の改善もみられた。

なお、前述した人物マスターが、この配役情報とつながることから、ダンサー名の集約はこちらで担うことになる。

### ② 公演記録とマスターデータの関連付け作業の省力化

『バレエアーカイブ』では、前述の通りマスターデータを登録できる機能を新設したが、

それらが各公演記録との関連付けがされないことには効果を発揮しない。かつ、関連付けされた公演記録の比率がある程度高くないと、利用者が十分なメリットを得られない。

そのため、マスターデータの登録作業や公演記録との関連付け作業については極力負荷を少なくした上で、関連付けられたデータをチェックする機能が必要とされた。

以上のことを考慮して、各マスターデータの機能に公演記録への一括関連付け機能を設けた。

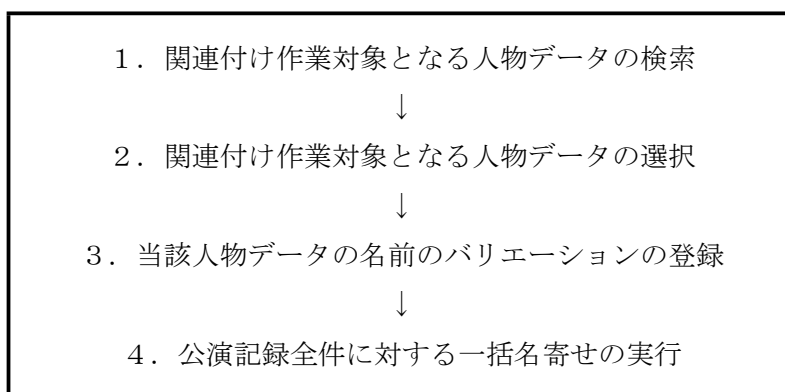
各公演記録には、プログラム冊子に記載された情報として既に人物名や作品名、バレエ団名、公演会場名が登録されている。マスターデータの登録の際に、各公演記録と突き合わせるキーとなる名前のバリエーションを登録しておくことで、機械的に一括で公演記録とマスターデータを名寄せすることを可能とした。

例えば、人物マスター『ジョージ・バランシン』の人物名のバリエーション項目に前述の表2の「バランチン」等の表記ゆれを登録しておくことで、このバリエーション項目をもとに機械的に一括名寄せをする事ができる。

名前のバリエーションもマスターデータ登録時に全て判明している必要はなく、新しいバリエーションが判明した時点で名寄せをし直すことで関連付けが更新される。また、名寄せされた公演の中に、対象と異なるデータが含まれる場合には、それらを除外する機能も設けている。

これにより公演記録と各マスターデータとの関連付け作業の作業負荷は、作業者による一件毎の関連付け作業の繰り返しに比べて格段に省力化されることとなった。

表4 『バレエアーカイブ』における公演記録と人物データとの関連付け作業ステップ





Ps: 98 ジョージ・バランシン

人物名

ジョルジュ・バランシーン  
 ジョルジュ・バランシン  
 ジョージ・バランシン  
 ジョージ・バランチン  
 バランチン  
 ジョージ・バランシーン  
 G.ジョージ・バランシン  
 G.バランシン  
 バランシン  
 G.バランシ

※ 改行区切りで複数指定できます。

除外する演目ID

※ カンマ区切りで複数指定できます。

関連付け開始

全 1224 件 1 件 ~ 20 件目を表示

演目ID	公演日	イベント名	全幕	演目：役名	役割	関連付け
Pr.61152	2019年04月06日	NHKバレエの宴2019		セレナーデ：振付	スタッフ	一括
Pr.61038	2019年03月31日	スターダンサーズ・バレエ団 DanceSpeaks ダンスは何を語るのか。 ウェスタン・シンフォニー 緑のテーブル		ウェスタン・シンフォニー：振付	スタッフ	一括

図9 『バレエアーカイブ』における人物マスターの関連付け作業画面例

## 5. 公演記録の活用に向けた取り組み

従来の『バレエ情報総合データベース』では、データが蓄積されていくに従い、公演データの全体像が見えにくいという問題点があった。例えば、バレエ公演の上演実績は、データ上いつの時代が一番多いのか、各年によってどれくらいの公演数に偏りがあるものなのかという問いが浮かんだとき、『バレエ情報総合データベース』では個別にデータを検索し、件数を比較しなければならず、手間がかかる上に比較はし難い。

本プロジェクトでは、公演データを活用し、展示やWebサイトの機能により、より効率的に、上記の問いに対する洞察を利用者が得られやすくすることを検討した。

具体的な施策は下記の通りである。

### (ア) 公演データを活用した展示における取組

2017年8月5日、6日に開催されたスターダンサーズ・バレエ団が主催する『サマーミックスプログラム』の公演会場である新国立劇場オペラパレスのホワイエにて、振付家のジョージ・バランシンをクローズアップした展示『日本におけるバランシン』展を開催した。

展示においては、バランシン作品の上演実績を年表とともにグラフにしたパネルや、実物資料、オーラルヒストリーの動画等の展示をおこなった。

その展示の中で、公演データを活用し、バランシン振付作品が日本においてどれほどの上演実績があるのかを、作品別のヒートマップに表した画面や、上演された会場を地図にプロットした画面などを制作した。

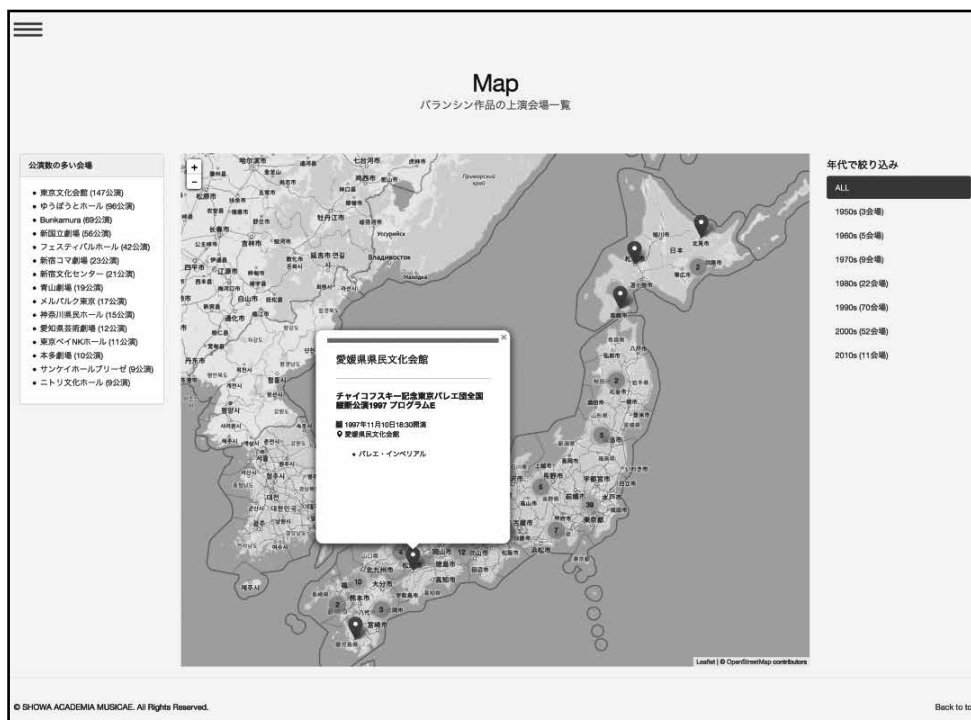


図10 バランシン作品の上演会場一覧

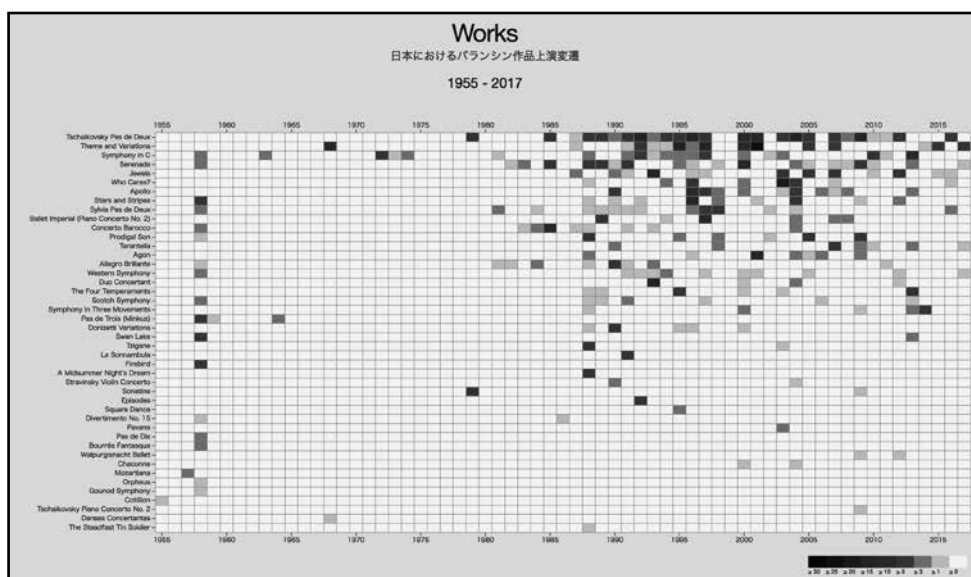


図11 バランシン作品の上演実績ヒートマップ

実際の公演会場において、当日の公演演目にある作品の振付家のバランシンに関する展示であったこともあり、幕間等で多くのバレエファンやバレエ関係者にご覧いただくことが出来た。プログラム冊子の寄贈に前向きなご意見や展示資料に関する突っ込んだ質問等もあり、バレエアーカイブへの関心が総じて高く、今後のアーカイブとしての役割の重要性も再認識することができた。



図 12 バレエ公演会場での展示の様子

### (イ) Web サイトでの公演データ可視化の発信

『バレエアーカイブ』は、主なサイトの利用者として、バレエ研究者やバレエ関係者、またバレエに関心をもつ学生や愛好家などを想定している。そういった利用者の需要を考えた場合、特定の作品や人物を切り口に興味をひろげていくことが多いのではないかと考え、各マスターの画面に、各マスターデータと関連する公演の実績をグラフで表示する機能を設けた。各マスターの公演記録をグラフで可視化することで、公演データの全体像が把握しやすくなるほか、その作品や人物の関わる公演記録について、検索を経ずに確認できる導線が生まれ、各公演記録の閲覧数の増加が期待できる。

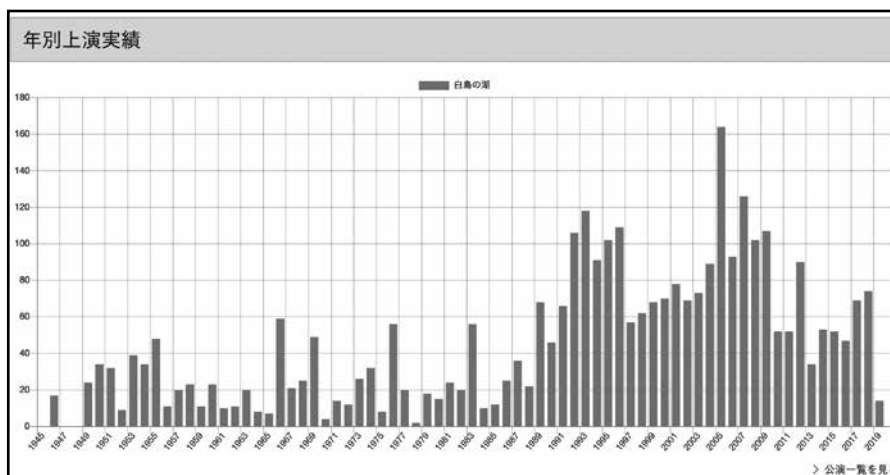


図13 『バレエアーカイブ』における作品の上演実績グラフ例

また、作品の公演実績を比較し、年表とともに眺められる画面を用意した。複数の作品の実績をグラフに表すことで、単体の実績だけでは気付かない偏りや差異を明らかにすることが可能となる。例えば、チャイコフスキーの三大バレエと呼ばれる「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」「白鳥の湖」の三作品において、日本における作品受容の歴史にどのような違いがあるのかなど、比較を通してより多くの事実や示唆を掬い上げられるようになると考えている。



図14 『バレエアーカイブ』における作品上演変遷グラフ

## 6. おわりに

今回の『バレエアーカイブ』構築によって、日本におけるバレエ公演の歴史を“記録”するアーカイブとして、資料情報の管理やマスターデータの管理、公演記録のグルーピング等、さまざまな機能が拡充されたが、その“記録”の活用に向けた取り組みはまだ諸に就いたばかりだ。

グラフなどに表した可視化は、元のデータによって読み取られる情報も変化するが、『バレエアーカイブ』に掲載されている公演記録がまだ日本の上演実績のすべてをカバーしているわけではないことから、今後もデータ件数が増えていくに従い、変化していくことが見込まれる。より多くのデータが収集されたときに、また新たな活用が見えてくるかもしれない。

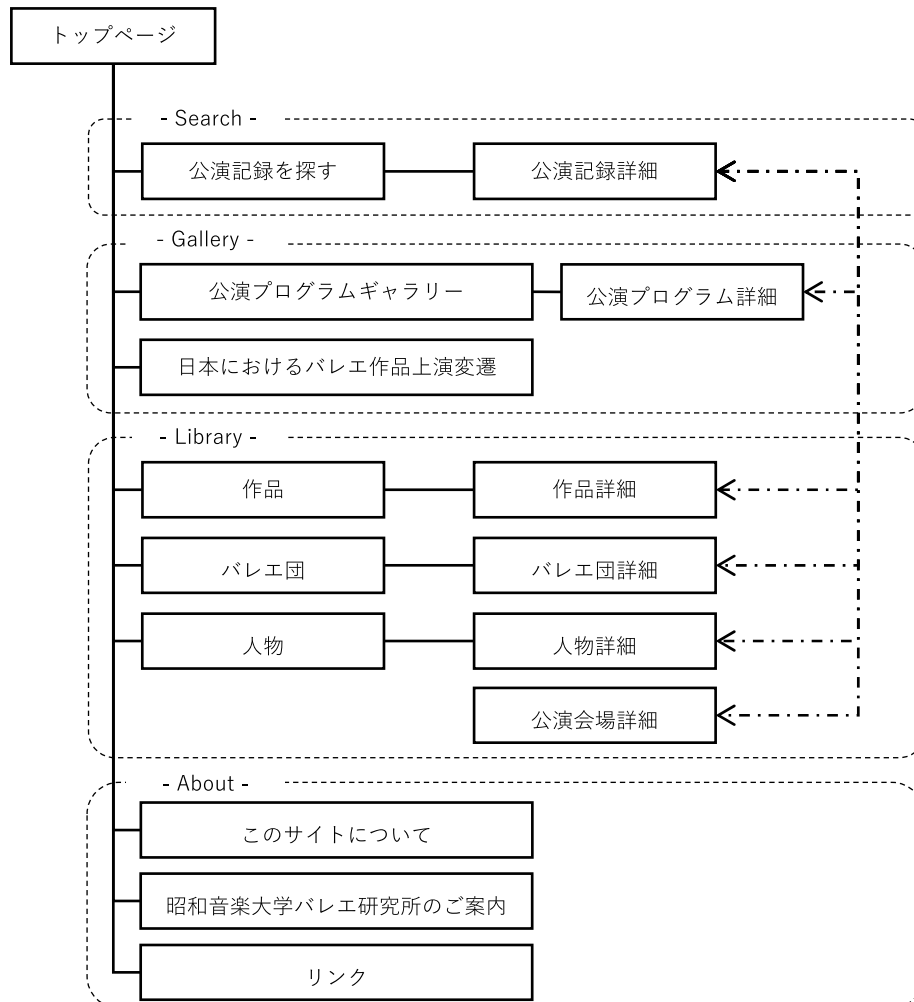
今回新設されたマスター情報については、バレエに関する情報を体系的に整理した辞書のように発展していくとともに、他のコレクションやデータベースとの連携につながることを望まれる。特に、人物や会場に関しては、バレエの枠組みを超えて、様々な舞台芸術に関する情報とも連携していけるのではないかと考えている。

また、本プロジェクトで議論の俎上に載せられたが、今回の『バレエアーカイブ』には含まれなかったものとして、オーラルヒストリー（動画・テキスト起こし）、公演写真、プログラム冊子の中身のデジタルスキャンなどがある。これらは、現時点では件数も多くなく、著作権や肖像権の関係上すぐに公開は出来るものではないが、アーカイブとして重要な史料であることから、将来的に『バレエアーカイブ』に集約されることも考えられる。

今後の取り組みの中でさまざまな方面からのフィードバックをいただきながら、システムもバレエ研究所における活動と並行して改良していくことで、アーカイブの継続運営に結びつき、利用者からの信頼を得ることに繋がっていくものと思われる。

## 7. 参考資料

### (ア) バレエアーカイブ画面構成（公開側）



(イ) バレエアーカイブ画面例

① トップページ

バレエ情報総合データベースは、日本におけるバレエ教育の発展を支援することを目的とし、バレエ公演の上演団体、会場を問わず収録し、後世の鑑賞を妨がったものです。

**Search**  
公演記録を探す

キーワード例: [東京文化会館](#) [自島の演](#) [スカラ座バレエ団](#) [くるみ割り人形](#)

**Gallery**  
日本バレエの変遷を知る

データベースデータベースとは「バレエ情報総合データベース」は、日本国内で行われたバレエ公演について、公演プログラム（冊子、リーフレットなど）を情報とし、上演日時・会場、上演団体、演目、出演者、関係者などを広く収録して検索できるように構築した画期的なデータベースです。

**Library**  
日本バレエの軌跡を知る

データベースデータベースとは「バレエ情報総合データベース」は、日本国内で行われたバレエ公演について、公演プログラム（冊子、リーフレットなど）を情報とし、上演日時・会場、上演団体、演目、出演者、関係者などを広く収録して検索できるように構築した画期的なデータベースです。

**News**  
お知らせ

- 2025/08/23 「バレエ情報センター機能の構築」 研究報告ページを更新しました。
- 2025/04/18 「上野の森・バレエスタジオ」 出版のお知らせが完了しました。
- 2025/01/15 企画展「日本におけるバレエの発展」を開催いたします。詳しくはこちら
- 2024/12/10 各種メディアで研究発表の一部をご覧いただけます
- 2024/07/24 バレエ研究所プロジェクト研究員 藤原聖二先生のご逝去

このサイトについて | 昭和音楽大学バレエ研究所のご案内 | リンク | バレエ文庫データベース ©  
Copyright © SHOWA ACADEMIA MUSICAIE. All Rights Reserved.  
Showa ACADEMIA MUSICAIE  
昭和音楽大学

② 公演記録一覧ページ

The screenshot shows the search results for 'Star Dancers Ballet' on the Ballet Active website. The page features a search bar at the top with the query 'スターダンサーズ'. Below the search bar, there is a list of search results, each with a thumbnail image and a brief description. The results include various performances such as 'Star Dancers Ballet' and 'Star Dancers Ballet' with different dates and locations. On the right side of the page, there is a sidebar with filters for '検索条件' (Search Conditions) and '検索結果' (Search Results). The footer of the page contains the website's name 'Ballet Active' and the copyright information 'Copyright © 2008 KADOKAWA MUSIC INC. All Rights Reserved.'.



③ 公演記録詳細ページ


♪

Search | Gallery | Library | About

公演記録詳細

**'98スターダンサーズ・バレエ団夏休み公演**

**ピーター・ライト版 [くるみ割り人形]全2幕**

**公演記録**

期数	2000年夏公演
期次	2750年夏公演
上演場所	スターダンサーズ・バレエ団

**上演演目**

くるみ割り人形

**主催情報**

期数	2000年夏公演
期次	2750年夏公演
上演場所	スターダンサーズ・バレエ団

**スタッフ情報**

演出	...
音楽	...
振付	...
照明	...
音響	...
美術	...
衣裳	...
メイク	...
ヘアメイク	...
演出助手	...
音響助手	...
美術助手	...
衣裳助手	...
メイク助手	...
ヘアメイク助手	...
演出協力	...
音響協力	...
美術協力	...
衣裳協力	...
メイク協力	...
ヘアメイク協力	...

**関連リンク**

...

**くるみ割り人形**

期数	...
期次	...
上演場所	...
演出	...
振付	...



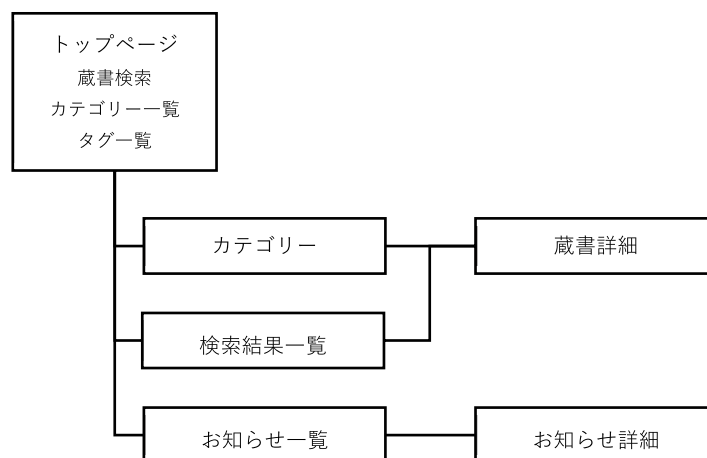
**関連公演**

...

Copyright © 2000-2020 Ba Ballet Archive. All Rights Reserved.



(ウ) バレエ関連文献蔵書データベース画面構成 (公開側)



(エ) バレエ関連文献蔵書データベース画面例

① 蔵書詳細ページ

バレエ関連文献蔵書データベース	
トップ / 蔵書検索 / No.7	
昭和音楽大学 バレエ研究所	
<b>舞踊年鑑 平成18年の記録</b>	
カテゴリー	人文 (バレエ)
メディア種別	図書
書名	舞踊年鑑 平成18年の記録
書名ヨミ	
著者名	全日本舞踊連合舞踊年鑑編集委員会
著者名ヨミ	
出版者等	全日本舞踊連合
出版年	
内容	
版表示	
形態	
ISBN	
出版地	東京
注記	
<input type="button" value="検索結果に戻る"/>	
昭和音楽大学 バレエ研究所 〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺1-16-6 昭和音楽大学北校舎内 Tel : 044-953-9880 Fax : 044-953-9901 (受付時間 10:00~18:00 土日祝除く) E-mail : ballet@tosei-showa-music.ac.jp	

## 資料A. デジタルアーカイブグループの作業記録

### ・2015年

- 10月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ1
- 12月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ2

### ・2016年

- 1月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ3
- 2月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ4
- 6月 アーカイブサミット2016参加  
連想出版10周年記念シンポジウム参加
- 7月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ5
- 10月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ6

### ・2017年

- 3月 脚本アーカイブシンポジウム参加
- 4月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ7  
バレエアーカイブシステム 打ち合わせ8
- 5月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ9
- 6月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ10  
バレエアーカイブシステム 打ち合わせ11  
バレエアーカイブシステム 打ち合わせ12
- 7月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ13  
デジタルアーカイブ学会参加  
公演プログラムスキヤニング作業 開始
- 8月 企画展「日本におけるバランシン」（新国立劇場オペラパレスホワイエ）開催  
デジタル情報記録技術者講習会参加
- 11月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ14
- 12月 「平成29年度舞踊公演アーカイヴに関する座談会」参加

### ・2018年

- 2月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ15  
早稲田大学演劇博物館国際シンポジウム「不可能への挑戦」参加
- 3月 デジタルアーカイブ学会参加
- 6月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ16
- 9月 企画展「日本における『白鳥の湖』」 打ち合わせ1  
資料のデジタル化 打ち合わせ1
- 10月 資料のデジタル化 打ち合わせ2
- 11月 企画展「日本における『白鳥の湖』」 打ち合わせ2

## 第2章 調査・研究の記録

12月 資料のデジタル化 打ち合わせ 3

### ・2019年

1月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ 17

3月 資料デジタル化 打ち合わせ 4

4月 企画展「日本における『白鳥の湖』」 打ち合わせ 3

バレエアーカイブシステム 打ち合わせ 18

企画展「日本における『白鳥の湖』」（東京文化会館大ホールホワイエ）開催

5月 チラシ資料 所内デジタル化作業開始

6月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ 19

8月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ 20

資料のデジタル化 打ち合わせ 5

9月 資料のデジタル化 打ち合わせ 6

12月 「人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん）」にて学会発表

### ・2020年

1月 資料のデジタル化 打ち合わせ 7

2月 バレエアーカイブシステム 打ち合わせ 21

# バレエ環境調査グループ

海野 敏

(東洋大学社会学部教授)

## 1. 概要

バレエ環境調査グループは、日本および海外における、バレエをめぐる諸環境の実態と問題点を明らかにするために、いくつかの調査活動を計画・実施してきた。以下では、次の3つの調査活動について報告する。

- (a) バレエ教育に関する全国調査
- (b) 全国バレエコンクール調査
- (c) 海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査

これらのうち、本グループがもっとも時間と労力を費やして行ったのは、(a)「バレエ教育に関する全国調査」である。この調査は、日本のバレエ教育環境を実証的な数値で明らかにするために、全国のバレエ教育機関を対象として行った全数調査であり、4,793件の組織・団体へ調査票を郵送し、1,557件(32%)から有効な回答を得ることができた。回収したデータを集計・分析して得られた知見の一部は、次の学術論文および関連学会における研究発表によって公開済みである。

(学会誌における論文掲載)

①小山久美・海野敏「日本のバレエ教育市場の変化:『バレエ教育に関する全国実態調査』に基づく分析」『音楽芸術マネジメント』vol. 9, pp. 71-81, 2017. 12. (査読有)

②海野敏・小山久美「日本のバレエ教育の実態および課題:第2回『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察」『舞踊學』vol. 40, pp. 14-25, 2018. 3. (査読有)

(学会研究大会における口頭発表)

③小山久美・海野敏「日本のバレエ教育環境の実態分析:『バレエ教育に関する全国調査』基本報告」日本音楽芸術マネジメント学会 第4回秋の研究大会, 2011. 11. 20.

第2章、第3章では、上記①と②の内容を再構成して、(a)「バレエ教育に関する全国調査」の調査方法、集計結果、および分析と考察について詳細に報告する。

第4章では、(b)「全国バレエコンクール調査」の概要を簡潔に報告する。この調査は、(a)「バレエ教育に関する全国調査」と同様に、日本のバレエ教育環境を明らかにするために、106件のバレエコンクールの主催者に対して行ったアンケート調査である。

第5章では、(c)「海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査」の概要を簡潔に報告する。この調査は、海外のバレエ教育の一側面を(b)に関連付けて明らかにするために、ネットワーク上の情報源を利用し、欧米の5つのバレエ団について行った調査である。

補足資料として、「資料A」として本グループの活動を時系列にまとめ、「資料B」として「バレエ教育に関する全国調査」の調査票の原物を掲載する。

## 2. 「バレエ教育に関する全国調査」の計画と実施

### 2. 1 調査の概要

#### 2. 2. 1 調査対象

バレエ教育の環境を把握するための調査単位としては、バレエ学習者、バレエ教育者、バレエ教育機関が想定できるが、バレエ学習者とバレエ教育者は、全国規模で網羅的な名簿の作成が現実的に不可能である。一方、バレエ教育機関は、ある程度網羅的な住所録の作成が可能である。そこで本グループは、バレエ教育機関の網羅的な住所録に基づいた悉皆調査として「バレエ教育に関する全国調査」（以下「全国調査」）を実施した。

調査対象としたバレエ教育機関には、いわゆる“バレエ教室”だけでなく、バレエのコースを有しているカルチャーセンターやスポーツクラブなどの生涯学習機関、課外授業としてバレエ教育を組み込んでいる幼稚園・保育所、小・中学校、高校など、バレエを指導内容に取り入れている組織・団体を広く含めた。しかし、調査の過程でバレエ教育機関のほとんどがいわゆる“バレエ教室”であることが分かったため、以下ではバレエ教育機関の総称として「バレエ教室」という語を用いる。

今回の「全国調査」は第2回である。2011年の第1回調査に際し、バレエ教室の網羅的な住所録として『全国バレエ教室データベース』（以下「教室データベース」）を構築した。このデータベース構築のために、まずNTTのインターネット版電話帳『iタウンページ』を「バレエ」というキーワードで検索し、住所等の情報を収集した<sup>1</sup>。さらに日本バレエ協会ホームページ掲載の「全国バレエスタジオ案内」<sup>2</sup>、ウェブ上で検索可能なバレエ教室の情報、その他一般に公開されているバレエ関係の各種名簿類を参照した。

2016年の第2回調査にあたっては、「教室データベース」の全面的な改訂を行った。まずNTTの『タウンページデータベース』<sup>3</sup>で「バレエ教室」、「ダンス教室」、「カルチャーセンター」のいずれかに分類されている全国6,162件の住所・電話番号のデータを入手し、「教室データベース」との照合を行った。照合の結果「教室データベース」に未登録の3,245件について、1件ずつバレエ教育の実施を確認して登録に加えた。

また第2回調査では、多店舗型のカルチャーセンター、スポーツクラブについて別途調査を行った。バレエ教育を行っている店舗のみを調査対象にするために、各店舗の教育内容をウェブで1件ずつ精査し、ウェブで確認できない場合には電話で問い合わせた。この確認作業は51団体の計1,449の店舗について行い、バレエ教育を行っている808の店舗を抽出することができた。

<sup>1</sup> iタウンページ <https://itp.ne.jp>

<sup>2</sup> 公益社団法人 日本バレエ協会「全国バレエスタジオ案内」 <http://www.j-b-a.or.jp/studio>

<sup>3</sup> タウンページデータベース <http://tpdb.jp/townpage/>

以上の作業に加えて、過去に登録済みのバレー教室についても、5年を経て閉室したものがないか1件ずつ点検した。さらに、登録から漏れている教室の情報を発見するたびに「教室データベース」へ追加し、登録数は5,528件となった。この件数には経営主体が同じ別教室も含まれていたため、それらを除き、最終的な登録数は4,793件である。

## 2. 2. 2 調査方法と回収率

調査方法は郵送法を採用した。質問票は第1、2回ともにA4判4ページで、設問の数は、第1回が19問、第2回が20問である。第1、2回でほとんどの設問は同一であるが、第2回は一部の設問の表現を誤解のないよう修正し、さらに設問の順番を若干変更した。設問の内容は、バレー教室の経営主体、稽古場の数、生徒数、生徒の性別・年齢層、教師数、教師の属性や資格、教えているレッスンの種類など多岐にわたっている（資料B参照）。

質問票は「教室データベース」に登録した4,793のバレー教室に送付した。各バレー教室に1通ずつ質問票を送付し、バレー教室の代表者またはその代理人が回答するように求めた。また、第1回には経営主体が同じ教室に重複して調査票を送ってしまい、データにノイズが生じた反省を踏まえて、第2回は、もしも経営主体が同じ別の教室に調査票が届いた場合は、数値等の回答が重複しないよう配慮を求めた。さらに、多店舗型のカルチャーセンター、スポーツクラブについては、漏れがないように団体本部へも協力を依頼した。

調査手順に関しては、2011年の調査では、本調査の前に2回の予備調査を実施し、質問票の設計を念入りに行った。しかし2016年の調査では、質問票の基本設計が完了していたため、予備調査を行っていない。

第2回調査は2016年9月初めに発送し、9月20日を返送期限とした。いずれも期限直後にハガキによる督促を1回行い、それぞれの年の10月下旬まで質問票の回収に努めた。

表1-1は、2回の「全国調査」について、発送数、返送数、回収率を比較したものである。回収率は、2回ともおよそ3分の1で、差はなかった。また、回収の結果、バレーを教えていないと回答した教室が一定数含まれていたため、表1-1にはバレーを教えていると回答した教室の数も示した。

表 1-1 「バレー教育に関する全国調査」の概要

	第1回調査 2011年	第2回調査 2016年
送付した教室数	4,630	4,793
回答した教室数 (回収率)	1,484 (32.1%)	1,557 (32.5%)
内バレーを教えている 教室数 (回答数に対する割合)	1,335 (90.0%)	1,503 (96.5%)

## 第2章 調査・研究の記録

表1-2は、第2回調査について、都道府県別の発送数、回収数、回収率をまとめたものである。回収数の多かった都道府県は、1位：東京（302）、2位：神奈川（147）、3位：千葉（112）、4位：大阪（97）、5位：埼玉（91）である。また、回収率の高かった都道府県は、1位：島根（66.7%）、2位：青森（58.6%）、3位：鹿児島（47.8%）、4位：山形（47.6%）、5位：岐阜（46.5%）である。

表1-2 都道府県別の発送数・回収数

都道府県名	発送数	回収数	回収率	都道府県名	発送数	回収数	回収率
北海道	166	56	33.7%	滋賀	43	18	41.9%
青森	29	17	58.6%	京都	127	36	28.3%
岩手	12	5	41.7%	大阪	376	97	25.8%
宮城	69	29	42.0%	兵庫	247	52	21.1%
秋田	36	15	41.7%	奈良	50	13	26.0%
山形	21	10	47.6%	和歌山	22	3	13.6%
福島	41	14	34.1%	鳥取	16	7	43.8%
茨城	96	27	28.1%	島根	9	6	66.7%
栃木	52	14	26.9%	岡山	35	11	31.4%
群馬	67	25	37.3%	広島	84	35	41.7%
埼玉	306	91	29.7%	山口	35	7	20.0%
千葉	308	112	36.4%	徳島	30	13	43.3%
東京	959	302	31.5%	香川	26	12	46.2%
神奈川	450	147	32.7%	愛媛	42	17	40.5%
新潟	54	23	42.6%	高知	14	2	14.3%
富山	35	12	34.3%	福岡	151	57	37.7%
石川	51	14	27.5%	佐賀	11	5	45.5%
福井	14	6	42.9%	長崎	26	5	19.2%
山梨	34	12	35.3%	熊本	53	20	37.7%
長野	42	15	35.7%	大分	24	8	33.3%
岐阜	43	20	46.5%	宮崎	19	6	31.6%
静岡	98	40	40.8%	鹿児島	23	11	47.8%
愛知	272	85	31.3%	沖縄	33	10	30.3%
三重	42	15	35.7%	合計	4,793	1,557	32.5%



### 3. 「バレエ教育に関する全国調査」の集計と分析

#### 3. 1 バレエ教育市場の実態

##### 3. 1. 1 市場規模の推定

「全国調査」の集計結果からバレエ教育の実態を明らかにするため、まず教育市場の規模を推定し、次にバレエ学習者（生徒）とバレエ教室の2側面について論じる。

第1に、2016年の調査時点のバレエ教室総数の推定値は4,640である。この数は、2016年度の全国の高等学校の数、4,925におよそ等しい<sup>4</sup>。以下、推定の手順を説明する。

本調査は網羅的な名簿作成を行い、全国4,793のバレエ教室へ調査票を送付して1,557通を回収した。しかし、このうち4通の調査票は全問無回答だったため、有効回答票は1,553であった。また、回収の結果、バレエを教えていない教室（以下「非バレエ教室」）が送付先に若干含まれていた（表1-1参照）。そこで、送付先の4,793に非バレエ教室が含まれている割合を有効回答票に非バレエ教室が含まれていた割合で推定し、バレエ教室総数を $4,793 \times 1,503 \div 1,553 = \text{約} 4,640$ と算出した。

第2に、2016年のバレエ生徒総数の推定値は35万8千人である。以下、この数値の推定手順を説明する。

今回の調査では、調査票の「現在、バレエのクラスを受けている生徒は何人いますか」という設問に対して、893件の有効回答が得られた。この有効回答の生徒人数の合計は、68,901人であった。本調査では回答者の負担を軽減して有効回答率を上げるため、「正確な数字が不明の場合は、およその数字でかまいません」と明記したため、これらの回答には、「50人」、「100人」のように丸めた数字や、「約50人」、「100人ぐらい」という表記が少なからず含まれていたが、これらもそのまま合計した。また「20～30人」、「4、5人」という表記は、それぞれ25人、4.5人とみなす処理を行って合計した。

以上の結果、今回の調査では、有効回答1件あたりの平均生徒数は、 $68,901 \text{人} \div 893 \text{件} = 77.2 \text{人}$ となる。この平均生徒数を、全国のバレエ教室1件あたりの平均生徒数と推定し、全国のバレエ生徒総数を、 $77.2 \text{人} \times 4,640 = \text{約} 35 \text{万} 8 \text{千人}$ と算出した。

表2は、第1回と第2回の「全国調査」の結果から、以上で述べたような方法で推定した数値を比較したものである。男子バレエ生徒総数、バレエ教師総数も、バレエ生徒総数と同じ方法によって推定した。推定の基となる第2回調査の有効回答数は、男子バレエ学習者数は1,475件、バレエ教師数は1,490件である。男子バレエ生徒総数は、 $2,509 \text{人} \times (4,793 \times 1,503 \div 1,553) \div 1,475 = \text{約} 7900 \text{人}$ 、バレエ教師総数は、 $4,774.5 \text{人} \times (4,793 \times 1,503 \div 1,553) \div 1,490 = \text{約} 15,000 \text{人}$ と推定した。なお、表中の日本総人口は、総務省の発表した人口推計である<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 文部科学省『平成28年度学校基本調査』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1375036.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1375036.htm)

<sup>5</sup> 総務省統計局『人口推計』 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/>

表2 バレエ教育に関する推定値

	第1回調査 2011年	第2回調査 2016年	5年間の 増減率
バレエ教室総数	4,530	4,640	+2.4%
バレエ生徒総数	40.0万人 (人口比0.31%)	35.8万人 (人口比0.28%)	-11%
男子バレエ生徒総数	5,500人 (学習者比1.4%)	7,900人 (学習者比2.2%)	+44%
バレエ教師総数	19,000人	15,000人	-21%
日本総人口	1億2780万人	1億2693万人	-0.7%

上述の数値の推定方法には、いくつかの問題がある。まず、推定値が実際の値より小さくなる要因としては、バレエ教室総数の過小評価がある。この推定方法では、調査票の送付先の数を全国バレエ教室総数の上限とみなしているが、「教室データベース」に漏れがあれば、教室総数・生徒総数の実数値は推定値より大きくなるであろう。

一方、推定値が実際の値より大きくなる要因としては、バレエ教室あたりの平均生徒数・平均教師数の過大評価がある。調査票を未回収のバレエ教室群と当該の設問に未回答のバレエ教室群は、有効回答を得たバレエ教室群よりも平均生徒数・平均教師数が小さい可能性は否定できない。その場合、生徒総数・教師総数の実数値は、推定値よりも小さくなるであろう。また、同一の生徒・教師が複数のバレエ教室に所属している場合は、計数に重複が生じる。そのような生徒・教師が多いほど、実数値は推定値より小さくなる。

これらの問題点はあるものの、2回の「全国調査」で入手したデータから推定する限り、上述の推定方法は最善策である。表2に示した推定値を見ると、5年間でバレエ教室総数に大きな変化はないものの、バレエ生徒総数は約1割、バレエ教師総数は約2割減少し、日本のバレエ教育市場がやや縮小したことが明らかになった。このバレエ教育市場の変化については、3.2.1で改めて社会的背景を考察する。

### 3. 1. 2 バレエ学習者の実態

バレエ学習者に関して、ここでは性別と年齢による分布に注目し、「全国調査」の集計結果に基づいて現状と変化を記述する。

バレエ学習の性差に関して、女性が圧倒的に多いことは社会的に周知の事実である。しかし今回の調査では、5年間で男子生徒数に関して明瞭な変化があったことが見出された。

表2で示した通り、バレエ生徒総数の推定値は1割ほど減少しているにもかかわらず、男子生徒総数の推定値は4割以上も増加している。学習者の総数に対する割合も、1.4%から2.2%へ大きく増えている。いまだ男女比は1:50であり、日本で男性のバレエ学習者は例外的という実態は変わらないものの、5年間で確実に男子生徒の存在感が増していることが分かった。これは、今回の調査で最も顕著な変化の一つである。

一方、年齢による分布に関しては、年齢層別の教室在籍率を分析した。2回の調査では、各バレエ教室に年齢層別の生徒数を尋ねるのは回答者の負担が大きすぎるため、どの年齢層の生徒が在籍しているかを、年齢層ごとに「いる/いない」の2択で尋ねた。この設問における年齢層はバレエ教育の特性に配慮して設定し、未成年は9つに細分化し、20~79

歳は10歳ごと6つに分け、80歳以上を加えて14の年齢層を用意した。この設問への有効回答を集計し、バレエ教育市場が対象としている年齢層に変化があるかどうかを分析した。

表3は、14の年齢層について、年齢層別在籍率、すなわち当該の年齢層の生徒が在籍していると回答したバレエ教室の比率（有効回答数に対する割合）を示したものである。これらの比率に対しては、2回の調査のあいだでFisherの正確検定（直接確率法）による2群の比率の差の検定を行った。検定の結果は、有意水準5%で帰無仮説が棄却できなかった項目について“n. s.”、有意水準5%、1%、0.1%で帰無仮説が棄却できた項目について、それぞれ\*、\*\*、\*\*\*という記号で表右端の欄に示した。（記号は表4以降の表でも同様）。

表3 バレエ学習者の年齢層別在籍率

年齢層	第1回調査 2011年	第2回調査 2016年	比率の差 の検定
3歳以下	22.0%	21.2%	n. s.
4歳～就学前	84.8%	82.6%	n. s.
小学1・2年	88.4%	85.1%	*
小学3・4年	88.3%	84.8%	**
小学5・6年	83.5%	84.0%	n. s.
中学生	76.8%	79.9%	*
16～19歳	68.0%	71.0%	n. s.
20代	70.8%	66.3%	*
30代	76.8%	68.8%	***
40代	79.9%	78.8%	n. s.
50代	69.2%	74.3%	**
60代	45.8%	58.7%	***
70代	10.3%	19.5%	***
80歳以上	1.4%	2.5%	n. s.

表3に示した結果より、日本のバレエ教育市場が対象としている生徒の年齢層に関しては、以下のことが明らかになった。

第1に、2回の調査で共通しているのは、日本のバレエ教育は3歳以下の幼児から80歳以上まで全年齢層を対象に行われている点、小学生の在籍する教室が8割を超えており女子小学生がバレエ教育の中心層である点、同時に40代の在籍する教室が8割に近い点である。総体としてのバレエ教育市場の傾向は、5年を経ても変わっていない。

第2に、未成年においては、小学1～4年生で統計的に有意な在籍率の減少、中学生で統計的に有意な在籍率の増加が認められる。しかし、いずれも数ポイントの差であり、著しい変化ではない。

第3に、成人においては、20代と30代で統計的に有意な在籍率の減少、50～70代で統計的に有意な在籍率の増加が認められる。これらのうち30代で在籍率が77%から69%、60代で46%から59%、70代で10%から20%と、やや目立った変化が現れている。

以上のような性別と年齢による分布の変化については、3.2.2で、その社会的な背景を詳しく考察する。

## 第2章 調査・研究の記録

### 3. 1. 3 バレエ教室の実態

バレエ教室に関しては、経営主体の種別の分布と、教室ごとの生徒数、教師数の分布に注目し、「全国調査」の集計結果に基づいて現状と変化を記述する。

まず、各バレエ教室の経営主体については、「貴教室の経営主体をお答えください」という質問を設け、個人、企業（学校、バレエ団を除く）、学校（幼稚園、保育所を含む）、バレエ団、その他の5つの選択肢から択一で回答を求めた。択一という指示にもかかわらず、複数の種別（例えば「個人」と「バレエ団」）を選んだバレエ教室に関しては、その他の回答から判断できる場合は、5つのどれかに割り当てる処理を行った。

表4は、経営主体の5つの種別について、バレエ教室の比率（有効回答数に対する割合）を示したものである。これらの比率に対しては、第1回調査と第2回調査のあいだでFisherの正確検定による2群の比率の差の検定を行い、その結果を表右端に示した。

表4 バレエ教室の経営主体

経営種別	第1回調査 2011年	第2回調査 2016年	比率の差 の検定
個人	70.1%	74.7%	**
企業	23.6%	18.0%	***
バレエ団	1.8%	1.6%	*
学校	1.1%	0.4%	n. s.
その他	2.3%	1.3%	*

表4に示した結果より、日本のバレエ教育市場を支えているバレエ教室の経営主体に関して、個人経営が7割を超えて圧倒的に多いという相対的な傾向は、5年を経ても変わっていないことが分かった。同時に、個人経営が70%から75%へ統計的に有意な増加を示し、企業経営が24%から18%へ統計的に有意な減少を示している。一方、バレエ団による経営と「その他」の種別も統計的に有意な減少であるが、大きな変化ではない。

経営主体に「その他」を選んだバレエ教室には、具体的な経営形態を記入するよう求めた。第2回調査では「その他」の回答が59件あり、その中には「公益財団法人」5件、「NPO法人」4件、「サークル」3件、「一般社団法人」2件などが含まれていた。

次に、バレエ教室ごとの生徒数、教師数について、平均値と中央値を求めた。表5は、バレエ教室1件あたりの生徒数の平均値と中央値、男子生徒数の平均値、教師数の平均値と中央値をまとめたものである。表5の上半分は、有効回答すべてについて集計した結果である。表5の下半分は、第1回調査と第2回調査の両方に回答したバレエ教室611についてのみ集計した結果である。

これらの平均値に対しては、第1回調査と第2回調査のあいだで平均値の差の検定を行った。母集団が正規分布と仮定できないので、検定手法としてMann-WhitneyのU検定（Wilcoxonの順位和検定）を採用し、有効回答すべてのデータでは対応のない平均値の差の検定、2回とも回答した611教室のデータでは対応のある平均値の差の検定を行った。検定の結果は、表右端の欄に示した通りである。

表 5 バレー教室の平均生徒数

		第 1 回調査 2011 年	第 2 回調査 2016 年	平均の差 の検定
有効回答 すべて	生徒数 平均値	87.8 人	77.2 人	n. s
	生徒数 中央値	55 人	50 人	—
	男子生徒数 平均値	1.2 人	1.7 人	***
	教師数 平均値	4.2 人	3.2 人	***
	教師数 中央値	3 人	2 人	—
2 回とも 回答した 教室	生徒数 平均値	77.7 人	64.0 人	***
	生徒数 中央値	60 人	50 人	—
	男子生徒数 平均値	1.4 人	1.5 人	*
	教師数 平均値	4.0 人	2.9 人	***
	教師数 中央値	3 人	2 人	—

バレー教室ごとの生徒数、教師数については、さらに度数分布を分析した。図 1 は、生徒数を 10 人ごとに区切ってヒストグラムで示したものである。ただし、縦軸の数値は確率密度を表している。また、生徒数を 501 人以上と回答した教室が、第 1 回調査に 16 件、第 2 回調査に 7 件あったが、ヒストグラムからは除外した。この図において、例えば 91～100 人、291～300 人の区間が前後の区間より突出しているのは、概数による回答を許容したため、「100 人」、「300 人」という丸めた数字による回答が多かったからである。

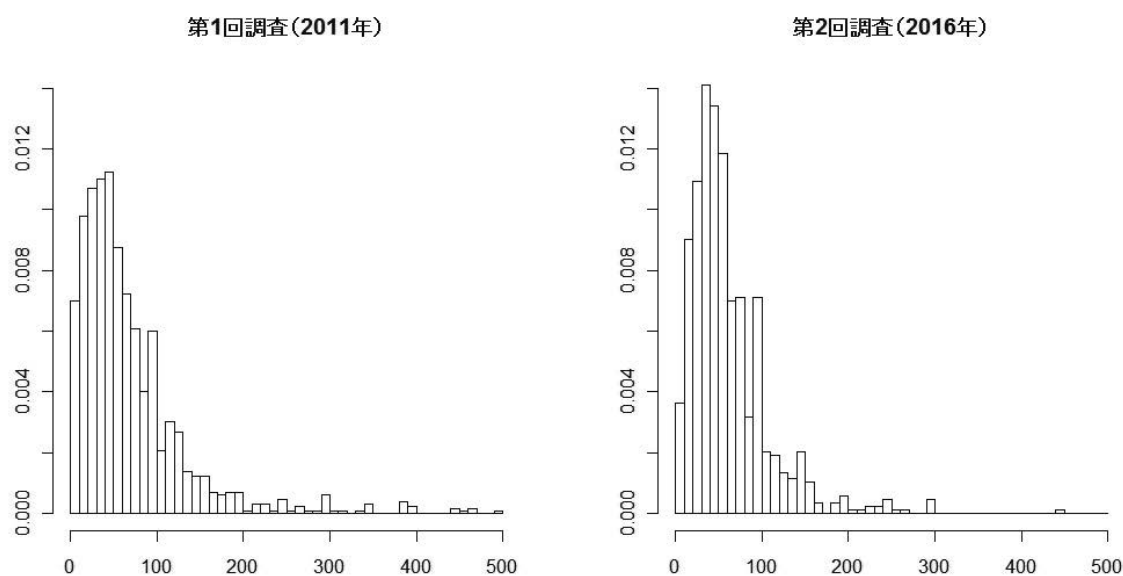


図 1 教室別バレー生徒数の分布

一方、図 2 は、教師数の相対度数分布をヒストグラムで示したものである。ただし、教師数を 51 人以上と回答した教室が、第 1 回調査に 3 件、第 2 回調査に 2 件あったが、ヒストグラムからは除外した。

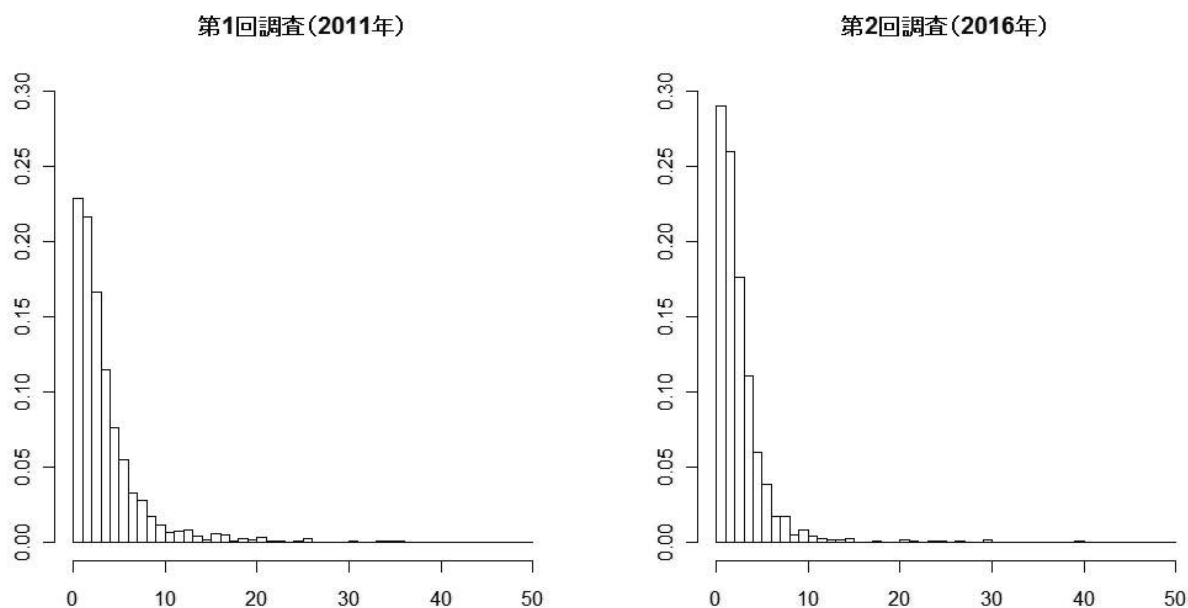


図2 教室別バレエ教師数の分布

以上、表5と図1、図2に示した結果より、バレエ教室の生徒数、教師数に関しては、以下のことが明らかになった。

第1に、日本のバレエ教室が小規模なものに偏っているという傾向は、5年を経ても変わっていない。わが国では、生徒が50人以下の教室が半数を占め、教師も3人以下の教室が過半数を占めている。具体的な数値を示せば、2011年は生徒数50人以下が有効回答数の50%、教師数3人以下が61%、2016年は生徒数50人以下が51%、教師数3人以下が72%である。

第2に、5年間で教室規模の縮小傾向が見出された。教室ごとの生徒数の平均値の減少は、有効回答全体では統計的に有意と認められなかったが（88人から77人）、2回とも回答した教室では統計的に有意な変化であった（78人から64人）。また、教師数の平均値は、有効回答全体で、4人から3人へ統計的に有意な減少を示している。図2を見ると、教師が1人、2人の教室の相対度数が5年間で増大していることが分かる。具体的な数値を示せば、2011年は教師数1人が有効回答数の22%、2人以下が44%（「1～2人」という回答を含む）であったのに対し、2016年は教師数1人が29%、2人以下が55%である。

以上の経営主体の種別の分布と、教室ごとの生徒数、教師数の分布の変化については、次節で、その社会的な背景を詳しく考察する。

### 3. 2 バレエ教育市場の変化に関する考察

日本全国の変遷バレエ教育市場の変化について、その社会的背景を、市場規模、バレエ学習者、バレエ教室の順に考察する。考察にあたっては、総務省など他機関が行った統計データも手がかりと裏づけに用いる。

また「全国調査」では、質問票に「日本のバレエ教育について、あるいはこのアンケート内容について、ご意見、ご感想、ご要望などを、自由にお書きください」という自由記述の設問を用意し、バレエ教育の現場の声を収集した。以下では、第2回調査における自由記述の回答文、全547件、総文字数約8万字を分析した結果も考察の手がかりとする。

#### 3. 2. 1 市場規模の変化

「全国調査」の結果、日本のバレエ教育市場は5年間で多少縮小していることが明らかになった。バレエ生徒総数で推定される縮小の幅は、約1割である。自由記述の回答分析からは、例えば「バレエ人口が減っているとよく耳にします」（秋田）、「バレエ人口が減り【中略】スクールを維持できない感じです」（新潟）といった回答が示すように、現場の多くの関係者が、バレエ教育市場の縮小を実感していることも判明した。

市場縮小の社会的背景として、バレエ教育の現場で認識されているおもな要因は、(1)人口構造の変化、(2)経済状況の変化、(3)学習選好の変化の3つである。

(1)人口構造の変化は、多くの回答者が「少子化」という語で指摘している。例えば、「少子化により生徒数が減少」（熊本）、「子供の減少により、年々生徒が減りつつあるのが実状です」（静岡）などの回答が典型的である。しかし、この5年間の人口動態を全国規模で見ると、少子化がバレエ教育市場の縮小の主要因とは断言できない。

表6は、総務省の発表している人口推計にもとづいて、2回の調査を実施した翌月、2011年10月と2016年10月の日本の人口構成を比較したものである<sup>6</sup>。これを見ると、確かに若年層が減少しているものの、バレエ生徒総数の1割減少に見合う減少幅ではない。

表6 日本の人口構成の変化

年齢層	2011年10月	2016年10月	増減率
0～9歳	1,079万人	1,045万人	-3.2%
10代	1,199万人	1,148万人	-4.2%
20代	1,359万人	1,269万人	-6.6%
30代	1,781万人	1,523万人	-14.5%
40代	1,728万人	1,893万人	+9.5%
50代	1,596万人	1,540万人	-3.5%
60代	1,849万人	1,835万人	-0.8%
70代	1,333万人	1,394万人	+4.6%
80歳以上	857万人	1,046万人	+22.2%
総人口	12,780万人	12,693万人	-0.7%

<sup>6</sup> 総務省統計局『人口推計』 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/>

## 第2章 調査・研究の記録

表3に示した年齢層別の生徒在籍率から分かる通り、バレエ教育市場の最大の顧客層は小学生であるが、表6を見ると、0～9歳の年齢層は5年間で3.2%、5～9歳の年齢層でも3.3%しか減少していない。年齢層別の生徒在籍率では、50～70代では逆に増加しており、総人口の減少が0.7%であることを考えると、少子化による生徒の減少が高齢化による生徒の増加で相殺されている可能性も否定できない。5年間の変化は、人口動態からは十分に説明できない。

(2)経済状況の変化に関しては、家計における支出減少がバレエ教育市場の縮小に影響を与えている蓋然性は高い。総務省の『家計調査』によれば、2人以上の世帯における月間消費支出は、2011年7～9月の平均277,355円から2016年7～9月の平均273,842円へ、3,514円減少している<sup>7</sup>。わずか1.3%の減少であるが、内訳を見ると、バレエなどの習い事への支出が含まれる「教養・娯楽」の月間支出が、2011年7～9月の平均30,227円から2016年7～9月の平均29,103円へ、1,124円減少している。消費支出の減少分のおよそ3分の1が「教養・娯楽」への選択的支出であり、これが全国規模で見た場合、バレエ教育市場の縮小要因となっていると推測できる。

多くのバレエ関係者は、バレエ学習の費用は高額であると認識している。例えば、「日本でバレエをするためにはお金がないとできない」(秋田)、「家庭的にも恵まれたごく限られた子供達しか続けられない現実がある」(東京)、「バレエを習うには、ある程度の収入のある家庭でないと、費用がかかりすぎる面が昔からあります」(山形)などの回答は、経済状況の悪化がバレエ教育市場の縮小に直結する現実を示唆している。

バレエ教育市場の縮小は、他の調査からも裏付けることができる。矢野経済研究所によるお稽古・習い事サービス市場の調査によれば、お稽古・習い事の市場全体の規模は、2011年の19,717億円と2016年の19,689億円でほぼ変わっていないにもかかわらず、「バレエ」の市場規模は2011年の430億円から2016年の405億円へ、6%減少している<sup>8</sup>。また、日本生産性本部の全国15～79歳を対象とした国民の余暇活動の調査によれば、「洋舞、社交ダンス」の参加人口は、2011年の210万人から2015年の140万人へ33%も減少している<sup>9</sup>。

(3)学習選好の変化に関しては、自由記述の回答において、近年、学習者がバレエよりも他ジャンルのダンスを選択する傾向が強まっているという指摘があった。例えば「最近クラシックバレエ教室に入会する方が減ってきたように思います。ジャズダンスやチアダンスといった手軽にはじめられる教室に多く入会されます」(愛知)、「ヒップホップならキッズも集まるが、バレエだと何故集まらないのか」(東京)などの指摘である。

確かに、矢野経済研究所による「ダンス教室市場」の調査によれば、2011年と2016年で「バレエ」の市場は上述の通り6%減少し、「社交ダンス」も790億円から735億円へ7%減少しているのに対し、「ジャズダンス、ヒップホップ、その他」は1,064億円から1,060億円とほぼ横ばいである。しかし、日本生産性本部の全国15～79歳を対象とした調査では、「エアロビクス、ジャズダンス」の参加人口は、2011年の550万人から2015年の450万人へ18%減少している。他のダンスが好まれるようになってバレエ教育市場が縮小したのかどうかは、本研究で収集したデータから十分に論証できなかった。

<sup>7</sup> 総務省統計局『家計調査』 <http://www.stat.go.jp/data/kakei/>

<sup>8</sup> 矢野経済研究所(編)『2016 レジャー産業白書』2016

<sup>9</sup> 日本生産性本部(編)『レジャー白書2016』2016



### 3. 2. 2 バレエ学習者の変化

「全国調査」の結果からは、バレエ学習者の性別と年齢による分布について、いくつかの興味深い変化を見出すことができた。

#### (a) 性別に関する変化

まず、学習者の性別に関しては、いまだ男女比は1:50で圧倒的に女性が多いものの、5年間で男子生徒総数が4割余りも増加していることが明らかになった。自由記述にも「男性がバレエを習う事も、今ではだいぶ増えてきたように思います」(東京)という回答が寄せられている。

男子生徒増加の社会的背景については、自由記述の回答には特に指摘がなかったが、男性バレエダンサーのマスメディア(以下「メディア」)への継続的な露出が一つの要因と推測できる。すなわち、プロ、アマチュアを問わず、男性バレエダンサーがメディアに、とりわけテレビに登場することが日常化し、社会的な認知度が向上したことで、男性がバレエを習うことへの抵抗感が和らぎ、男子生徒が増加したと推測している。

プロの男性バレエダンサーでは、Kバレエカンパニーを主宰する熊川哲也の存在が大きい。Kバレエカンパニーの公演はTBSテレビが主催することが多く、同局の番組へしばしば出演しているが、日本テレビやNHKなど他局へも少なからず出演している。熊川は世界で成功した人物として、野球におけるイチロー、テニスにおける錦織圭のように、バレエを志す男子生徒のロールモデルとなっている。また、Kバレエカンパニーのプリンシパルである宮尾俊太郎もテレビ出演が多く、男性バレエダンサーの社会的な認知度の向上に貢献している<sup>10</sup>。

アマチュアの男性バレエダンサーでは、国際的なバレエコンクールの受賞者が大きな影響を与えている。一つの契機は、2014年2月、ローザンヌ国際バレエコンクールで二山治雄が1位を受賞したことであった。同コンクールは、これからプロを目指すバレエダンサーの登竜門である。しかし、メディアは17歳の二山の優勝をスポーツの世界選手権における金メダル獲得のように扱い、すべての全国紙が記事とし、さらに東京キー局がこぞって朝のワイドショー番組で取り上げた。このようなメディアスクラムは、1989年に熊川がローザンヌ国際バレエコンクールで1位を受賞したときにはなかった現象である。

メディアは二山の受賞以後、海外での男性バレエダンサーの活躍をより積極的に取材するようになったように思われる。例えば最近では、2016年6月、平野亮一が英国ロイヤル・バレエ団のプリンシパルに昇格したことを、NHKのテレビニュースを含む多くのメディアが取り上げた。

2014年以降、全国紙に「バレエ男子」という呼称も登場している。例えば、朝日新聞の記事は「改めてバレエ男子の存在にも注目が集まっている。」<sup>11</sup>、読売新聞の記事は「海外で活躍する日本人に憧れてバレエを習う生徒は多く、『バレエ男子』も増えている。」<sup>12</sup>と言及している。このような記事からは、男性のバレエ学習はまだ物珍しいとは言え、徐々に一般化へ向かっていることが分かる。

<sup>10</sup> 宮尾俊太郎はTBS系列のドラマに2010、2012、2014、2016年に出演。また日本テレビ系列の番組「アナザースカイ」で2008～2010年に司会を務めた。

<sup>11</sup> 「バレエ、日本の若手が活躍」『朝日新聞』東京夕刊, 2014.2.22.

<sup>12</sup> 「熱狂 2017 ローザンヌ (上) 出場常連校 後絶たぬ希望者」『読売新聞』東京朝刊, 2017.1.23.

## 第2章 調査・研究の記録

### (b) 年齢層に関する変化

次に、学習者の年齢に関しては、バレエ教室の在籍率が小学1～4年生で減少、中学生で増加、20代と30代で減少、50～70代で増加していることが明らかとなった。表3に示した通り、これらはいずれも統計的に有意な変化である。

前項で述べたように、全年齢層を合計したバレエ生徒総数の1割減少を日本の人口構造の変化で説明するのは難しい。しかし、年齢層別に見たときの生徒在籍率が減少したことは、この5年間の人口構造の変化を要因の一つとしてあげることができる。文部科学省の『学校基本調査』によれば、小学1～4年生の児童数は、2011年度の452.9万人から2016年度の432.6万人へ4.5%減少している<sup>13</sup>。また表6に示した通り、20代の人口は6.6%減少、30代は14.5%減少しており、これらの人口動態が、表3に示した年齢層別の生徒在籍率減少の要因であると考えるのは妥当である。

ただし、笹川スポーツ財団の調査によれば、小学1～4年生のお稽古事としてのバレエの参加率は、2011年の3.7%から2015年は2.4%へ減少している<sup>14</sup>。小学1～4年生の在籍率減少の原因としては、人口動態のみでなく、参加率そのものの減少も考慮すべきである。

中学生の生徒在籍率の増加は、人口構造の変化では説明できない。文部科学省の『学校基本調査』によれば、中学生の児童数は、2011年度の357.4万人から2016年度の340.6万人へ4.7%減少している。これに対してバレエ教室における中学生の生徒在籍率は増加(3ポイント増)していた。

自由記述の回答には、中学受験または中学入学のタイミングでバレエ学習を中断する生徒が多いという指摘が多かった。例えば、「小学校5・6年生になると中学受験の為塾に行き、辞める子が増えた」(東京)、「中学受験を理由にほとんどの生徒がやめてしまう」(神奈川)、「中学生になると学業、部活などと両立がむづかしくなりやめていく子供が多いです」(富山)などの指摘である。確かに「全国調査」の結果でも、中学生の生徒在籍率は小学生より低くなっている。中学生の生徒在籍率の微増は、(a)中学入学でバレエをやめる生徒が減った、(b)中学受験で中断していたバレエを再開する生徒が増えた、(c)中学からバレエを始める生徒が増えたなどの仮説を立てることができるだろう。これらの仮説は本研究で入手したデータでは裏付けられないため、検証は今後の研究課題とする。

中学生と同様に、50代、60代、70代の生徒在籍率の増加も、人口構造の変化では説明できない。表6に示した通り、5年間で50代の人口は3.5%減少、60代は0.8%減少に対し、年齢層別の生徒在籍率は増加(50代は5ポイント増、60代は13ポイント増)している。70代の人口は4.6%増加しているが、生徒在籍率の増加(9ポイント増)は人口の増加幅よりかなり大きい。50代以上において、バレエ学習の普及が進んだことは明らかである。自由記述の回答には「趣味の年配者達のバレエ熱、舞台上で踊る事の意欲はどんどん伸びてきており【後略】」(東京)という指摘もあった。日本のバレエ教育市場は、少子化による生徒数の減少を、高齢化による生徒数の増加で部分的に補っている面があることが明らかになった。

<sup>13</sup> 文部科学省『平成28年度学校基本調査』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1375036.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1375036.htm)

<sup>14</sup> 笹川スポーツ財団(編)『子どものスポーツ・ライフデータ』2015

### 3. 2. 3 バレエ教室の変化

「全国調査」の結果から、バレエ教室の経営主体と規模の分布について、5年間の変化を見出すことができた。

バレエ教室の経営主体に関しては、表4に示した通り「個人」の割合が増加し、「企業」が減少していることが明らかになった。「企業」には非営利企業も含まれるが、回収票を精査したところ、経営主体が非営利にもかかわらず「企業」と回答した可能性のあるバレエ教室は、ほとんど見いだせなかった。このことと、バレエ教室総数は大きく変化していないことを考え合わせると（推定値2.4%増。表2参照）、この5年間で一部の営利企業がバレエ教育から撤退し、新たな市場参入は個人経営が多かったことがうかがわれる。バレエ教育市場の縮小に対して、利潤追求を至上課題とする営利企業が、個人よりも敏感に反応したためと考えられる。

バレエ教室の規模に関しては、教室あたりの生徒数、教師数において小規模化が進んでいることが明らかになった。教師数2人以下の教室が2011年の44%から2016年の55%へ増えたことは、前述の通りである。

個人経営の増加と教室の小規模化は連関している。教室あたりの平均生徒数は、2011年の調査では個人経営が71.6人に対し企業経営が121.8人、2016年の調査では個人経営が63.1人に対し企業経営が131.4人であった。また、教室あたりの平均教師数は、2011年は個人経営が3.5人に対し企業経営が5.4人、2016年は個人経営が2.7人に対し企業経営が4.7人であった。個人経営が企業経営より規模の小さいことは明らかである。日本のバレエ教育は、5年前も小規模な個人経営のバレエ教室が支えていたが、その傾向がいつそう強まったことを確認することができた。

自由記述の回答には、教室の経営悪化を訴える記述が少なくなかった。例えば、「バレエ教室の経営がむずかしい時代になってきている」（熊本）、「個人経営では限界があり、今後どのようにしていけばいいか考えているところです」（長崎）、「年々研究生が少く【ママ】なり、発表会【中略】やって来ましたがそのうちに出来なくなるのではないかと心配しています」（青森）などである。

なお、バレエ教室総数は、筆者らの推定値は微増にもかかわらず、NTT（東日本・西日本）の職業別電話帳『タウンページ』に「バレエ教室」という見出しの下に掲載されている件数は、2011年の2,400件から2016年の2,147件へ約1割減少している。これは、営業方法として電話を使わず、ウェブページやソーシャルメディアを利用するバレエ教室が増えたことが一つの要因として考えられるが、同時に、職業別電話帳にわざわざ掲載しない個人経営のバレエ教室が増えたことも要因と考えられる。

## 3. 3 バレエ教育の実態と変化

## 3. 3. 1 バレエ教師の現状と変化

## (a) バレエ教師の経歴

日本のバレエ教師の経験と知識の実態を把握する手掛かりとして、2回の「全国調査」ではバレエ団等所属の経歴を尋ねた。具体的に設けた質問は、「貴教室にはバレエ団または舞踊団に所属している（したことがある）バレエ教師はいますか」というものである。この質問には、誤読・誤解を避けるため、「ここでバレエ団とは、発表会以外に定期的にバレエの有料公演を行っている団体（海外を含む）とします。」という説明を添えた。

表7は、バレエ団等所属の経歴について、有効回答数に対する比率を示したものである。回答選択肢は表に示した5つで、重複回答可とした。また、これらの比率に対しては、第1回調査と第2回調査のあいだで、選択肢ごとに2群の比率の差の検定を行った。

表7に示した通り、5年前も現在も、全国のバレエ教室のおよそ3割には、バレエ団ないしバレエ以外の舞踊団に所属したことがある教師が1人もいない。また、5つの選択肢の内、5年間で統計的に有意な変化が現れたのは、「バレエ団に現在所属している教師がいる」教室の比率の減少のみであった。これより、バレエ団に「現在」所属している教師の割合は減少していることと、その他の項目では変化がないことが明らかになった。これらの数値に関しては、3.3.2で考察を加える。

表7 バレエ団等所属の経歴

	第1回 調査	第2回 調査	検定 結果
バレエ団に現在所属している教師がいる	27.5%	22.9%	**
バレエ団にかつて所属していた教師がいる	46.1%	48.3%	n. s.
バレエ以外の舞踊団に現在所属している教師がいる	6.1%	4.4%	n. s.
バレエ以外の舞踊団にかつて所属していた教師がいる	8.8%	9.6%	n. s.
以上にあてはまる教師はいない	30.2%	32.3%	n. s.

## (b) 指導者資格の取得状況

日本のバレエ教師の経験と知識の実態を把握するもう一つの手掛かりとして、2回の「全国調査」ではバレエ指導者資格の取得状況を尋ねた。具体的に設けた質問は、「海外には、国家や国際的な組織が認定するクラシック・バレエの指導者資格がありますが、貴教室にはそのような資格を持っているバレエ教師はいますか」というものである。ただし、「そのような資格」に「国家や国際的な組織」以外の民間団体が認定する資格を含めるかは、回答者の判断に委ねている。また、指導者資格を取得した教師がいると答えた場合には、具体的な資格名を自由記述で回答するように求めた。

表8は、バレエ指導者資格の取得状況について、有効回答に対する比率を示したもので

ある。5年前も現在も、全国のパレエ教室のおよそ8割は、バレエ指導者資格を取得した教師なしで教育を行っている状況に変化はなかった。

表8 バレエ指導者資格の取得状況

	第1回 調査	第2回 調査	検定 結果
バレエ指導者資格を取得した教師がいる	15.4%	16.2%	n. s.
バレエ指導者資格の取得を考えている教師がいる	5.8%	7.8%	*

第2回「全国調査」では、教師が取得した具体的な資格名を記入した教室が195あり、そのなかには資格名を複数記入したものもあった。具体的に記入された資格名で多かったものは、英国に拠点のあるロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス<sup>15</sup>（以下「RAD」と記す）関連の資格で81、ロシアに拠点のあるペルミ・バレエ学校の日本校<sup>16</sup>が認定しているワガノワメソッド教授法ディプロマが21、余バレエ・アカデミー<sup>17</sup>の教師クラスが14、文部科学省認定のパレエ専修学校で取得できる「専門士」が8であった。

第1回「全国調査」でも、具体的な資格名を記入した教室178の内66はRAD関連の資格であった。日本では、バレエ指導者資格の認定組織として、RADが最も認知されているという状況は変わっていない。

### 3. 3. 2 バレエ教師の変化に関する考察と現場の意識

日本全国のパレエ教師の現状と変化について、第2回調査における自由記述の回答文、総文字数約8万字の内容を分析した結果を用い、表7、表8に示した数値に考察を加える。

#### (a) バレエ教師の指導能力

表7、表8に示した通り、日本ではバレエ指導者資格を取得した教師が1人もいないパレエ教室が約8割で、バレエ団ないしバレエ以外の舞踊団に所属したことのある教師が1人もいないパレエ教室が約3割存在している。これらの数値は5年を経て変化していない。

言うまでもなく、バレエ指導者資格を取得していないことがバレエ教師としての適性や能力がないことにはならない。また、バレエ団への所属経験によって、バレエ教師としての適性や能力が保証されるわけでもない。しかし、自由記述の回答分析からは、誰でもバレエ教師を名乗って開業することができる日本のバレエ教育の実態に、現場の多くの関係者が問題を感じていることが判明した。

例えば、次のような回答には、一部のバレエ教師の経験と知識に関する強い不安と不満が表明されている（以下、回答文の引用は原文のまま。末尾の括弧は回答したパレエ教室の所在都道府県）。

<sup>15</sup> Royal Academy of Dance URL:<http://www.rad.org.uk/>

<sup>16</sup> ワガノワメソッド教授法ディプロマについては、次のサイトを参照。

「ロシア国立ペルミバレエ学校 日本校」 URL:<http://www.permballet-japan.com/lic/>

<sup>17</sup> 余芳美が主宰するパレエ教室。1978年に開設し、千葉県に本拠地がある。

## 第2章 調査・研究の記録

- ・日本では、経験が全く無い者でもバレエ教室を自由に開き間違った方法論を広めてしまう事が大きな問題だと思います。(千葉)
- ・トウシューズを1度も履いた事がないけどバレエ教室を経営、レッスンも教えるという方も知っています。(千葉)
- ・日本では、指導法を学んでいない先生方が自由に教室を開いており、数が多く、専門職でありながら、ひどい環境だと思います。(神奈川)
- ・誰でも度胸と場所があれば、即先生に成れる…。これが全ての大問題であると思います。(神奈川)
- ・ついこの間まで趣味でやっていた方がスタジオを開くこともできていて、疑問を感じます。(石川)

反対に、誰でもバレエ教師を名乗って開業できる日本の現状を、認可がなければ開業が難しい他国と比較して、自由でよいと肯定的に評価する記述は、1件も見出されなかった。

自由記述の回答には、このような現状への対処方法として、新たな国家レベルの指導者資格を求める声も多数見出された。例えば、次のような回答が典型的である。

- ・国営のバレエ技術認定・基礎認定を望みます。(秋田)
- ・教育については、今後国家資格など、制度ができれば、教師の質も、もう少し揃うので良いと思います。民間での資格には、反対です(群馬)
- ・バレエ教師として日本の国家資格が出来てほしい。(愛知)
- ・指導者資格を国で定めたもの、もしくは、バレエ協会にて定めたものの許可制を希望します。(広島)

しかし、バレエ指導者資格の創設に関しては、支持する声ばかりではない。例えば次のように、慎重な意見、批判的な意見も見受けられた。

- ・日本でも、指導者資格制度があればと思うが、今の日本で、誰ができるのか【中略】。誰がやっても納得がいくものにならない(埼玉)
- ・一般のバレエの教室においては、各々の伝統に基づいた基本と自由な発想のレッスンが、少人数の利便・個性・技量によって教授できる良さがあります。資格制度は、やり方によっては規制・制限になりかねません。(愛知)
- ・バレエの指導者資格を考えた事もありましたが、日本人の骨格に合わず、必ずしもその教授法が正しくない場合もあり、むずかしいと考えています。(沖縄)

### (b) 指導者資格制度に対する問題意識

第2回「全国調査」の自由記述の設問においては、全547件の内、前項で引用した回答も含めて74件(14%)の回答で「資格」についての言及が見出された。この74件の回答文を詳しく内容分析したところ、バレエ指導者の資格制度に関して、おもに3つの問題点が指摘されていることが分かった。

第1は、バレエ教授法の多様性の問題である。自由記述には、日本では、ロシア派、フ

ランス派、イギリス派など、バレエ教室ごとにさまざまなメソッドを採用しており、欧米以上にメソッドが分散しているのではないかという指摘が複数見受けられた。実際に、欧米以上にメソッドが分散しているかどうかは検証しなければ分からない。しかし、確かにわが国において、特定のメソッドの資格制度を優先的に普及させることも、さまざまなメソッドを折衷して資格制度を創設することも、現実的には極めて困難と言わざるを得ない。

第2は、教室間・団体間の利害調整の問題である。第1の問題と重なるが、すべての関係者が合意できる資格制度を作ることは難しいという指摘はもつともである。これに関しては、関係者の合意を形成するため、国家（政府）または日本バレエ協会の役割に期待する回答が多かった。一方、RAD など既存のバレエ指導者資格を国家レベルの資格として採用すればよいという意見は見出されなかった。

第3は、日本バレエの独自性の問題である。日本人の骨格・筋肉にふさわしいバレエ教授法が存在するのではないか、あるいは日本の文化に相応のメソッドがあるのではないかという指摘である。この点に関しては、医学、生理学、心理学などの知見に基づいた科学的な解明が必要であるが、現状では、合理的な判断が可能なほど研究が蓄積されているとは言えない<sup>18</sup>。

わが国ではバレエ教室の生徒および生徒の保護者にとって、バレエ教師の指導能力を評価する手掛かりが少ない。一般には、バレエ団への所属経験を手掛かりとする生徒や保護者は少なくないが、表7に示した通り、この5年間で「バレエ団に現在所属している教師がいる」教室の割合は28%から23%へ統計的に有意な減少を示している。

このような実態において、バレエ指導者資格の活用は、日本のバレエ教師の資質を保証するための選択肢である。表8に示した通り、5年間で「バレエ指導者資格を取得した教師がいる」教室の割合は15~16%で変化はなかったが、「バレエ指導者資格の取得を考えている教師がいる」教室の割合は6%から8%へ有意に増加している。資格制度に対する意識に、この5年間で前向きな変化があったものと考えられる。

### 3. 3. 3 バレエ教育内容の現状と変化

#### (a) レッスンの内容

2回の「全国調査」では、全国のバレエ教室が実施しているバレエ教育の内容を把握するため、レッスンの種別ごとに実施の有無を尋ねている。具体的に設けた質問は、「貴教室には、通常のパレエクラスの他に以下のようなパレエクラスがありますか。通年に限らず独立したクラスとして教えているものも含めてお答えください」というものである。

回答選択肢には、11種類のレッスンクラスを用意し、複数回答可で回答を求めた。ただし、何を「通常のパレエクラス」と考えるか、どのような内容ならば「ストレッチのクラス」、「ポアントのクラス」などとみなすのかについては、回答者の判断に委ねている。

表9は、11種類のレッスンクラスについて、それぞれ行っていると回答したバレエ教室の有効回答数に対する比率を示したものである。また、これらの比率に対して、第1回調査と第2回調査のあいだで2群の比率の差の検定を行った。

<sup>18</sup> 日本人の骨格・筋肉に関する解剖学的データの数値分布が外国人（例えばロシア人）の分布と異なっていたとしても、その差異をバレエ教授法に反映させる必要がどれほどあるかも検討を要する。

表9 レッスンクラスの種類

	第1回 調査	第2回 調査	検定 結果
ストレッチのクラス	37.9%	41.5%	n. s.
ポアントのクラス	47.5%	53.9%	**
大人の初級クラス	72.9%	75.8%	n. s.
美容や健康のためのクラス	39.5%	40.6%	n. s.
ヴァリエーションのクラス	29.8%	40.3%	***
アダージオ(パ・ド・ドゥ)のクラス	14.3%	19.1%	**
キャラクターダンスのクラス	5.6%	5.5%	n. s.
プロ志望者向けのクラス	13.3%	15.8%	n. s.
ボーイズクラス	5.6%	6.0%	n. s.
コンテンポラリーまたはモダン ダンスのクラス	18.4%	20.8%	n. s.
オープンクラス	33.3%	38.1%	*

表9に示した通り、5年を経て統計的に有意な変化が現れたのは、「ポアントのクラス」、「ヴァリエーションのクラス」、「アダージオ(パ・ド・ドゥ)のクラス」、「オープンクラス」の4種類で、いずれも実施している教室の割合が増加している。特に「ヴァリエーションのクラス」は30%から40%へと、やや大きな変化を示している。これらの変化に関しては、3.3.4で考察を加える。

#### (b) レッソンの音源

各バレエ教室で、レッスンの時にどのような音源を使っているかについては、「ピアノの生演奏」、「CD・MD・カセットテープなどの録音音源」、「その他」の選択肢を用意し、複数回答可で回答を求めた。

表10は、レッスンの音源について、有効回答数に対する比率と、2回の「全国調査」の比率の差を検定した結果を示したものである。

表10 レッソンの音源

	第1回 調査	第2回 調査	検定 結果
ピアノの生演奏	9.3%	9.4%	n. s.
CD・MD・カセットテープなどの録音音源	98.6%	99.0%	n. s.
その他	1.4%	1.7%	n. s.

表10に示した通り、ほとんどのバレエ教室で録音音源が使われていること、ピアノの生演奏は1割程度であることは、5年を経て変化していない。

「その他」を選択した場合には、具体的な音源を自由記述で回答するように求めたところ、記述は25件あり、その内 iPod または iPad が6件、タンバリン、太鼓など打楽器が5



件であった。

### (c) 発表会・コンクール参加

各バレエ教室でバレエの発表会を行っているかについては、行う／行わないの択一で回答を求めた。バレエコンクールへの参加については、「これまでに国内外のバレエコンクールに出場したことがある生徒はいますか」という質問を設けて、いる／いないの択一で回答を求めた。

表 11 は、発表会の開催とコンクールへの参加について、有効回答数に対する比率と、2 回の「全国調査」の比率の差を検定した結果を示したものである。

表 11 発表会・コンクール参加

	第 1 回 調査	第 2 回 調査	検定 結果
発表会の開催	85.7%	87.5%	n. s.
コンクールへの参加	51.1%	63.1%	***

表 11 に示した通り、9 割弱のバレエ教室で発表会を行っていることは、5 年を経て変化していない。日本のバレエ教育では、発表会の開催が常態化している。

一方、コンクールへの参加者がいるバレエ教室の割合は、51%から 63%へ、5 年間ではっきりした増加を示している。この変化に関しては、「全国バレエコンクール調査」の結果を踏まえて、第 4 章で考察を加える。

### 3. 3. 4 バレエ教育内容の変化に関する考察と現場の意識

日本全国のバレエ教育内容の現状と変化について、第 2 回「全国調査」における自由記述の回答文の内容分析を用い、表 9 に示した数値に考察を加える。

表 9 に示した通り、バレエ教室で行っているレッスン内容は、4 つのクラス種別で、実施している教室の割合が統計的に有意な増加を示している。

まず「オープンクラス」が、5 年間で 33%から 38%へ増加している。一般にオープンクラスは、月謝制のクラスに比べて受講しやすい。そのため、生徒の獲得に苦心しているバレエ教室にとって、バレエ教室の生徒獲得のための方策となっている可能性がある。

「アダージオ（パ・ド・ドゥ）」のクラスも 14%から 19%へ、比較的大きく増加している。アダージオは女子生徒にとって男性と組んで踊る貴重な機会であり、一般に中級・上級の生徒、とりわけ大人になってからバレエを習い始めた生徒層に人気が高い。そのため、オープンクラスと同様、バレエ教室の生徒獲得のための方策となっている可能性がある。

「ヴァリエーションのクラス」は 30%から 40%へ、他のクラス種別よりも明確な増加を示している。ヴァリエーションもアダージオと同様、大人になってからバレエを始めた生徒層に人気が高い。これもまたバレエ教室の生徒獲得のための方策となっている可能性がある。

同時に、コンクールでは、ヴァリエーションが定番の課題となっている。今回、国内バレエコンクールの調査で審査内容の判明した 44 のコンクールでは、そのすべてが「課題曲

## 第2章 調査・研究の記録

ヴァリエーション」または「自由曲ヴァリエーション」を審査内容に含めている。そのため、バレエ教室はコンクール出場の対策としてヴァリエーションのクラスを設けている蓋然性も高い。コンクールに出たい生徒をつなぎとめるためにも、ヴァリエーションのクラスの開設が経営上必要になってきていると考えられる。

「ポアントのクラス」は48%から54%の増加である。ポアントを履くことはバレエ学習者の大きな目標であり、やはり大人になってからバレエを始めた生徒層に人気があり、バレエ教室の生徒獲得のための方策となっている可能性がある。同時に、これもバレエコンクールへの出場を目標として学ぶ生徒のために、専門的な指導を行うクラスとして開かれている可能性がある。

以上で述べた解釈の内、コンクール参加とレッスン内容の関連性は、統計的な検定によって確かめることができた。すなわち、第2回「全国調査」のデータを用い、コンクールに参加した生徒がいる教室といない教室に分け、アダージオ、ヴァリエーション、ポアントの3種類のレッスンクラスについて実施比率を求め、いる教室といない教室の比率の間に統計的に有意な差があるかどうかを検定した。検定の結果、いずれも有意水準0.1%で帰無仮説を棄却できた。また、念のため第1回「全国調査」のデータでも同様の検定を行ったところ、同じくいずれも有意水準0.1%で帰無仮説を棄却できた。

さらに、アダージオのクラスの実施に関しては、表3に示した男子生徒総数の増加と関連性があることも検証できた。すなわち、第2回「全国調査」のデータを男子生徒がいる教室といない教室に分け、アダージオのクラスについて実施比率を求め、いる教室といない教室の比率の間に統計的に有意な差があるかどうかを検定したところ、統計的に有意な差が認められた（有意水準0.1%）。これは、男子生徒のいる教室ほどアダージオのクラスを実施していることを示している<sup>19</sup>。

このように、バレエ教室で行われているレッスン内容は、昨今のバレエ教室の経営悪化とそれに対する経営努力、そしてバレエコンクールの増加に影響を受けて変化したと説明できる。また、アダージオのクラスに関しては、男子生徒の増加との関連性も明らかとなった。

---

<sup>19</sup> 男子生徒総数の増加に関する社会的な背景については、次の論文で詳細な考察を行った。

小山、海野 *op. cit.*

### 3. 4 まとめ

「バレエ教育に関する全国調査」を実施し、第1回（2011年）と第2回（2016年）を比較・分析した結果、日本のバレエ教育環境の以下のような変化が明らかになった。

第1に、バレエ教育市場は、バレエ生徒総数で見ると40万人から35.8万人へ1割ほど、バレエ教師総数で見ると1.9万人から1.5万人へ2割ほど減少している。その社会的背景としては、経済状況が変化し、2人以上の世帯でバレエに対する家計支出が抑制された可能性が考えられる。

第2に、バレエ学習者の性別に注目すると、男子生徒が4割余り増加している。その社会的背景としては、男性バレエダンサーのマスメディアへの継続的な露出が要因の一つであると考えられる。

第3に、バレエ学習者の年齢に関しては、バレエ教室の在籍率が小学1～4年生で減少、中学生で増加、20代と30代で減少、50～70代で増加している。その社会的背景としては、日本の人口構造の変化（少子高齢化）と、中高年女性のバレエ学習ブームが要因の一部と考えられる。

第4に、バレエ教室に注目すると、営利企業による経営の割合が減少し、教室あたりの生徒数、教師数も減少している。その社会的背景としては、バレエ教育市場の縮小による教室経営の悪化が要因として考えられる。

第5に、バレエ教師の経歴に関しては、5年を経て「バレエ団に現在所属している教師がいる」教室の割合が28%から23%へやや減少したものの、総じて大きな変化は見出せなかった。指導者資格の取得状況に関しても、「バレエ指導者資格を取得した教師がいる」教室の割合は15%から16%へとほぼ変わっていなかった。

第6に、バレエ教室の教育内容に関しては、5年を経て、「ポアントのクラス」、「ヴァリエーションのクラス」、「アダージオ（パ・ド・ドゥ）のクラス」、「オープンクラス」の4種類で、いずれも実施している教室の割合が統計的に有意な増加を示していた。また、バレエコンクールに出場した生徒がいるバレエ教室の割合は、51%から63%へ増加していた。これらの変化は、この5年間でバレエ教室の経営状況の悪化と、国内バレエコンクールの急増によって説明することができた。

バレエ学習者、バレエ教室、バレエ教師の実態と、バレエ教室の教育内容に関する実証的な分析を通して、日本におけるバレエ教育環境の経年変化が明らかになったことは、本調査グループの重要な成果である。この新たな学術的知見に基づいて、日本のバレエ教育環境の改善のために、これから関係者のあいだで、日本の実態にふさわしいバレエ教育のあり方を議論する必要がある。

## 4. 「全国バレエコンクール調査」の概要

### 4. 1 調査方法

第3章で詳述した「バレエ教育に関する全国調査」を通して、日本のバレエ教育環境を考察するために、バレエコンクールの問題が肝要であることが明らかとなった。そこで本グループでは、「全国バレエコンクール調査」を企画・実施した。

調査の手順は、まずバレエコンクールの情報が掲載されているバレエ関係のウェブサイト<sup>20</sup>やバレエ関係の書籍・雑誌など<sup>21</sup>で事前調査を行い、国内コンクールのリストを作成した。この調査の結果、2016年1～12月に日本国内で開催されるバレエコンクールは106件にのぼることが分かった。そこで2016年11月、これらのコンクールを主催している61の団体へ106通の調査票を送付して回答を求めた。質問内容は、コンクールの創設年、開催頻度、応募者数、出場料、審査内容などである。

この補足調査では、最終的に46通(43.3%)を回収することができた。ただし1通は全問無回答なので、有効回答数は45件である。

### 4. 2 調査結果

コンクールの創設年が判明したのは44件で、2000年以前が11件、2001～05年が5件、2006～10年が8件、2011年以降が22件であった。また調査年の2016年に新設されたコンクールが4件あった。創設年が判明したコンクールの半数は第1回「全国調査」後に創設されたものであり、近年、国内コンクールが急増したことを実証することができた。

コンクールの応募者数を回答したのも44件で、1コンクールあたりの平均応募者数は282人であった。この平均応募者数を106件のコンクールの平均とみなすならば、2016年のコンクール応募者総数(延べ数)は約3万人と推定することができる。

表12は、コンクール決勝の審査方法について、複数選択で回答を求めた結果である。ヴァリエーションが審査の中心であることが明らかとなった。なお「その他」を選択した3件は、自由記述で「アンシェヌマン審査」、「参加者任意の作品」、「クラシックバレエからのヴァリエーション又は創作クラス・アンシェヌマン審査付帯」と説明されていた。

---

<sup>20</sup> 「バレエ コンクール」というキーワード検索の結果以外にも、例えば次のようなウェブサイトを参照して情報を収集した。

バレエナビ URL:<https://www.balletnavi.jp/>

バレエジャポン URL:<http://ballet-japon.com>

<sup>21</sup> 例えば次のような書籍を参照した。

日本バレエ協会編『舞踊年鑑2015』日本バレエ協会、2016。

東京バレエ協議会『平成25年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業』報告書、2014。

クララ編『バレエコンクール・パーフェクトガイド』新書館、2013。

表 12 決勝審査の方法

審査方法	件数	割合
クラスレッスン審査	4	9.1%
課題曲ヴァリエーション	10	22.7%
自由曲ヴァリエーション	34	77.3%
コンテンポラリー	12	27.3%
その他	3	6.8%
有効回答総数	44	100.0%

表 13 は、コンクール受賞者の褒賞について、複数選択で回答を求めた結果である。「その他」は、「シード権」4 件、「海外ワークショップ参加権」4 件などである。なお、出場料が判明した 32 のコンクールの平均出場料は 21,400 円であった。

表 13 受賞者の褒賞

褒賞の種類	件数	割合
賞金	24	53.3%
スカラーシップ	19	42.2%
賞品	38	84.4%
本選出場権	15	33.3%
なし	1	2.2%
順位をつかないコンクール	5	11.1%
その他	7	15.6%
有効回答総数	45	100.0%

## 4. 3 考察

### 4. 3. 1 バレエコンクール増加の要因

第 3 章で述べた通り、生徒の推定総数は 5 年間で 40 万人から 36 万人へ 1 割減少している。それにもかかわらずバレエコンクールが増加した理由として、少なくとも 3 つの要因が考えられる。

第 1 に、バレエ学習者にとって、わが国ではバレエコンクールが身近な学習目標となっている状況がある。若い生徒にとってコンクールは格好の力試しの場であり、技術向上のインセンティブとなる。職業としてのバレエダンサーを目指そうとしている一部の生徒も、ステップアップの手段として、あるいは海外のバレエコンクールに挑戦する前の準備として、国内のコンクールを利用している場合が多い。実際のところ、プロまたはセミプロのバレエダンサーが国内コンクールの受賞歴をプロフィールに記載することは珍しくない。バレエコンクールの増加は、バレエ学習者の需要に後押しされている。

第 2 に、バレエ教室にとって、バレエコンクールはより多くの生徒を集め、つなぎとめ

## 第2章 調査・研究の記録

るための資源となっている。既述の通り、わが国では生徒および生徒の保護者がバレエ教師の指導能力を評価する手掛かりが少ない。そのため、所属する生徒がコンクールで受賞したこと、多数のコンクールで実績を上げたことが、バレエ教室にとって有力な宣伝材料になっている。また、コンクール出場のためには、通常とは異なるクラスレッスンも必要となる。コンクールに対応した指導をしないと、コンクールに出たい生徒がやめてしまう場合すら少なくない。生徒の獲得に苦心しているバレエ教室にとって、バレエコンクールへの取り組みは、効果の期待できる経営努力と言ってよい。

第3に、コンクールの主催団体にとって、バレエコンクールは採算が取れるビジネスとみなされている。今回の国内バレエコンクールの調査によれば、無料で出場できるコンクールは存在しなかった。出場料が判明した32のコンクールの平均出場料は21,400円、1コンクールの平均応募者数は282人なので、1回のコンクールあたり平均で約600万円を徴収していることになる。バレエコンクールは、バレエ芸術の普及と発展を目的としつつも、ビジネスとしても流行している可能性がある。

国内バレエコンクールの増加は、3つの要因が相互に影響し合った結果と考えられる。

### 4. 3. 2 バレエコンクール増加に対する現場の意識

コンクールへの参加に関しては、表11に示した通り、51%から63%へ統計的に有意な増加が認められる。これは、バレエコンクール開催数の増加を直接反映した結果と考えてよい。前述の通り、現在日本では、バレエ学習者、バレエ教室、コンクール主催団体の3者の需要が重なり、コンクールブームが生じている。以下では、第2回「全国調査」の自由記述の回答を用いて、バレエ教育現場の問題意識を考察する。

第2回「全国調査」の自由記述の設問においては、全547件の回答の内90件(16%)で「コンクール」についての言及が見出された。これらの回答内容には、まずは次のように国内のコンクール開催数が過剰であるという指摘が多かった。

- ・コンクールが多すぎることを危惧しています。(千葉)
- ・最近気になるのはコンクールの乱立です。(大阪)
- ・日本のバレエ教育はコンクールが基準のようで国内のコンクールの数が異常に増え、価値を感じにくい。(兵庫)

しかし、一方で、バレエコンクールが生徒を集め、つなぎとめるために有用であることを裏付ける次のような指摘も見出された。

- ・コンクールが異常に多いのは、どうしたものでしょうか？【中略】と思いつつも、親子が望むのでコンクールの指導はしています。(北海道)
- ・発表会の折、コンクール入賞の数とかをスタジオの宣伝にしているところが多くバレエを習おうとする人もその数の多いところを選ぶ事が多い様です。(千葉)
- ・当教室は1年に1度の発表会を大切に指導に努めています。しかしながら、やはりコンクールという問題は大きく、時代の流れとともにコンクールに出してもらえないなら、他へ移る、辞めるという現実もあります。(長野)

- ・昨今の急激なコンクールの増加により、生徒や保護者の方々からの様々な要望も増えました。(大阪)

コンクールに言及した 90 件の回答文を詳しく内容分析したところ、コンクールブームの過熱に対して、バレエ教育の現場からおもに 4 つの観点から批判がなされていることが分かった。

第 1 は、コンクール出場を意識し過ぎたテクニック重視、ヴァリエーション偏重の教育が、バレエ教育を歪めているという批判である。例えば、次のような回答が典型的である。

- ・コンクール偏重の現在の日本のバレエの状況に常々疑問を感じています。バリエーション【ママ】は上手に踊れるが、作品の中で役を理解して踊るダンサーが少なくなっているように思います。(宮城)
- ・コンクールの乱立によりコンクールの結果が即海外で通用してしまうかの様に思い込む風潮がある。Va<sup>22</sup>がうまく踊れる事がバレエの上達だと考え、親子で勘違いしてしまう。(滋賀)
- ・コンクール用の Va は回数をこなしているのに、よく踊っているがシンプルに「グリッサード・グラン・パ・ド・シャ」のステップが全然できない子たちが多くてほんとうにビックリ！！これでコンクール入賞か？と信じられない。(大阪)
- ・1 曲のヴァリエーションを練習して、コンクールに入選したからと言ってバレエの本質は、全く理解出来ません。(鹿児島)

第 2 は、コンクールを目指すため指導が拙速になり、低学年の生徒に必要な基礎訓練が疎かになるばかりか、身体的にも悪影響があるという批判である。例えば、次のような回答には、現場の強い危惧が表明されている。

- ・足の骨の形成がなされる 10 才から 11 才までポアントは危険とわかってからかなりの月日がたっているのに現在も低年齢でポアントをはき、コンクールでガンガン踊るといふ風潮がなくなるのがかなしいです。(北海道)
- ・現在、コンクール出場や受賞歴を、評価の基準にする人が多いが、子供の頃のコンクール向けの練習が良くない結果を生むことも多い。間違ったコンクール指向【ママ】が蔓延していると思います。(宮城)
- ・プレコンクールに代表されるように、コンクールのせいもあり、児童へのバレエテクニックの指導が早尚【ママ】過ぎる。(東京)
- ・近年、小学 1、2 年生から出場可能な、コンクール並びにプレコンクールが存在しており、【中略】その頃の学年は、基礎固めの重要な時期であり、無理にヴァリエーションレッスンをしてしまう事で、基礎が疎かになってしまうのではないかが懸念されます。(神奈川)

---

<sup>22</sup> 自由記述では、ヴァリエーションを“Va”と略記する回答が複数見受けられた。

## 第2章 調査・研究の記録

第3は、芸術としてのバレエは、本来的にコンクールのように順位を与える競争に馴染まない、バレエは競技ではないという批判である。例えば、次のような回答である。

- ・日本はコンクールが多すぎます。バレエは競争ではない。(愛知)
- ・コンクールに向けての努力がバレリーナのテクニックの向上に繋がることは確かです。一方では生徒同士で上下を付けてしまう風潮があります。競争心も必要ですが、協調心も舞台創りには必要なものです。(千葉)
- ・バレエは、芸術なので競うものではない事を生徒や親に理解させるべく、周年、公演や発表会では必ず全幕作品に取り組んでいる。(鹿児島)

第4は、一部のコンクールが営利目的に走り、バレエ芸術の普及と発展に逆効果であるという批判である。例えば、次のような回答には、現場の怒りが表明されている。

- ・お金もうけのためのコンクールはやめた方が良いと思います。コンクール多すぎです。(東京)
- ・コンクールがビジネス化している。「ほぼ全員予選通過」＝落選者数名 etc. 【中略】お金儲けの為に全員通過させないでほしい。(東京)
- ・コンクールがコンクール産業化しつつある現状はいかがなものか?…(山梨)
- ・コンクールだらけですが、営利目的又審査員の選定、質等に大いに疑問があります。
- ・金もうけの為のコンクールや、コンクールとつるんだ留学屋さんがはびこっている!(大阪)
- ・昨今の異常なコンクールブームで、【中略】商品化されたコンクールに少しでも規制が設けられることができれば、ありがたいです。(香川)

以上のような現場の見解については、それがどの程度実態を反映しているのか、十分に実証的な分析はまだ行っていない。例えば、営利優先のバレエコンクールが実際に存在しているかどうか、検証していない。しかし、自由記述の回答分析より、バレエ教育の現場でコンクールブームが広く問題視されているという事実が明瞭に浮かび上がってきた。そして、コンクールブームが、バレエ教室で実施するレッスン内容の選好に影響を与えていることは、既述の通りデータから明らかである。推定で年間延べ3万人の生徒が参加するバレエコンクールが、日本のバレエ教育環境の重要な一角を占めていることは間違いない。

自由記述の回答文の内容分析の結果として、コンクールブームの過熱に対し、(1)コンクール出場を意識し過ぎたテクニック偏重、(2)低学年の生徒への拙速な指導、(3)バレエの芸術性の軽視、(4)営利優先のコンクール運営という4つの観点から批判がなされていることが分かった。本グループの活動を通して、日本のバレエ教育環境の改善のために、国内バレエコンクールのさらなる実態分析が喫緊の課題の一つであることが明らかになった。



## 5. 「海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査」 の概要

### 5. 1 調査方法

バレエ環境調査グループは、日本のバレエ環境を相対化して考察するために、海外のバレエ環境の調査も行ってきた。その一環として、第4章で報告した「全国バレエコンクール調査」を契機に「海外バレエ団におけるバレエコンクール出場実態調査」を行った。ただし、今回の調査は、今後調査を継続するための予備的な実施と位置付けて、対象とするバレエ団は世界トップレベルの大規模バレエ団、対象とするバレエコンクールも日本において十分に知名度の高い大規模なものに限定した。

調査の手順は、まずバレエ団とバレエコンクールを選択した。世界トップレベルの大規模バレエ団として選択したのは、次の5つである（丸括弧内に本拠地を示した）。

パリ・オペラ座バレエ団（フランス、パリ）  
 英国ロイヤル・バレエ団（イギリス、ロンドン）  
 ニューヨーク・シティ・バレエ団（アメリカ、ニューヨーク）  
 マリインスキー・バレエ団（ロシア、サンクトペテルブルク）  
 ボリショイ・バレエ団（ロシア、モスクワ）

日本で十分に知名度の高い大規模な国際バレエコンクールとして選択したのは、次の5つである（丸括弧内に開催地、角括弧内に開催頻度を示した）。

ローザンヌ国際バレエコンクール（スイス、ローザンヌ）[毎年]  
 ユース・アメリカ・グランプリ（アメリカ、ニューヨーク）[毎年]  
 モスクワ国際バレエコンクール（ロシア、モスクワ）[4年毎]  
 ヴァルナ国際バレエコンクール（ブルガリア、ヴァルナ）[隔年]  
 ジャクソン国際バレエコンクール（アメリカ、ジャクソン）[4年毎]

次に、各バレエ団の所属ダンサーについて、バレエコンクールに出場した経験の有無を、インターネット上に公開されている情報を精査して調査した。そのうち、上記5つの国際バレエコンクールについては、別途集計を行った。また、各バレエ団には附属バレエ学校があるため、ダンサーのうち附属バレエ学校の出身者か否かを合わせて調べた。

2018年の調査時において、5つのバレエ団に所属しているダンサーは774人であった。このうちボリショイ・バレエ団に関しては、ソリスト以外の168人のダンサーについてインターネット上では十分な情報が集まらなかった。したがって、データの集計は、おもにボリショイ・バレエ団のソリスト以外をのぞく606人について行った。

5. 2 調査結果

表14は、5つのバレエ団について、所属ダンサー数、そのうち附属バレエ学校出身者数、コンクール出場経験が確認できた人数、そのうち5つの国際バレエコンクールへの出場経験者数をまとめたものである。

調査の結果、5つのバレエ団774人のダンサーのうち、103人がバレエコンクールに出場経験があることが分かった。ボリショイ・バレエ団のソリスト以外を除外すると、606人のうち102人（16.8%）である。そのうち5つの国際バレエコンクールの出場経験者は82人（13.5%）で、102人に対して80%を占めている。

バレエ団ごとに比較すると、バレエコンクール出場経験者の割合が最も高いのは英国ロイヤル・バレエ団で、次いでボリショイ・バレエ団のソリストが高い。一方、この割合が最も低いのはニューヨーク・シティ・バレエ団で、次いでパリ・オペラ座バレエ団が低い。ニューヨーク・シティ・バレエ団とパリ・オペラ座バレエ団は、附属バレエ学校出身者の割合が相対的に高く、バレエコンクール出場経験者の割合と附属バレエ学校出身者の割合には、負の相関を見出すことができる。これは、附属バレエ学校出身者以外が当該のバレエ団に入団するための一つの手段として、国際バレエコンクールへの出場と受賞が存在していることを示唆している。

今後は本調査を出発点として、国内外のより多くのバレエ団を対象にダンサーのバレエコンクール出場の実態を調査する予定である。そしてバレエ環境の重要な側面であるバレエダンサーのキャリア形成の実態を解明するとともに、バレエコンクールの望ましいあり方について議論するためのデータを提供することを計画している。

表14 バレエコンクール出場の実態

	パリ・オペラ 座バレエ団	英国ロイヤル ・バレエ団	ニューヨーク・ シティ・ バレエ団	マリインスキ ー・バレエ団	ボリショイ・ バレエ団	
					ソリスト	他
ダンサー数	146人	97人	91人	207人	65人	168人
内附属バレエ 学校出身者数	126人 (80%)	70人 (72%)	84人 (92%)	126人 (60%)	38人 (58%)	(3人)
コンクール出場 経験者数	13人 (8%)	38人 (39%)	2人 (2%)	29人 (14%)	20人 (30%)	(1人)
内ローザンヌ	3人	19人	1人	2人	0人	0人
内ユース・アメリカ	0人	13人	1人	3人	0人	0人
内モスクワ	0人	3人	0人	12人	9人	1人
内ヴァルナ	7人	3人	0人	4人	0人	0人
内ジャクソン	0人	1人	0人	1人	0人	0人
不明	16人	0人	0人	56人	17人	165人

## 資料A. バレエ環境調査グループの作業記録

- 2015 年
  - 11 月 国内のコンクール、バレエ教育機関の情報収集を開始
- 2016 年
  - 2 月 全国バレエ教室データベース、NTT タウンページにデータ照合依頼
  - 3 月 19 日 バレエ教育に関する全国調査、第 1 回打合せ
  - 4 月 全国バレエ教室データベース、精査開始
  - 6 月 2 日 バレエ教育に関する全国調査、第 2 回打合せ
  - 8 月 12 日 バレエ教育に関する全国調査、第 3 回打合せ
  - 8 月末 バレエ教育に関する全国調査、調査票の発送
  - 9 月 16 日 バレエ教育に関する全国調査、業者と集計作業について打合せ
  - 9 月末 バレエ教育に関する全国調査、督促状の発送
  - 10 月 20 日 バレエ教育に関する全国調査、第 4 回打合せ
  - 11 月 28 日 全国バレエコンクール調査、調査票の発送
  - 12 月 18 日 日本音楽芸術マネジメント学会研究大会で研究発表
- 2017 年
  - 2 月 日本音楽芸術マネジメント学会誌へ論文投稿
  - 3 月 舞踊学会『舞踊学』へ論文投稿  
バレエ教育に関する全国調査、協力先へ礼状・調査結果を送付
  - 4 月 全国バレエコンクール調査、協力先へ礼状を送付  
海外バレエコンクール、その他海外バレエ環境の調査を開始
  - 6 月 リーフレット『バレエ教育に関する全国調査 2016』を発行・送付
  - 8 月 全国バレエコンクール調査、打合せ
  - 10 月 全国バレエコンクール調査、業者へ集計作業委託
- 2018 年
  - 1 月 全国バレエコンクール調査、打合せ
  - 4 月 全国バレエコンクール調査、協力先へ調査結果を送付  
海外バレエコンクール、その他海外バレエ環境の調査を再開
  - 8 月 ローザンヌ国際バレエコンクールの調査を開始
- 2019 年
  - 9 月 海外バレエコンクール調査、研究員会議にて調査結果を報告

資料B. 「バレエ教育に関する全国調査」本調査票

1

バレエ教育に関する全国調査 2016

実施時期：2016年9月

実施主体：昭和音楽大学 バレエ研究所

< 注意事項 >

1. このアンケートは、貴教室の代表またはその代理の方がご回答ください。
2. 貴教室でバレエを教えていない場合は、Q1の“2. 教えていない”に○をつけ、ほかの質問には回答せずに調査票をご返送ください。
3. 回答は基本的に、当てはまる選択肢の記号を○で囲んでください。質問によって“(○はひとつだけ)”とあれば択一、“(○はいくつでも)”とあれば複数選択可です。“(あてはまるものすべてに○をつけてください)”とあるものは選択肢にご注意ください。
4. ( ) で示した回答欄は、( ) 内に具体的な数字や語句をご記入ください。数字は、指示がなければすべて**2016年9月の時点**でお答えください。ただし、正確な数字が不明の場合は、**およその数字**でかまいません。
5. アンケートは全部で**4ページ**です。すべてにお答えいただくようお願いいたします。

A. バレエ教育の実施について

Q1. 貴教室では、バレエを教えていますか(他ジャンルの基礎として教えている場合も含めます)。

1. 教えている                      2. 教えていない

※ “2. 教えていない”と答えた方は、Q2以下の質問には答えないで調査票を返送してください。

B. 貴教室について

Q2. 貴教室の経営主体をお答えください。(○はひとつだけ)

1. 個人                      2. 企業                      3. 学校(幼稚園・保育所を含む)  
4. バレエ団                      5. その他 ⇒ 具体的に( \_\_\_\_\_ )

Q3. 貴教室は、いつからバレエを教えていますか。西暦か和暦のいずれかでお答えください。

いずれかに○をつけてください

バレエを教えるはじめた年                      ( 西暦・和暦 \_\_\_\_\_ 年)

Q4. 貴教室には、このアンケートの届いていない別住所の稽古場(バレエを教えている場所)がありますか。ある場合は、いくつあるかをお答えください。(○はひとつだけ)

このアンケートが届いていない

1. ない                      2. ある ⇒ 別住所の稽古場の数( \_\_\_\_\_ か所)

Q4.で、アンケートが届いていない別住所の稽古場が“2. ある”と回答された方へのお問い合わせ

以下の質問では、アンケートの届いた稽古場と届いていない稽古場のすべてについて、まとめてお答えください。数字を答える場合も、合わせた数をお答えください。一方、経営主体が同じであっても、このアンケートが届いている別の稽古場については別々にお答えください。(基本的には、数字が重複しないようにアンケートが届いている稽古場ごとの回答をお願いしております。)

### C. 貴教室のクラス内容について

Q5. 貴教室には、通常のバレエクラスの他に以下のようなバレエクラスがありますか。

通年に限らず独立したクラスとして教えているものも含めてお答えください。(〇はいくつでも)

- |                           |                      |                 |
|---------------------------|----------------------|-----------------|
| a. ストレッチのクラス              | b. ポアントのクラス          | c. プロ志望者向けのクラス  |
| d. ヴァリエーションのクラス           | e. アダージオ(パ・ド・ドゥ)のクラス | f. 大人の初級クラス     |
| g. キャラクターダンスのクラス          | h. ボーイズクラス           | i. 美容や健康のためのクラス |
| j. オープンクラス(1回のみ受講も可能なクラス) | k. コンテンポラリーまたはモダンダンス |                 |
| l. その他 具体的に( _____ )      |                      |                 |

Q6. バレエのクラスのと看、音源は何を使っていますか。(〇はいくつでも)

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| a. ピアノの生演奏             | b. CD・MD・カセットテープなどの録音音源 |
| c. その他 ⇒ 具体的に( _____ ) |                         |

Q7. 貴教室では、バレエの発表会を行いますか。(〇はひとつだけ)

- |       |         |
|-------|---------|
| 1. 行う | 2. 行わない |
|-------|---------|

### D. 貴教室のバレエ教師について

Q8. 貴教室でバレエを教えているレギュラー(定期的な)教師は何人ですか。(アンケートが届いていない別住所の稽古場があれば、合わせてお答え下さい。)

教師数 ( \_\_\_\_\_ 人)

Q9. 貴教室にはバレエ団または舞踊団に所属している(したことがある)バレエ教師はいますか。ここでバレエ団とは、発表会以外に定期的にバレエの有料公演を行っている団体(海外を含む)とします。(あてはまるものすべてに〇をつけてください)

- |                                 |
|---------------------------------|
| a. 上記にあてはまるバレエ教師はいない            |
| b. バレエ団に現在所属しているバレエ教師がいる        |
| c. バレエ団にかつて所属していたバレエ教師がいる       |
| d. バレエ団以外の舞踊団に現在所属しているバレエ教師がいる  |
| e. バレエ団以外の舞踊団にかつて所属していたバレエ教師がいる |

Q10. 海外には、国家や国際的な組織が認定するクラシック・バレエの指導者資格がありますが、貴教室にそのような資格を持っているバレエ教師がいますか。  
(あてはまるものすべてに○をつけてください)

- a. バレエ指導者資格を取得した教師はいない ⇒ Q13 へ
- b. バレエ指導者資格を取得した教師がいる ⇒ Q11 へ
- c. バレエ指導者資格の取得を考えている教師がいる ⇒ Q12 へ

Q11. Q10で“b. バレエ指導者資格を取得した教師がいる”と答えた方にお尋ねします。  
具体的な資格名をお答えください。複数ある場合は、すべてお答えください。

[ ]

### E. 貴教室の生徒について

Q12. 現在、バレエのクラスを受けている生徒は何人いますか。(年齢を問いません。また、アンケートが届いていない別住所の稽古場があれば、合わせてお答え下さい。)

生徒数 ( \_\_\_\_\_ 人)

Q13. 現在、バレエのクラスを受けている生徒のうち、男性は何人いますか。男子生徒がない場合は、0人とご記入ください。(年齢を問いません。また、アンケートが届いていない別住所の稽古場があれば、合わせてお答え下さい。)

男子生徒数 ( \_\_\_\_\_ 人)

Q14. バレエのクラスを受けている生徒の年齢層をお答えください。(○はいくつでも)  
また、いちばん生徒数の多い年齢層に二重丸(◎)をつけてください。(◎はひとつだけ)

- |           |           |        |          |
|-----------|-----------|--------|----------|
| a. 3歳以下   | e. 小学5・6年 | i. 30代 | m. 70代   |
| b. 4歳～就学前 | f. 中学生    | j. 40代 | n. 80代以上 |
| c. 小学1・2年 | g. 16～19歳 | k. 50代 |          |
| d. 小学3・4年 | h. 20代    | l. 60代 |          |

Q15. これまでに国内外のバレエコンクールへ出場した生徒はいますか。(○はひとつだけ)

- 1. いる ⇒ Q16 へ
- 2. いない ⇒ Q18 へ

Q16. Q15で“1. いる”と答えた方にお尋ねします。昨年度(2015年4月～2016年3月)は、何人の生徒が国内外のバレエコンクールに出場しましたか。

コンクールに出場した生徒数 ( \_\_\_\_\_ 人)

Q17. Q16で、昨年度コンクールに出場した生徒が1人以上いると答えた方にお尋ねします。そのコンクール名をお答えください。複数ある場合は、すべてお答えください。

( \_\_\_\_\_ )

Q18. 貴教室の生徒または元生徒(出身者)で、現在、海外のバレエ学校またはバレエ団に所属している人はいますか。(あてはまるものすべてに○をつけてください)

- a. 現在、海外のバレエ学校、バレエ団に所属している(元)生徒はいない ⇒ Q20へ
- b. 現在、海外のバレエ学校に所属している(元)生徒がいる ⇒ Q19へ
- c. 現在、海外のバレエ団に所属している(元)生徒がいる ⇒ Q19へ

Q19. Q18で、bまたはcと答えた方にお尋ねします。具体的な学校名、団名をお答えください。

( \_\_\_\_\_ )

#### F. 最後に

Q20. よろしければ、日本のバレエ教育について、あるいはこのアンケート内容について、ご意見、ご感想、ご要望などを、自由にお書きください。(別紙に書いていただいても結構です。)

アンケートは以上です。ご協力いただき、誠にありがとうございました。  
もしよろしければ貴教室の案内書・パンフレット等を返信用封筒に同封していただくと幸いです。





# 卷末資料

---

外部評価委員による評価



## 昭和音楽大学バレエ研究所

### 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「バレエ情報センター機能の構築」（平成 27 年度～令和元年度）

### 外部評価委員による評価表

評価対象：昭和音楽大学バレエ研究所の文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「バレエ情報センター機能の構築」における平成 27 年～ 30 年評価日までの活動

評価日：平成 30 年 10 月 12 日

外部評価委員 名前：長野 由紀

#### 1. 研究プロジェクトの内容、プロジェクトの進捗状況等について

##### バレエ情報・資料整理グループ

国内のバレエ関連の書籍、雑誌、および映像資料（DVD 等）については、過去に発行されたものは網羅的に収集されよく整理されてアーカイブとして完成に近い域に達し、今後の新刊の入手・整理も問題ないと思われる。海外書籍も、英語の主要な事典類は漏れがない印象で、今年度のこの分野の拡充が高い見識をもって行われたのが分かる。公演パンフレットについては、編集最終稿の pdf ファイルでの提供を依頼することも検討している等、デジタルアーカイブとの連携も視野に入っており発展性が高い。資料を活用するためには「分類」が重要であるという認識が高く、積極的な取り組みが見られる。

##### デジタルアーカイブグループ

データベース構築に関しては、すでに完成しているプロトタイプ（平成 29 年度）の修正が課題。公開されている HP でも、残念ながら検索機能は実用に足りないが、すでに抜本的な改善に取り組んでいるとのことである。データの拡充は、手入力のたいへんな作業だが、着実に進んでいる様子。古い希少な資料（公演パンフレット、チラシ等）のデジタル化にあたっては、冊子を分解せずにスキャンする経費がかさむ、直接データ化する OCR 技術がまだ実用レベルでないという一般的な問題点が、本プロジェクトにおいても壁となっていることが感じられた。

今年度のこのグループの大きな功績は、企画展『日本におけるバランシン』（平成 29 年 8 月 5、6 日、新国立劇場オペラパレス）だろう。20 世紀でもっとも重要な振付家の一人であるジョージ・バランシンの作品について、日本での上演史を研究所のデジタルアーカイブ、公演パンフレット現物、関係者インタビュー他の映像（オーラル・ヒストリー充実の一環として）等の展示を通じて多角的に取り上げたもので、視覚的にも工夫がなされ、資料性の高さに加えて魅力的な展示で多くの来場者を得た。研究者、一般を問わず、当研究所の存在のアピールの一助にもなったのではないかと。

### バレエ環境調査グループ

バレエの芸術的な活動（公演等）は比較的目に見えやすいが、それに携わるダンサーの育成の実態は数値化されてこなかった。当研究所はすでにバレエ教室数、学習者数、国内におけるバレエコンクールおよびその参加者数に関する調査を完了し、今後は海外コンクールに関する調査を行う。海外コンクールは、著名バレエ学校への留学等、プロのダンサーとしてのキャリア形成に直結することも多い。その受賞歴と活動の関係を精査することは、ひるがえって、いまだ職業として確立しづらい国内でのダンサーの活動のあり方に有効な示唆を与える、あるいは「イメージ先行」で騒ぐ傾向の強いメディアに対し正確な理解を促す資料となることが期待される。

## 2. 研究体制、研究設備等について

所長の小山久美氏以下 11 名が主な研究者として記載され、それぞれに担当課題と役割を担っている。実質的に全プロジェクトの調査・分析等の中心となっていると思われる尾崎瑠衣氏はじめ、専従で仕事を進めているメンバーの専門性と問題意識がたいへん高く、そのことが、プロジェクトの効率的な進行を可能にしているのは間違いない。

## 3. その他

各グループとも過去の年度ごとの活動計画を確実に完了し、発展的に本年度の事業に取り組んできた様子が伺える。グループ間の連携もよく効率的である。その実績は最高ランクの評価に値するが、今後の課題があるとすれば、当研究所の母体である昭和音楽大学の図書館との連携、当研究所の存在を広くアピールすることの二点により、資料・情報等の活用性を高めることだろう。将来的には、バレエ関係の他の団体との協力体制をしっかりと確立し、当研究所が主導して日本のバレエ研究が発展することを期待している。

## 昭和音楽大学バレエ研究所

### 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「バレエ情報センター機能の構築」(平成27年度～令和元年度)

### 外部評価委員による評価表

評価対象：昭和音楽大学バレエ研究所の文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「バレエ情報センター機能の構築」における平成27年～30年評価日までの活動

評価日：2018年12月10日(月)

外部評価委員 名前：芳賀 直子

#### 1. 研究プロジェクトの内容、プロジェクトの進捗状況等について

##### バレエ情報・資料整理グループ

大変な作業であることは、自分がかつて整理していた資料からも理解できるが、すぐに探すことのできる状態になっているプログラムなどの確に整理されていて感心した。バレエ情報については今後も拡充されるとの事で、日本にそうした情報を集約している場所がない現在非常に重要な仕事であることは間違いないでしょう。

今後の課題はどこまでデジタル化するのか、またどこまで資料を受け入れるのか、収蔵の焦点をどこに絞るかといったことでしょうか。日本のバレエ史はまだしっかりとした本が出ていないほど情報収集が難しい現在、日本のバレエ史関連の集成的なコレクションを形成できれば研究拠点としてこれほどふさわしいコレクションはないのではないかと考えます。今後にも期待しております。

##### デジタルアーカイブグループ

今後も更に重要になる部分でしょう。すでにサイトも稼働しており、公演データベースは非常に貴重な資料であり、検索ができるなど研究者にとっても、バレエの特定の作品、人物の活動を調べるにも非常に有用なデータベースです。既存の他のコレクション、またその連携をどこまで広げるかは簡単ではないものの、音楽や宝塚、個別の作家を中心としたコレクションにもバレエ書籍や資料が残されている場合があり、そうしたものも横断的に検索することができたら理想的でしょう。

また海外から日本のバレエ調査の際に活用できるデータも提供も可能だと考えます。オーラルヒストリーについても意義深いと思われます。差支えがなければ音声データとしても公開されたらより研究の助けになるかもしれません。

##### バレエ環境調査グループ

この部分はすでに大きな成果を上げている事が顕著。これまで個人でも研究者レベルでも

なかなか難しかったバレエに関わらず様々なデータを調査していく作業は今後も是非続けて欲しい。続けることによって見えてくる現状の裏付けも発見できるのではないのでしょうか。作品毎の上演回数や上演カンパニー、またもっとも最近のバレエ学校の規模が現在に向かうにつれ小規模かしている事、その年齢分布など様々に読み解くことのできるデータを調査していて、今後にも期待がもてる。また、コンクールの日本での実施データなど切り口も意義深い。

日本においてバレエ移入初期にはバレエ・リュス作品も上演していたこともあり、そうしたバレエ・リュスの作品についての調査も期待しております。

## 2. 研究体制、研究設備等について

設備については恐らく現場としてはより広いスペース、データ化用の機材が望まれるでしょう。ですが、現状でも面積、収納共にリアリティのある規模であり、設備と感じられた。ただ、今後コレクションが増えた際の保管方法、保管場所などは拡張する必要が出てくるかもしれない。

閲覧スペースについては、より個別の空間があると調査者によっては落ち着いて仕事ができるのではないのでしょうか。

## 3. その他

関東、東京近郊でこのようなコレクションがあり、閲覧可能であるということはもう少し広く知られ、研究者たち、その卵たちに活用されることを願います。かつて自分が資料のために海外へまで行っていたことを考えると資料へのアクセスは年々容易になってきています。それによってバレエ、ダンス研究者になる道が少しでも踏み込みやすいものになればと願ってやみません。また実演家が歴史やその来歴に触れようと思った時にもその助けになるようになれば、そうした人達にもアクセサブルな場になればと願っています。

以上

平成 27 年度～令和元年度 文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「バレエ情報センター機能の構築」報告書

---

発行日：2020 年 3 月発行

発 行：学校法人 東成学園

昭和音楽大学 バレエ研究所

〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-6

TEL 044-953-9880 FAX 044-953-9901

E-mail ballet@tosei-showa-music.ac.jp

URL <https://www.tosei-showa-music.ac.jp/balletresearch/>

---

本報告書の全部または一部を、著作権法で定められている範囲を超えて無断で複製・転載・公衆送信等を行うことはできません。

非売品









Showa  
ACADEMIA  
MUSICAE